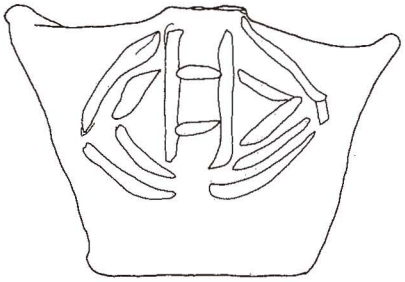
富江町文化財調査報告書　第１集

宮下貝塚

（みやしたかいづか）



1998

長崎県富江町教育委員会

富江町文化財調査報告書　第１集

宮下貝塚

（みやしたかいづか）

1998

長崎県富江町教育委員会

発刊にあたって

このたび平成７年に町道西新宮下４号線の改良工事に先立って実施した，宮下貝塚の発掘調査報告書を刊行することになりました。

宮下貝塚は富江町松尾郷宮ノ下に所在する縄文時代の貝塚として，長崎県内はもとより九州地方においても著名な遺跡であります。

今回町道の拡幅工事にあたり，町道部分と拡幅される宅地部分の調査を実施いたしました。調査は真冬の厳寒期にあたり，作業にあたられた方々には大変お世話をおかけいたしました。調査の結果は前回の調査を補強するものでありましたが，大量の土器・石器をはじめ骨角器や獣骨・貝類などを取り上げて分析の対象とすることができました。

その結果，五島地方の縄文土器の編年の大綱を提示できるとともに，宮下貝塚における縄文人の生活の一端を垣間見ることができたものと思います。

最後になりましたが寒いなか，今回の調査にあたられました県教育委員会文化課，調査に従事された作業員の方々のご協力に深く感謝いたします。

本書が，富江町の文化財の保存・顕彰および地域の学習資料として，活用いただければ望外の喜びとするところであります。

平成10年３月31日

富江町教育委員会

教育長　榎　津　幸　男

例　　言

1．本報告は平成７年度に実施した長崎県南松浦郡富江町宮ノ下に所在する宮下貝塚の緊急発掘調査の報告書である。

2．調査は富江町教育委員会が事業主体となり，長崎県教育庁文化課が調査を担当した。調査は平成８年１月16日から１月31日まで実施した。

3．調査主体者および担当者は次のとおりである。

調査主体	富江町教育委員会	教育長	榎津　幸男
	同	事務局長	山本　政義（平成８年３月31日まで）
	同	事務局長	吉田　孝司（平成８年４月１日～）
	同	社会教育主事補	松本　毅延（故人）
	同	社会教育主事補	松山　忠男（平成８年４月１日～）
調査担当	長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	川道　　寛
	同	文化財調査員	塩塚　浩一（現平戸市教育委員会嘱託）

4．遺構・遺物の実測は古門雅高・川脇いつ子・森崎京子・網谷泰代・荒木美保・徳永妙子・小林利恵子・塩塚・川道が行い，製図は渡辺洋子・斉藤いづみ・近藤千鶴・川道が行った。

5．本書における遺物・写真・図面等は長崎県教育庁文化課立山分室で保管している。

6．本書の執筆は，古門雅高，宮路淳子，川道　寛が行った。それぞれの分担は次のとおりである。

第Ⅲ章第２節の１および第Ⅳ章第２節……古門
第Ⅲ章第２節５の(1)……宮路
その他……川道

7．本書を作成するに当たって多くの方々から御教示・御援助を得た。改めて謝意を表します。また富江町教育委員会の松本毅延氏は調査終了後の平成８年８月に死去されました。調査にあたってはお世話になることばかりでした。つつしんで弔意を表します。

下川達彌（長崎県立美術博物館次長），水ノ江和同（福岡県教育委員会），分部哲秋（長崎大学医学部），高野晋司（長崎県教育委員会），宮崎貴夫（原の辻遺跡調査事務所），渡邊康行，稲津暢洋（熊本市教育委員会），長崎大学医学部解剖学第二教室，寺田貴子（玉木女子短大），松崎義治（福江市教育委員会），田中榮次（地元郷土史家），

8．本書の編集は川道による。

本　文　目　次

第Ⅰ章　位置と環境（川道）
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……1
第Ⅱ章　調査の経緯（川道）……3
第Ⅲ章　調査の概要
　第１節　層位と遺構……4
　　１．層位（川道）……4
　　２．遺構（川道）……5
　第２節　出土遺物……6
　　１．土器（古門）……6
　　２．石器（川道）……34
　　３．骨角器（川道）……42
　　４．装身具（川道）……42
　　５．自然遺物……43
　　(1)　宮下貝塚出土の動物遺存体（宮路）……43
　　(2)　貝類（川道）……49
第Ⅳ章　まとめ
　第１節　宮下貝塚をめぐるいくつかの問題（川道）……50
　　１．宮下貝塚とその周辺の環境（川道）……50
　　２．遺物分布の問題（川道）……50
　　３．宮下貝塚の盛衰（川道）……52
　　４．縄文時代後期中葉の遺跡分布（川道）……52
　第２節　宮下貝塚出土の縄文中・後期土器について（古門）……56
　　１．第Ⅲ群土器（船元式併行土器）について（古門）……56
　　２．第Ⅳ群土器（北久根山第二型式土器）について（古門）……57
　　３．第Ⅲ群土器（北久根山第一型式土器）について（古門）……58

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……2
第２図　調査区配置図……3
第３図　土層図……4
第４図　石斧集積遺構図……5
第５図　土器集積遺構写真……5
第６図　縄文土器(1)（ｓ＝1/3）……6
第７図　縄文土器(2)（ｓ＝1/3）……7
第８図　縄文土器(3)（ｓ＝1/3）……8
第９図　縄文土器(4)（ｓ＝1/3）……9
第10図　縄文土器(5)（ｓ＝1/4）……11
第11図　縄文土器(6)（ｓ＝1/4）……13
第12図　縄文土器(7)（ｓ＝1/3）……14
第13図　縄文土器(8)（ｓ＝1/4）……15
第14図　縄文土器(9)（ｓ＝1/3）……16
第15図　縄文土器(10)（ｓ＝1/4）……18
第16図　縄文土器(11)（ｓ＝1/4）……19
第17図　縄文土器(12)（ｓ＝1/4）……21
第18図　縄文土器(13)（ｓ＝1/4）……22
第19図　縄文土器(14)（ｓ＝1/4）……23
第20図　縄文土器(15)（ｓ＝1/3）……25
第21図　縄文土器(16)（ｓ＝1/4）……26
第22図　縄文土器(17)（ｓ＝1/3）……27

第23図　縄文土器⒅（s＝1/3）……28
第24図　縄文土器⒆（s＝1/3）……29
第25図　縄文土器⒇（s＝1/3）……31
第26図　石器(1)（s＝2/3）……35
第27図　石器(2)（s＝1/2）……36
第28図　石器(3)（s＝1/2）……37
第29図　石器(4)（s＝2/3）……37
第30図　石器(5)（s＝1/2）……39
第31図　石器(6)（s＝1/3,1/2）……40
第32図　石器(7)（s＝2/3）……40
第33図　石器(8)（s＝1/2）……40
第34図　骨角器（s＝2/3）……42
第35図　装身具（s＝2/3）……42
第36図　貝輪（s＝1/2）……42
第37図　Bトレンチから出土したアシカ……44
第38図　ニホンジカの生息地域……44
第39図　長崎県内から出土した海獣類……45
第40図　ニホンアシカの生息地域……45
第41図　周辺地形図……50
第42図　宮下貝塚出土土器分析グラフ……51
第43図　縄文後期中葉段階遺跡分布図……53
第44図　佐賀貝塚出土北久根山第二型式土器（s＝1/6）……58

表　目　次

第１表　土器観察表(1)……31
第２表　土器観察表(2)……32
第３表　土器観察表(3)……33
第４表　石器観察表……41
第５表　宮下貝塚出土の動物遺存体……47
第６表　出土した魚類……47
第７表　出土した哺乳類……47
第８表　ニホンジカ計測値……48
第９表　貝類組成表……49
第10表　宮下貝塚土器統計表……51
第11表　縄文後期中葉遺跡地名表……53

図　版　目　次

図版１　調査風景……65
図版２　土層断面，遺物出土状態……66
図版３　出土遺物①……67
図版４　出土遺物②……68
図版５　出土遺物③……69
図版６　出土遺物④……70
図版７　出土遺物⑤……71
図版８　出土遺物⑥……72
図版９　出土遺物⑦……73
図版10　出土遺物⑧……74
図版10　出土遺物⑨……74
図版11　動物遺存体……75

第Ⅰ章　位置と環境

第１節　地理的環境

遺跡の所在する富江町は，福江島の南西部に位置し，福江島では福江市に次ぐ規模の自治体で，面積は49.43㎢（Ｈ８.10.１），人口は6,760人（Ｈ６.10.１）である。

富江町は福江島東部山地を境として西部を玉之浦町，北部を福江市に接し，大きく二つの地形に区分される。一つは北部から西部にかけての基本地質を五島層群とする400m前後の山々が連なる福江島西部山地である。もう一つは噴石丘である只狩山（標高84m）を給源とする標高50m以下の起伏に乏しい低平な富江溶岩台地である。只狩山は低起伏火山地で、ドーム状を呈し，火口は山体に比較して大きく、南に開口している。玄武岩を基盤とする台地には，県の天然記念物である「井坑」などの溶岩トンネルがある。両者の接点は町の北端で繁敷山地と松尾川谷底平野を介して接触し，その間に狭小な谷底平野が展開している。河口から田野江にかけての海岸は砂礫丘となり，その一部は遺跡の東北側にまで及んでいる。東シナ海に突き出た半島の海岸部は大部分が溶岩の海没地形で海蝕崖が形成されておりその景観は荒々しく，和島・多郎島の岩礁美は西海国立公園に指定されている。

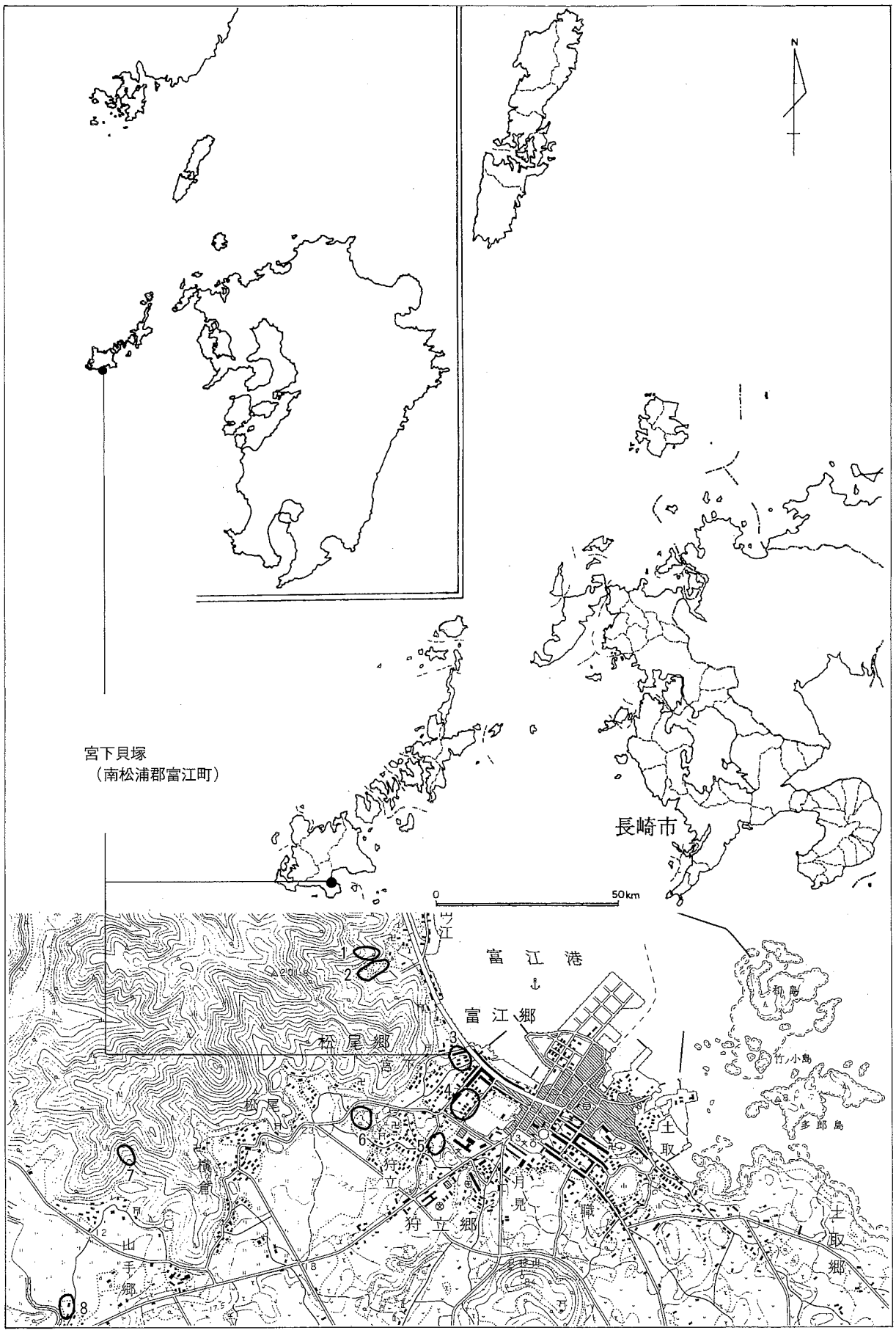
気候は対馬海流の影響をうけて穏やかな海洋性気候で，降水量も年間2000㎜以上で長崎県本土よりやや多い。

第２節　歴史的環境

富江町には，27箇所の遺跡が周知されている。時代別では旧石器１，縄文14，弥生１，古墳０，古代０，中世１，近世12という割合（延べ数）である。時期別でみると縄文時代と近世に偏りがあり，地域別では大部分が只刈山を中心とする溶岩台地に偏在している。

旧石器時代はあげられているのは船森遺跡１箇所にすぎず，しかも定形石器が出土しているわけでもないため疑問点もある。続く縄文時代の遺跡は遺跡の数も圧倒的に多くなり町内全域に分布する。半島部の低平な溶岩台地には溶岩トンネルができており，それらの中には県の天然記念物に指定されているものもあるが，その一つ井坑洞穴から押型文土器が出土したという記録がある。富江町を代表する遺跡としては女亀遺跡と今回報告する宮下貝塚の２遺跡があげられる。女亀遺跡は地元の小西元氏によって，数百点を越す「石鋸」が採集されたことで夙に知られており，その小西コレクションの一部は東京国立博物館に寄贈されていることが台帳に記載されている。そのほかの縄文時代の遺跡は遺物散布地であり，時代のわかる土器の出土は少ない。

弥生時代になると遺跡数は減少しわずか３遺跡となる。いずれも土器片の出土でかろうじて弥生時代とわかる程度で本格的な遺跡は発見されていない。古墳時代から古代にかけては現在のところ遺跡は一つも発見されていない。中世の遺跡として県の史跡に指定されている勘次ヶ城跡（山崎の石塁）がある。町の南部の海岸に人頭大の火山礫で砦状に構築されている。倭寇の根拠地であったという口碑もある一方，松浦党の田尾氏との関連も考えられている。



第１図　遺跡位置図

第II章　調査の経緯

宮下貝塚は，戦前津田繁二が発表した地名表（津田1940）に遺物散布地として富江町「水源地前方の田地から宮の下」とあるのを初見とするが、遺跡の詳細については記述されていない。

その後昭和30年代半ばに町道西新宮下線に沿って簡易水道が敷設され，宮下貝塚のほぼ中枢部を幅１ｍで縦断している。工事は地山面に到達する深さまで及んでいることが確認されたが，当時遺跡発見の報告はなく，水道管を敷設する際に掘り起こされた排土は埋土として使われたらしい。

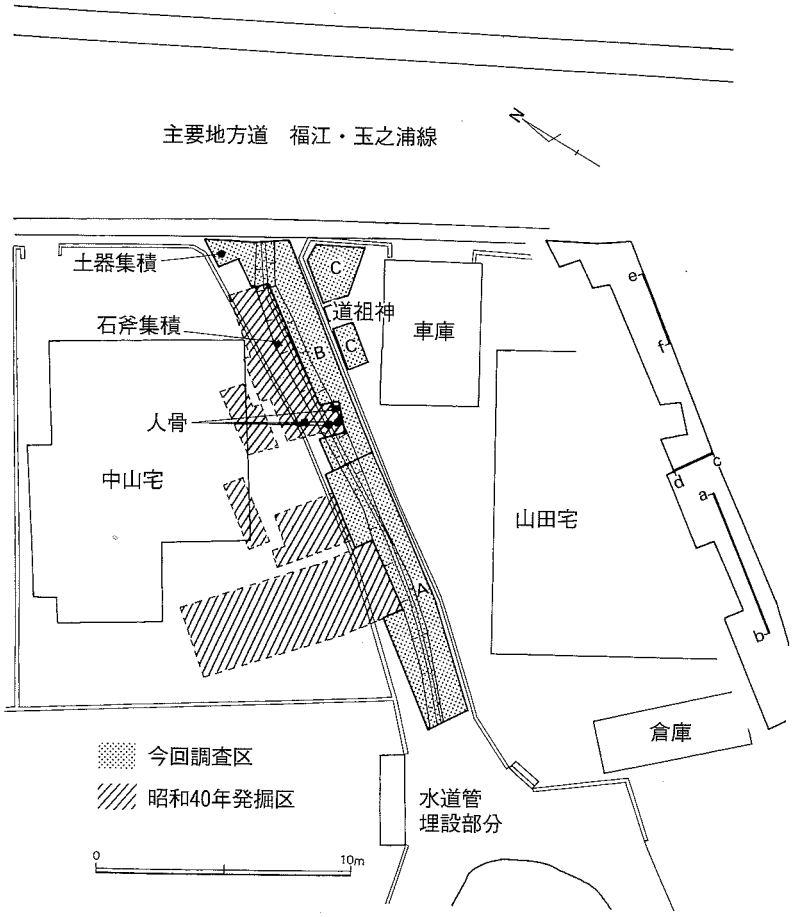
昭和39年９月富江町松尾郷宮の下の家屋新築工事によって再び貝層が撹乱され，縄文時代後期の土器・石器とともに獣骨・貝類が大量に採集された。それを知った長崎大学医学部解剖学第二教室は翌40年（1965）４月予備調査を実施するとともに，同年夏，長崎県教育委員会・富江町教育委員会・長崎大学医学部・別府大学の４者は共同主催で本調査を実施した。調査地点は貝塚のほぼ中央部にあたる中山宅の庭と町道にかけての一帯で，面積は約50m²であった。調査の記録は『図録編』と『解説編』として２冊の報告書として刊行されている。

長崎県教育委員会は平成３年（1991）から重要遺跡範囲確認調査を始めた。宮下貝塚は初年度の対象遺跡となり，調査された。調査は１×４ｍを基本とする試掘壙を11箇所設定し，遺跡の広がりと内容の確認を主眼にして実施された。その結果，遺跡の広がりがある程度把握され，遺跡周辺の地形の細かい情報を得ることができた。貝塚の範囲は，昭和40年調査地点を中心とする長径60ｍ×短径30ｍの楕円形に広がることが想定された。包含層の広がりは貝塚を取り込みさらに南西方向の溶岩台地高台側に展開していくものと思われるが未調査のために確認することはできない。また遺跡の東北側に浜堤が存在することが明らかになった。浜堤は田ノ江方面へのびており，松尾神社側は後背湿地になっていることが明らかになった。

富江町のこの地区は町道が狭くしかも火山岩やブロック塀で区画されているため日常生活や防災の障害となっていた。そのため町では町道の拡幅改良工事を実施してきたが，今回の西新宮下４号線の工事で宮下貝塚の中心部を通ることとなり，工事に先立って緊急調査を実施することとなった。

今回の調査は，道路改良工事に伴うもので発掘も道路幅に限定されており，75m²と狭小なものにとどまった。調査区は主要地方道福江・玉之浦線に向かって道なりに細長い長さ10m幅２ｍのトレンチを設定し，Ａ・Ｂ・Ｃ区の都合３トレンチに分区した。

調査に先立ってコンクリート舗装を除去し，ブロック塀を壊したが，塀の基部は頑丈で除去することはできなかった。重機による舗装部分の取りのぞきが終了すると，その下はすぐに貝層となっており多くの貝や土器・石器が出土する状態であった。さらに調査が進むにつれて，昭和30年代初期



第２図　調査区配置図
（資料提供　長崎大学医学部解剖学第二教室）

に埋設された水道管が道路のほぼ中央を通っていることが確認された。またブロック塀の基礎工事による撹乱があることや昭和40年の発掘区も明らかになった。その結果，本来の原位置を保つ包含層は水道管工事および昭和40年調査区を除けば道路部分では細長い帯状に残存することが確認できた。

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　層位と遺構

１．層位

今回の調査は道路部分に限定され，しかも水道管敷設および過去の調査によって相当撹乱されており，また調査区の両脇はブロック塀の倒壊の恐れもあったため，土層断面図は部分的にしかとれなかった。

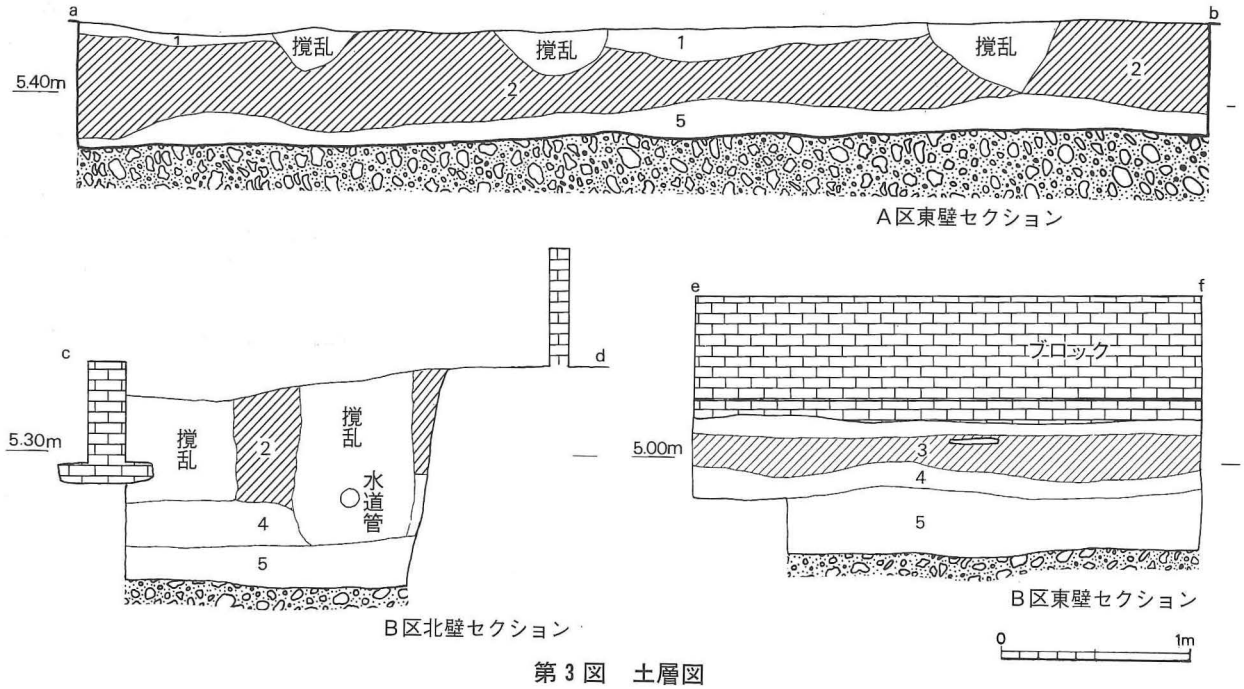
第１層　黒色粘質土層。撹乱層で，破砕された貝類とともに縄文土器・石器などが大量に含まれている。昭和40年の調査では０層とされている土層に該当するものと思われるが，今回の調査区では水道管敷設工事および道路舗装工事によってその大部分は削平されていた。

第２層　混貝黒色粘質土層。過去の発掘でＩ層とされている層である。土よりも貝の方が多く，溶出したカルシウムは土器・石器に付着するほどである。土層は南側に厚く堆積する傾向にある。縄文時代後期の包含層で，スガイを中心とする大量の貝類・シカなどの獣骨・魚骨とともにおびただしい土器・石器・貝輪などが出土した。土器は北久根山式を主体にして鐘崎式・西平式などがある。Ａ地点側に分厚く堆積する。

第３層　混貝黒褐色土層。昭和40年調査のⅡ層に該当する。２層に比べて貝の量は少なく，土壌は砂質を帯びている。縄文時代後期初頭の坂の下式土器が出土する。主としてＢ地点側の標高の低い方に堆積する。

第４層　明褐色粘質土層。上層から落ち込んだと思われる若干の貝を含むが本来は貝層ではない。玄武岩の風化礫を多く含み，粘性が極めて高い。中期前半の船元式系土器が出土する。この土層は南側ではきわめて薄く，海側に標高が下がるにつれてその厚みが増す傾向にある。

第５層　明茶褐色粘質土層。玄武岩の風化礫を大量に含む。Ａトレンチにはほとんどみられない。



第３図　土層図

B・C区においては相当に厚く堆積する。土層の最上部に少量の轟式土器が張り付くように出土する。中位から下位は無遺物層である。

前述したようにA地点とB地点を通した土層断面図を作成できなかったために十分なデータを得られなかった。しかし不十分ながら次のようなことは指摘されるであろう。

①貝層については，A地点は縄文時代後期中葉段階，B・C地点は縄文時代後期前葉段階と位置づけることができよう。

②基盤である溶岩の岩盤の傾斜からすればA地点かB地点のどこかで段差を生じることが推測される。

2．遺構（第5図）

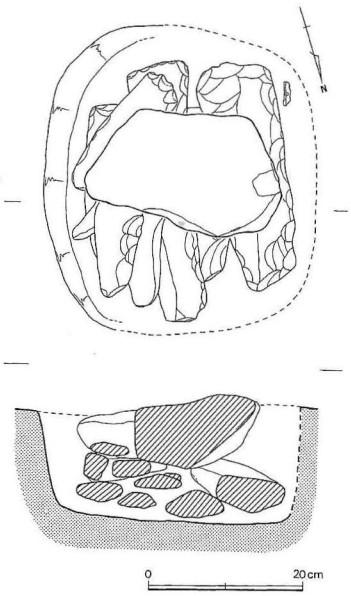
狭い調査区と水道管敷設工事による撹乱に災いされたため，遺構は土器を集積したものが1基確認されたにすぎなかった。予想された人骨の出土はみられず，また散乱人骨もわずか1点であった。

【土器集積遺構】

B区東北側のはずれから土器を集積した遺構が検出された。地山を浅い皿状に掘りくぼめ，一面に小石を敷き詰めた上に，縄文時代後期初頭坂の下式土器の深鉢一個体を破片にして積み重ね，一見小マウンド状を呈している（第11図84）。土器片は丁寧に割られており，最下部には10cm×6cmほどの口縁部破片を表側を上にして水平に置く。ついでその上部に口径の大きな土器の大破片を，口縁部を正反対の向きに丁寧に重ね合わせて，さらにその上に胴部破片をそして最後に底部（鯨底）をかぶせるように置いている。覆土はサラサラした黒褐色の砂層で，少量の炭化物が混じっていた。何らかの呪術的な遺構とも考えられるが，寡聞にして例を聞かない。

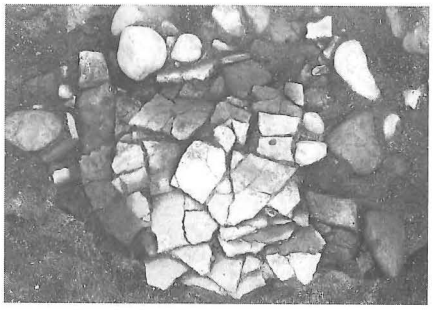
そのほか宮下貝塚からは昭和40年の調査で打製石斧を集積した遺構も検出されている（第4図）。第2層の縄文時代後期の貝層中に構築した50cm×40cmの楕円形を呈する深さ10数cmの土壙に，刃部の向きを揃えて10本の石斧が埋置され，その上に人頭大の礫が置かれていた。石斧の大きさや形態，石質などは変化に富む。

今回の調査で検出された人骨は散乱骨が1点あるのみで，埋葬されたものは検出されなかった。昭和40年の調査で6体の人骨が検出されている。



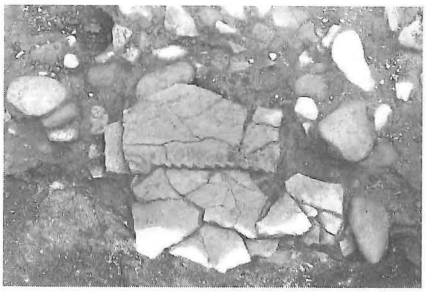
第4図　石斧集積遺構図
（昭和40年調査
長崎大学医学部解剖学第二教室提供）

① 最上部検出状況



② 底部破片をはずした状態

③ 口縁部破片を露出した状況



④ 最下面の状況

第5図　土器集積遺構写真

第２節　出土遺物

１．土器（第６図～第25図）

出土した縄文土器は総数6,000点を数える。そのうち有文土器は530点で，そのうち図版として掲載したものは260点である。出土した有文土器が属すほとんどの型式を報告しているといえよう。

出土した縄文土器を以下のように群別に分群し，説明を加える。なお，個々の土器の詳細については観察表（表１～３）を参照されたい。

第Ⅰ群土器	轟Ｂ式土器	第XI群土器	その他の御手洗Ｃ式・市来式系土器
第II群土器	轟Ｄ式土器	第XII群土器	鐘崎式系土器
第III群土器	船元式併行土器	第XIII群土器	北久根山第一型式土器
第IV群土器	春日式土器	第XIV群土器	北久根山第二型式土器（辛川Ⅰ式併行土器）
第Ⅴ群土器	並木式土器	第XV群土器	その他の北久根山式系土器
第VI群土器	阿高式土器	第XVI群土器	後期無文土器
第VII群土器	坂の下式系土器	第XVII群土器	辛川II式併行土器
第VIII群土器	出水式土器	第XVIII群土器	三万田式土器
第IX群土器	御手洗Ａ式土器	第XIX群土器	型式不明土器
第Ｘ群土器	御手洗Ｃ式土器		

(1)　**第Ⅰ群土器**（轟Ｂ式土器）（第６図１・２）（図版３）

1 は隆帯を貼付したのちに，隆帯頂部をナデるため，頂部が潰れている資料である。内面は貝殻条痕文が施される。**2** も内外に貝殻条痕文がみられるが，隆帯はない。いずれも屈曲形の轟Ｂ式土器と思われる。

(2)　**第II群土器**（轟Ｄ式土器）（第６図３）（図版３）

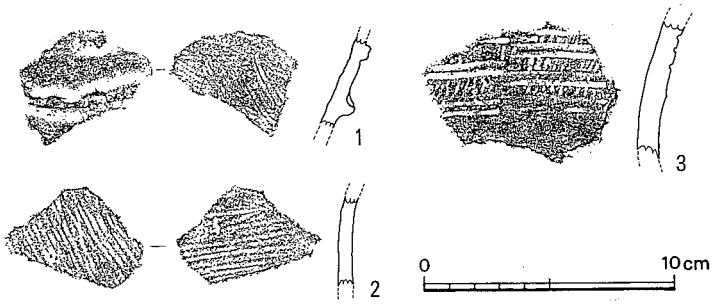
縦位の条痕を地紋とし，半截竹管文を横走させるものである。胎土は第III群土器（船元式併行土器）に類似するが，本群に含めた。瀬戸内系とすれば里木II式系の土器であろう。

(3)　**第III群土器**（船元式併行土器）（第７図４～43）（図版３）

縄文中期前半の船元式土器に併行する土器群である。隆帯の有無，地紋の種類などにより８類に分けた。

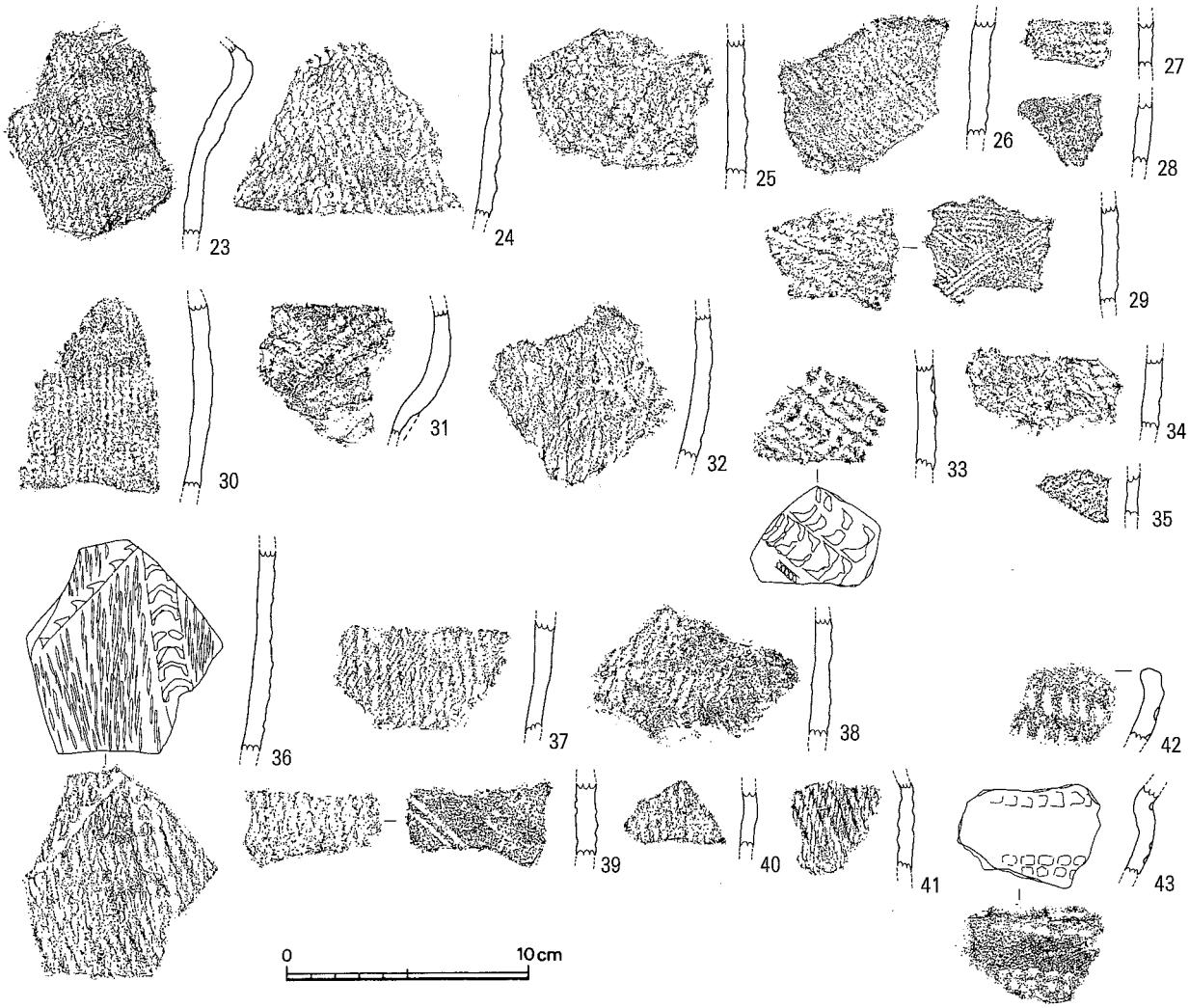
①第１類（4～9）

隆帯をもつ資料のうち，縄文を地紋とするものである。**4** は単節斜縄文（ＲＬ）を地紋とし，垂下隆帯を貼付したのちに，隆帯の輪郭に沿って地紋をナデ消すものである。口唇部には竹管によって沈線を施す。内面は貝殻条痕調整で，口縁内面上部は貝殻条痕をナデ消している。**5** は単節斜縄文（ＲＬ）を地紋とし，口縁の波頂部に「丁」字形に隆帯を貼付し，隆帯上とその周縁に半截竹管文を施している。**6** は単節斜縄文（ＲＬ）を地紋とし，隆帯を貼付して隆帯頂部に連続刺突文を付すものである。**7** は単節斜縄文（ＲＬ）を地紋とし，細い隆帯を貼付し，隆帯の縁辺に半截竹管文を施す。**8** は単節斜縄文（ＬＲ）



第６図　縄文土器(1)（ｓ＝1/3）

第７図　縄文土器(2)（ｓ＝1/3）



第8図　縄文土器(3)（s＝1/3）

を地紋とし，隆帯を貼り付けたのちに隆帯頂部に刺突文を施す。**9**は単節斜縄文（ＬＲ）に隆帯をもつ資料である。

②第2類（10～13）

隆帯をもつ資料のうち，撚糸文を地紋とするものである。このうち**11**はキャリパー形の器形に撚糸文を地紋とし，隆帯を貼付している。隆帯頂部には半截竹管文を押引きする。口縁内端部にも撚糸文を施す。**12**も同様の資料である。**13**は撚糸文を地紋とし，隆帯を貼付するが，隆帯頂部にも撚糸文を施すものである。

③第3類（14・15）

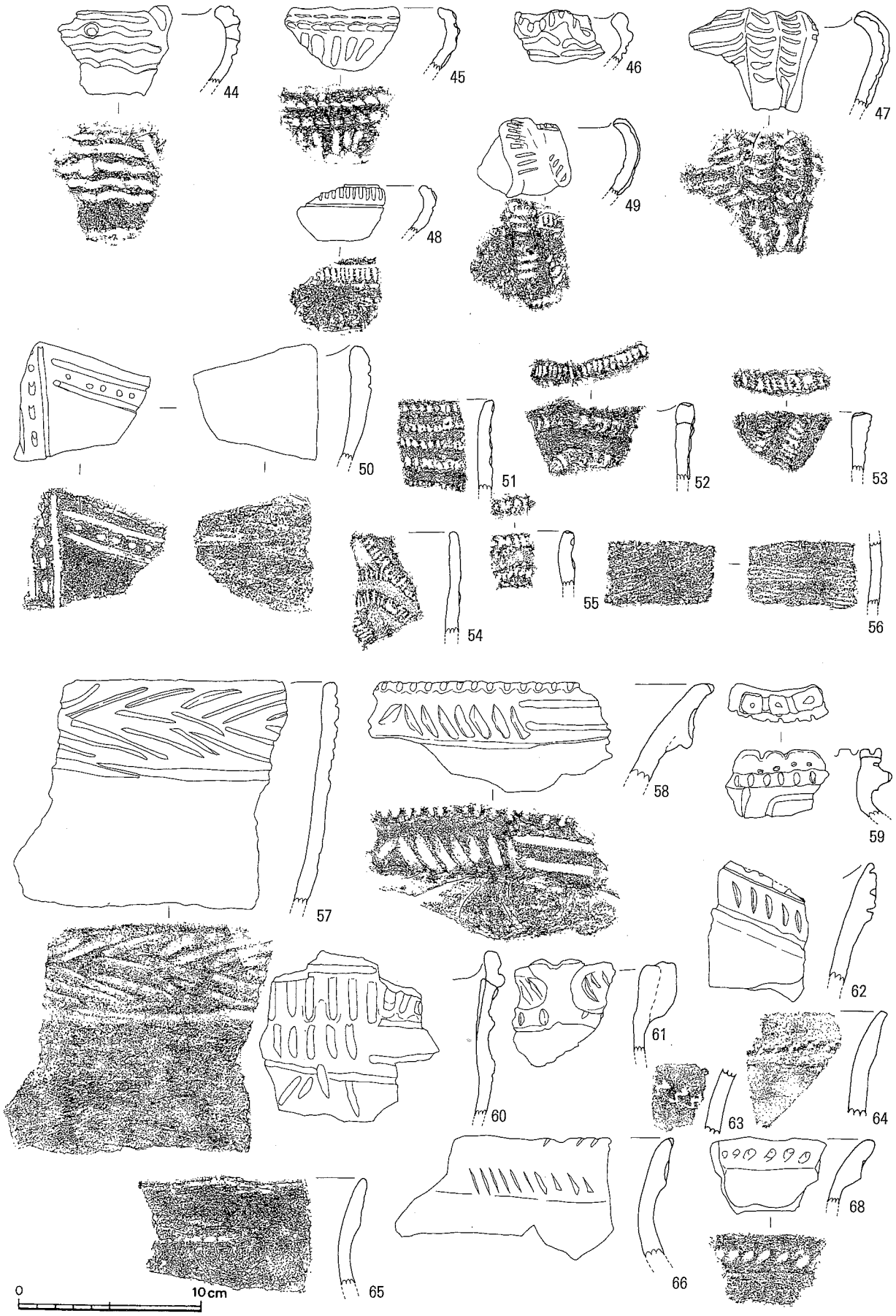
隆帯をもつ資料のうち，条痕を地紋とするものである。**14**は地紋が条痕で，刺突をもつ隆帯が貼付される。**15**は条痕地に隆帯を貼付する資料である。

④第4類（16）

隆帯をもつ資料のうち，刺突文を地紋とするものである。**16**はキャリパー形の口縁に波状口縁をもつと推定される。地紋は刺突文で，山形に隆帯を貼付する。

⑤第5類（17～22）

隆帯をもつ資料のうち，地紋がないものである。このうち**18**は隆帯側縁に刺突文をもち，口縁内端部には縄文が施文される。また，**20**・**22**は隆帯上に半截竹管文を，**21**は隆帯上に刺突文が施される。



第９図　縄文土器(4)（Ｓ＝１／３）

⑥第６類（23～35）

縄文を地紋とするものである。いずれも単節斜縄文（ＲＬ）を地紋とする。このうち**29**は内面が貝殻条痕で調整され，**33**には半截竹管文が施される。

⑦第７類（36～41）

撚糸文を地紋とするものである。このうち**36**には半截竹管文が押引きされる。

⑧第８類（42・43）

刺突文をもつものである。

(4) **第Ⅳ群土器**（春日式土器）（第９図44～50）

いずれもキャリパー形の器形をもつ資料である。**44**は棒状工具により，横位の波状沈線文を施す資料で，補修孔がみられる。**45**は横走する沈線間を刺突文で飾るものである。**46**は口唇部に粘土紐を貼付けて浮文とし，刻みを施し，浮文の下には横位の波状沈線文を施す。**47**は縦位の隆帯間に波状の短沈線を配すものであるが，短沈線はちょうど隆帯頂部のところが波頭となるように描く。**48**は横走する細沈線の間を縦の短沈線で飾るものである。**49**は縦の隆帯頂部に横位の短沈線を施すものである。**50**は前述までの資料とは胎土・色調など異なる資料であるが本群にいれた。口縁部は緩やかに内湾し，２本の沈線間に連続刺突文を施す。内面は貝殻条痕調整で，ナデ消している。なお，**45**・**48**・**49**の胎土には滑石を含む。

(5) **第Ⅴ群土器**（並木式土器）（第９図51～56）

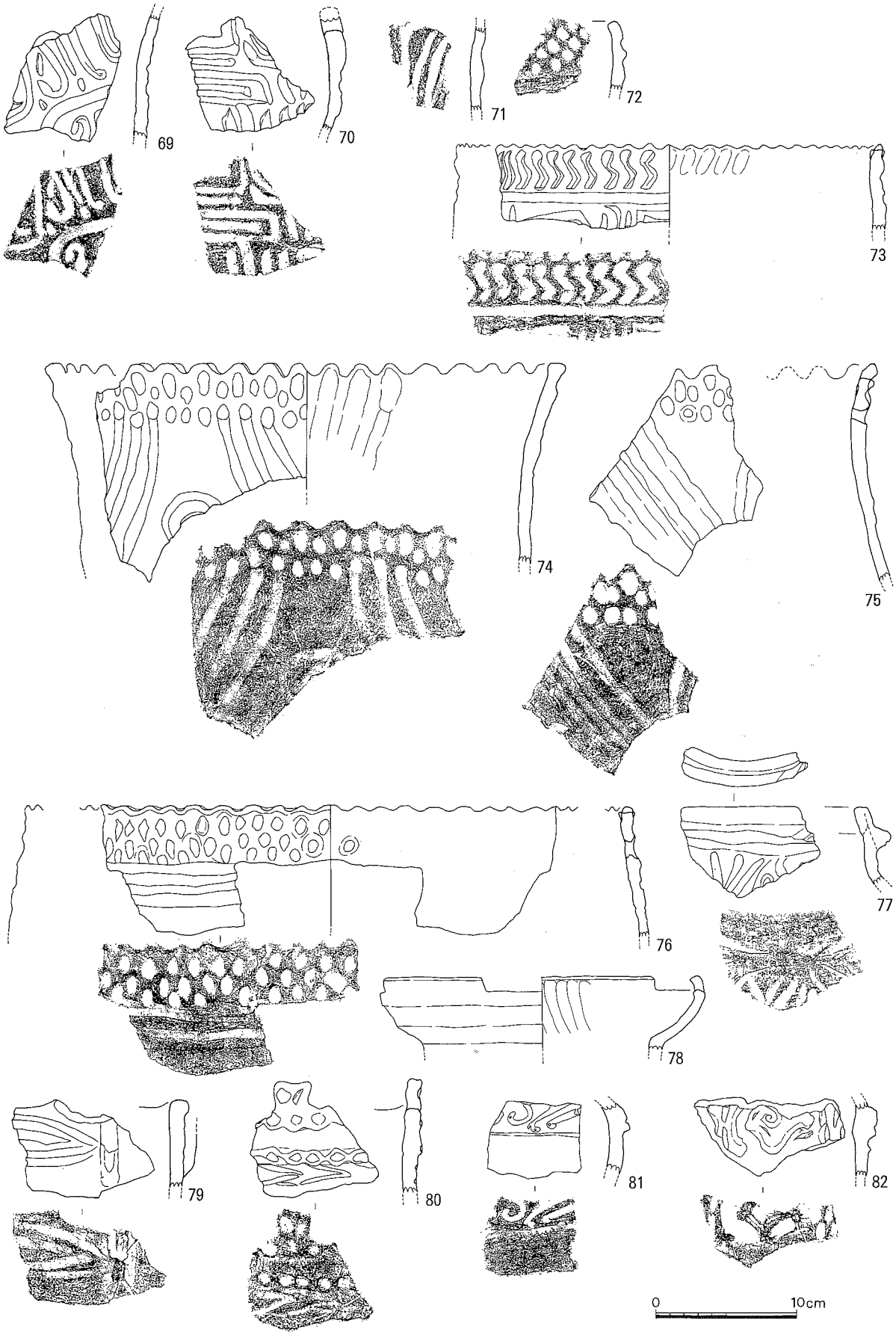
56以外凹文と凹文の間に押引文を施す。すべてに滑石が含まれる。**56**は内面が条痕調整のものである。

(6) **第Ⅵ群土器**（阿高式土器）（第10図69～72）

69～72は中期阿高式土器と認定した資料である。**69**はヘラによって凹線をえがくもので，阿高式土器の特徴である鉤状の入組文がみられる。**70**も凹線はヘラで描かれ，口縁部には枝状突起を有する。71は胴部片である。第Ⅶ群（坂の下式土器）に属す資料かもしれないが，成形や胎土などより，本群にいれた。**72**は凹点文を施す口縁部片である。71同様，成形・胎土により本群にいれた。

(7) **第Ⅶ群土器**（坂の下式土器）（第10図73～82・第11図83・84・第20図181）（図版８）

坂の下式土器のうち，実測できた有文の土器片は142点であった。しかし諸般の事情により本群のうち，本報告に実測図を掲載した資料は，全体の器形がうかがえる資料と，佐賀県西有田町坂の下遺跡出土土器の分類のなかにはみられない資料のみである。**83**は把手つきの浅鉢形土器である。胴部にはヘラによる沈線文を描くが，文様モチーフは判然としない。鉤手状のモチーフが直線的に描かれているようである。**84**は土器集積遺構の土器である。口径46.7cm，器高47cm，底部径17.5cmである。全体の器形が復元できる貴重な資料である。口縁部に凹点文を施し，口唇部にも凹点が付される。口縁部文様帯は不連続の浅い凹線で区画される。**73**は口縁下を沈線で区画することによって，口縁部文様帯と胴部文様帯を分け，口縁部文様帯にヘラで「Ｓ」字状の凹文を施す資料である。胴部文様は不明である。**74**・**75**は口縁部に凹点文を施し，指頭などによって器面をナデて，浅い凹線を施文するものである。口縁部文様帯と胴部文様帯を凹線で区画することはない。このタイプの土器は過去の調査でも出土している（賀川1968のPLATE XVI左上の土器）。本来第Ⅳ群（阿高式土器）に含まれる資料かもしれない。**76**は口縁部文様帯に凹点文，胴部には２本の横走する凹線を巡らす資料である。**77**は鍔状の突帯をもつ資料である。突帯より下の文様は不明である。**78**はキャリパー形の器形をもつ資料である。口縁部は基本的に平口縁であるが，一部に切り込みをいれ，段を有している。切り込みは対称に４ヶ所あると推定される。壱岐郡郷ノ浦町名切遺跡にもキャリパー形の坂の下式土器と思われる資料が出土して



第10図　縄文土器(5)（s＝1/4）

いる（報文中の第29図78の土器）（安楽・藤田1985）。**79**は突帯を縦に垂下させるものである。口縁部は波状をなすと思われ，口縁部にはヘラによる凹文をもつ。**80**は枝状突起と二条の刻目突帯をもち，下段の突帯下には，ヘラによる綾杉状の沈線文を施す。**81**は口縁部を肥厚させて文様帯を作出し，ヘラによる鉤状の沈線文を施すものである。**82**は胴部片であるが，浮文をもつ資料である。凹点文によって縦に文様帯を区画し，浮文を貼付する異形の土器である。第20図**181**は坂の下式系土器の透かしをもつ脚である。

(8) **第Ⅷ群土器**（出水式土器）（第９図57～62）

57は口縁下に横位の沈線を引き，口縁部文様帯を作出している。文様はヘラによる浅い沈線文である。**58**は市来式に類似した口縁部に，ヘラによる縦の短沈線と横走沈線を施したもので，口縁端部には刻目をもつ。**59**は異形の土器で，口縁部には枝状突起をもち，突起頂部は刺突が施されている。口縁下部には刻目突帯がまわり，体部にはヘラによる沈線が施文される。**60**は山形突起をもつ深鉢の口縁部片である。横走沈線で文様帯を区画し，突起の下には上下二段にヘラによる縦位の短沈線を，その他には上段一段に縦の短沈線を施文する。胴部には浅い沈線文を施すようである。**61**は「X」字状の把手を有する資料で，口縁下部には刻目突帯がまわる。口縁部と突帯の間には，ヘラによる浅い沈線が施文される。**62**は波状口縁で口縁端が肥厚する資料である。２本の沈線の間には縦に短沈線を施す。

(9) **第Ⅸ群土器**（御手洗Ａ式土器）（第９図63～64）

63・64はともに外反する口縁部・胴部に貝殻腹縁圧痕による施文を施すものである。**64**は口縁部に若干の肥厚がみられるため，次の第Ｘ群土器（御手洗Ｃ式土器）に含まれる資料かもしれない。

(10) **第Ｘ群土器**（御手洗Ｃ式土器）（第９図65～68）

いずれも口縁部を断面三角形状に肥厚させた資料である。**65**は無文。**66**は口唇部に刻目を施し，口縁部の肥厚した文様帯頂部に，縦の短い細沈線を施文している。**68**は肥厚によって作出した口縁部文様帯に連続刺突文を施す。

(11) **第Ⅺ群土器**（その他の御手洗Ｃ式系・市来式系土器）（第12図92～95）

いずれも口縁部に粘土紐を貼付して口縁部を肥厚させている。肥厚させた口縁部下半は丸みをおびて，体部に巻き込まれるように貼付されている（註１）。**92**は口縁の肥厚部に，さらに粘土紐を貼付させて「W」字状の浮文を描くものである。**93**は口縁肥厚部を文様帯として，押圧による波状の施文を施す。文様モチーフや施文具は不詳である。**94**は下半部を欠失しているため，詳細は不明だがこの群に含めた。刺突された浮文をもつがモチーフも不明である。**95**は上半部を欠失しているが，巻き込むように貼付される肥厚部の特徴は本群のものである。

(13) **第Ⅻ群土器**（鐘崎式系土器）（第12図85～91・第23図204～220）

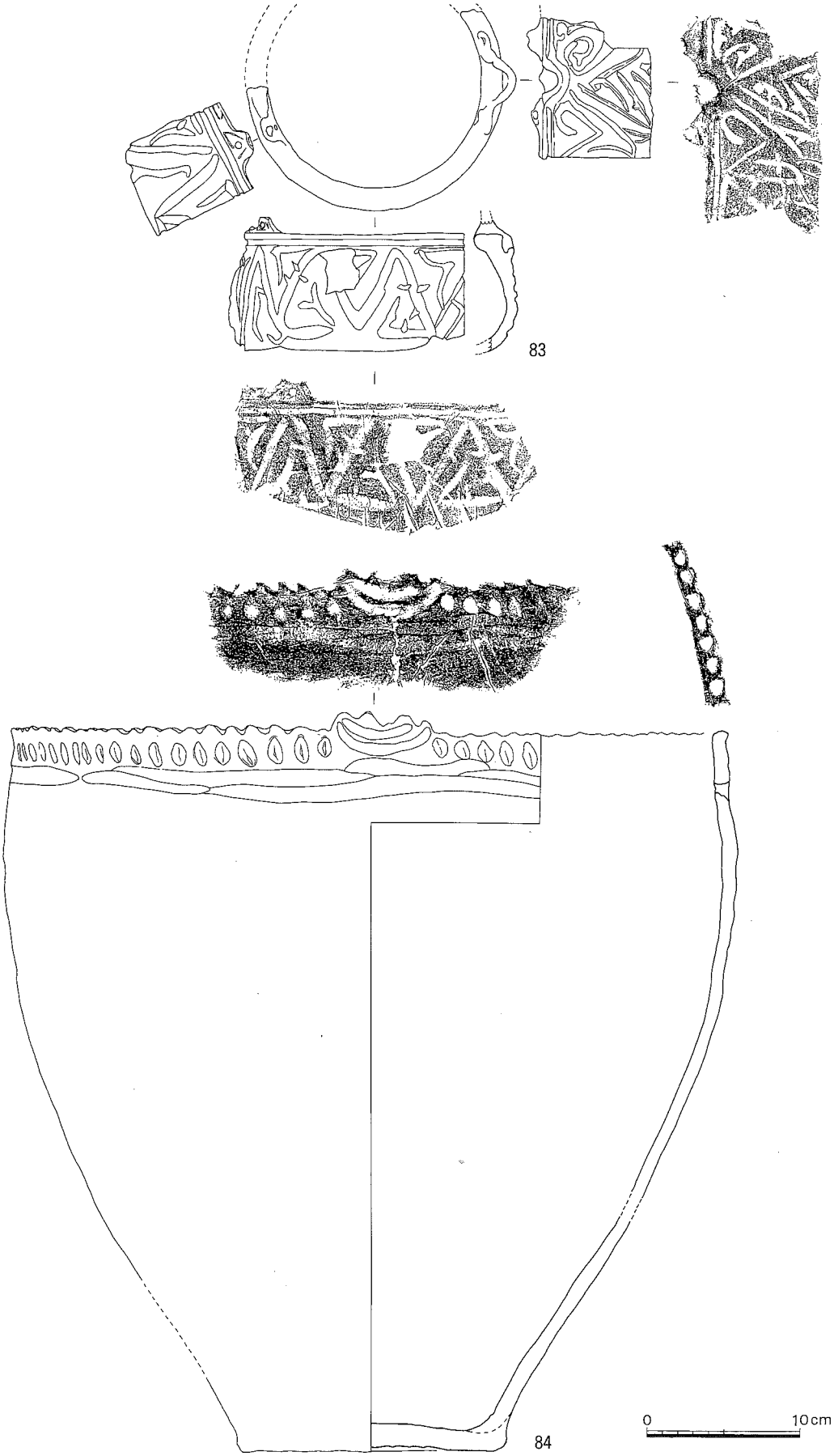
鐘崎式土器については，地域的な変異が大きいことが従来より指摘されている。本遺跡の鐘崎式土器も多様性があるようだが，まとまった資料に乏しく，ここでは「鐘崎式系土器」として一括した。

①第１類（85・86）

85・86は内湾する口縁部と橋状把手をもつ浅鉢形土器である。磨消縄文は確認できない。いずれも口縁頂部に一条の沈線と櫛歯状の刺突文を施す。また口縁部に穿孔された小突起をもつところが特徴である（註２）。

②第２類（87）

口縁頂部に沈線がなく，橋状把手の上に，さらに渦紋を施した突起が付されるところが第１類とは異なる。口唇部には刻目をもち，その下部には３本の横走沈線が巡る。沈線間には単節斜縄文が施さ



第11図　縄文土器(6)（s＝1/4）

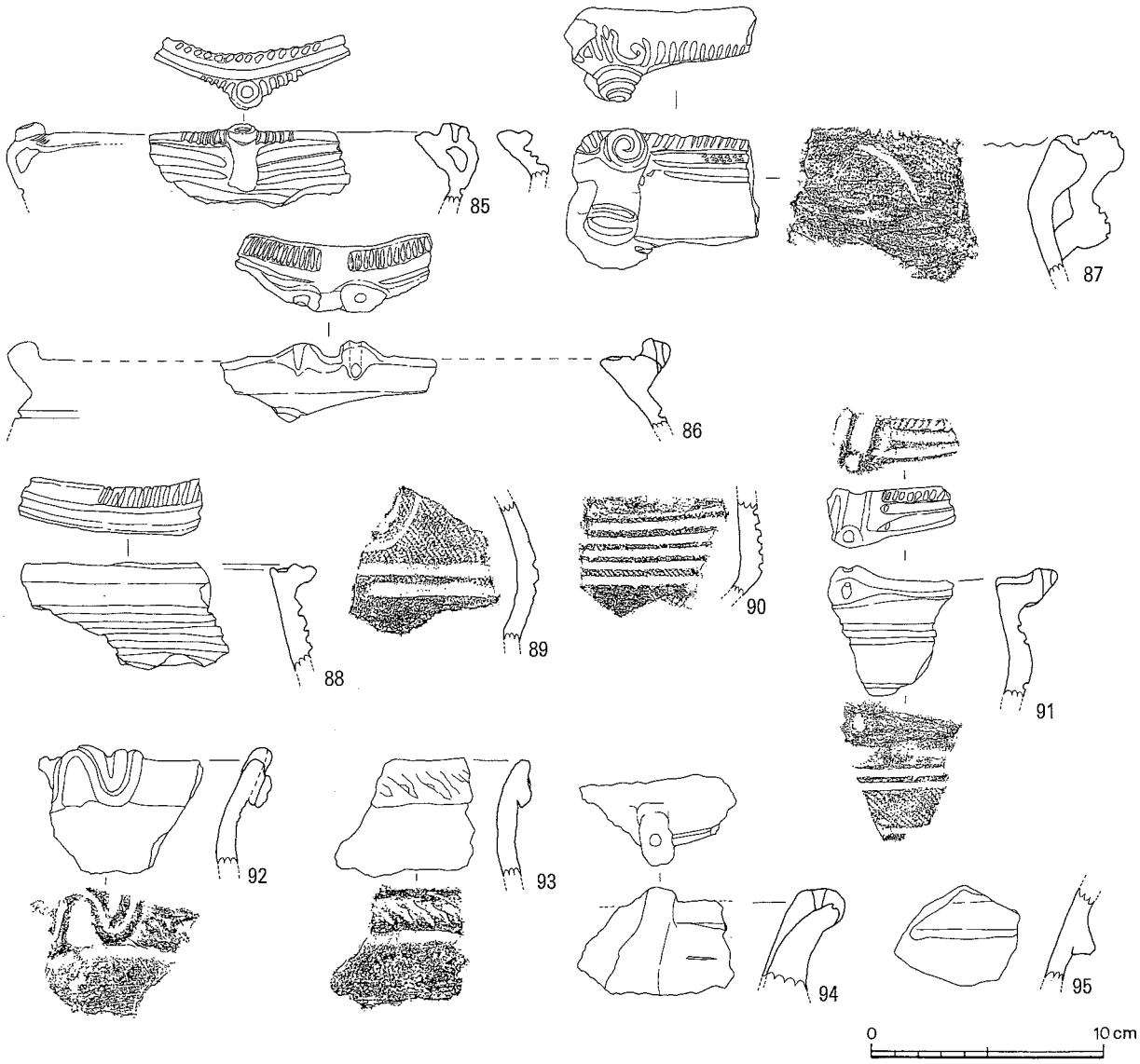
れる。内面は右下がりの弧状沈線を施し，左には沈線端刺突がみられる。内面の橋状把手近くには縄文が施される。北久根山式系土器の可能性も捨てきれない。

③第３類（91）

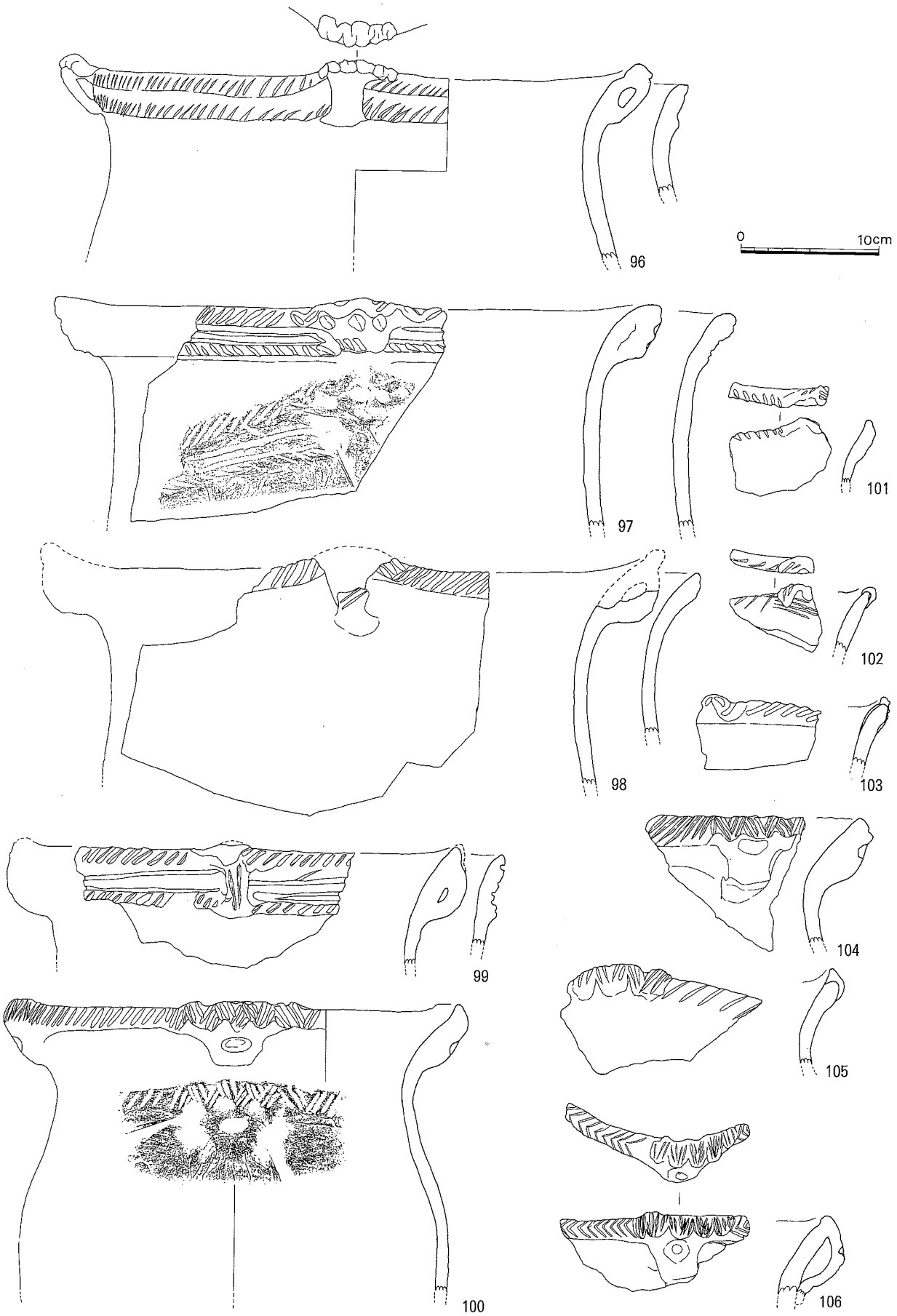
口縁部に穿孔した山形の突起をもち，口縁頂部には２本の沈線文と沈線端刺突，さらに櫛歯状の刺突文をもつ。胴部は沈線文が施され，沈線間は単節斜縄文（ＲＬ）が施文される。

④その他の資料（88～90・204～220）

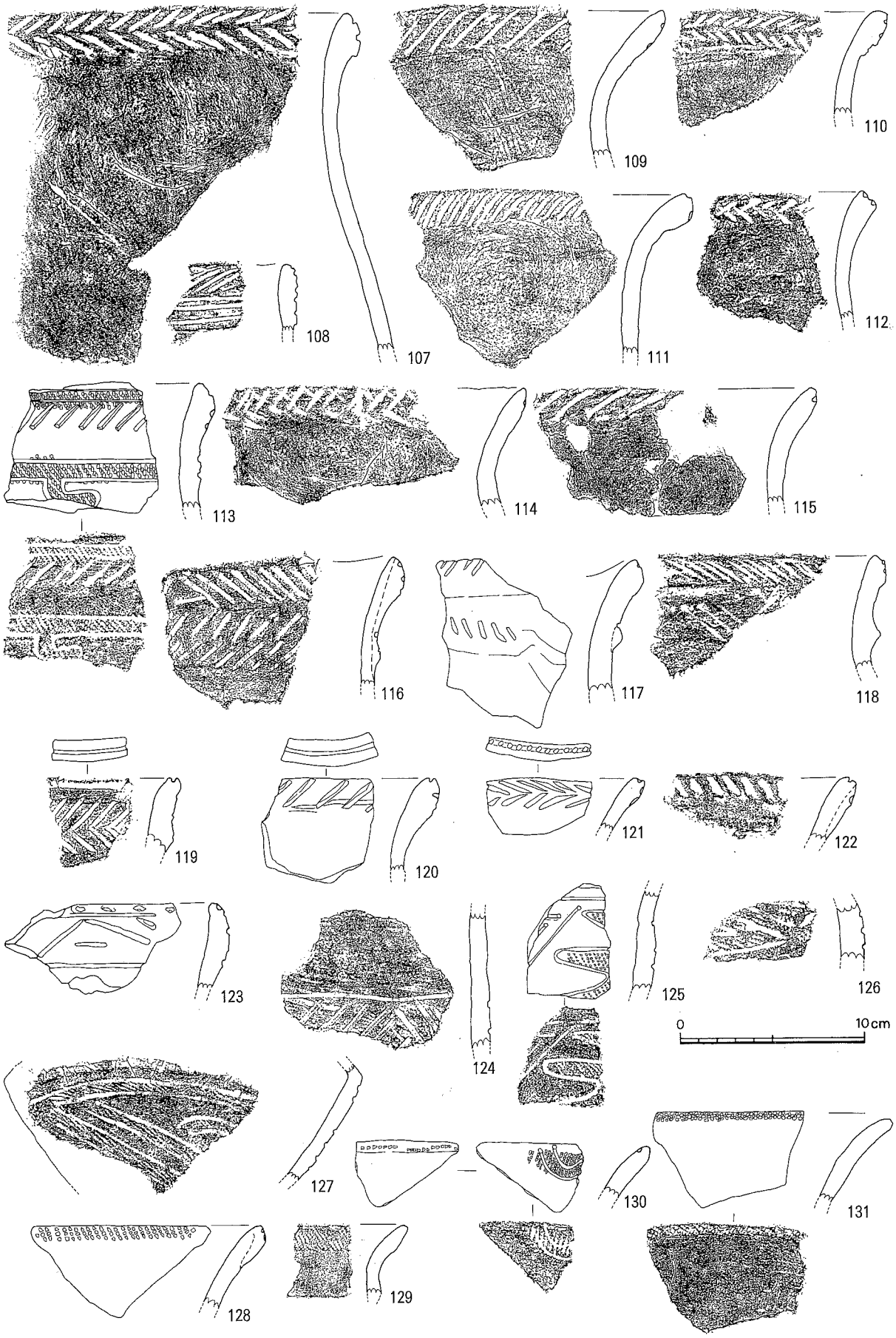
88～90・204～220の資料は，小片であるため全体の器形や文様が明確ではなく，型式の認定については困難を伴うものである。しかし器形や，口縁頂部に施された沈線，櫛歯状の刺突文さらには胴部の磨消縄文などを指標に本群に含めた。**88**は内湾する口縁部をもち，口縁端を外に拡張する資料である。口縁頂部には一条の沈線と櫛歯状の刺突文を施文する。**89**は渦紋をもち，沈線間を単節斜縄文（ＲＬ）で充填した資料である。**90**は胴部片で沈線間に単節斜縄文（ＲＬ）を施すものである。**204**は口縁端部を拡張させ，平坦面を作出し，櫛歯状の刺突文を施している。胴部には単節斜縄文（ＲＬ）を飾り，沈線文を横走させる。**205**は口縁部を外反させ，拡張した口縁端部に口縁をめぐる２本の沈線



第12図　縄文土器(7)（ｓ＝1/3）



第13図　縄文土器(8)（s＝1/4）



第14図　縄文土器(9)（s＝1/3）

を施し，沈線間を綾杉状の刺突文で充填したものである。**206**は同じく拡張した口縁端部に突起を付し，拡張部および突起頂部に櫛歯状の刺突文をつけたものである。**207・217**も拡張した口縁端部に2本の沈線を巡らすもので，**207**はさらに櫛歯状の刺突文を施す。**208～210**は内傾する口縁部に口縁端を丸く肥厚させ，胴部に横走する沈線をもつ。**209**は沈線間に貝殻擬似縄文と縦位の短沈線を施す。**212**も口縁部端を丸く肥厚させ，刻目状の短沈線を沈線で切っている。口縁下部には突帯をもつ資料である。**216**の口縁部資料はこの群では異形の土器である。**211**はボウル状の精製浅鉢の口縁部である。沈線間を単節斜縄文（ＲＬ）で充填する。**215**は内湾する口縁部をもち，口唇部に一条の沈線を巡らす。**213・214**は浅鉢胴部片で，**213**は単節斜縄文（ＲＬ），**214**は貝殻擬似縄文を施す。

⑭ **第XIII群土器**（北久根山式第一型式土器）（第13図96～122・第14図128～141）（図版４）

①第１類（96～106）

外反し肥厚する口縁部に橋状把手をもち，口縁部に斜めの短沈線を施し，「W」字状の浮文や沈線文をもつ半精製深鉢の一群である。**96**は復元口径43cmを測る。橋状把手の上部および下部に斜行短沈線の文様帯をもつ。下部の文様帯は断面三角形の貼付隆帯上に施されており，橋状把手がなければ本群第３類に分類されるものである。橋状把手の上には浮文を貼付する。**97**は復元口径44cmを測る。橋状把手の環部が潰れ痕跡器官となり，橋状把手上に施された，本来は浮文となるべき文様も波状の沈線文となっている。その下部には３つの刺突文が施される。橋状把手の上部・下部には斜行短沈線文帯をもち，その間には２本の沈線が横走する。**96**と同じく下部の文様帯は隆帯状を呈し，橋状把手がなければ本群第３類に分類される。**98**は復元口径45cmで，橋状把手の上部が欠損しているため，浮文の状況がわからない資料である。**99**は復元口径33.5cmを測る。橋状把手の上部と下部に斜行の短沈線をもち，その間に二条から三条の沈線を巡らす。下部の斜行短沈線の文様帯は突帯状に肥厚しており，橋状把手をもたなければ**96・97**と同じように本群第３類に入る。橋状把手の表面には２本の縦の沈線が施されている。内面はケズリによって成形されている。**100**は復元口径33.5cmを測る。橋状把手は環部が潰れており，把手は痕跡器官と化している。把手頂部には直径１cmほどの円形の窪みをつけている。橋状把手直上の口縁部には「W」字状の沈線文が施されているが，「W」字状の浮文が沈線文化したと考えれば，これも痕跡器官というべきであろうか。**101～106**は破片資料である。**104**は橋状把手の環部が潰れ，橋状把手上部の浮文も沈線化している。

②第２類（107～110・112～115）

口縁部が外反し，口縁端部を肥厚させ，肥厚部に斜行短沈線や綾杉状の沈線文を描くもので，北久根山第一型式の代表的一群である。しかし，**108・113**はこの類にいれたが，横走する沈線をもつものである。とくに**113**は横走する沈線を引いたあとに単節斜縄文（ＲＬ）を充填している。第２文様帯には横走する沈線から「Ｌ」字状に垂下する沈線文があり，同様に縄文を充填させており，他の資料とは異質なものである。

③第３類（116～118）

口縁部下に隆帯をもつ一群である。熊本県北久根山遺跡にも類例がある（註３）。**116・117**は緩やかな波状口縁になるものである。

④第４類（111・119～122）

口唇部に一条の沈線を巡らす資料である。北久根山遺跡にはない資料である。とくに**121**は口唇部に浅く沈線を巡らしたのちに，連続刺突文を施していて，他の資料とは異質である。これら第４類の口唇部沈線の出自については，鐘崎式土器の浅鉢に付される沈線との関連の有無も含めて，検討する必要があろう。

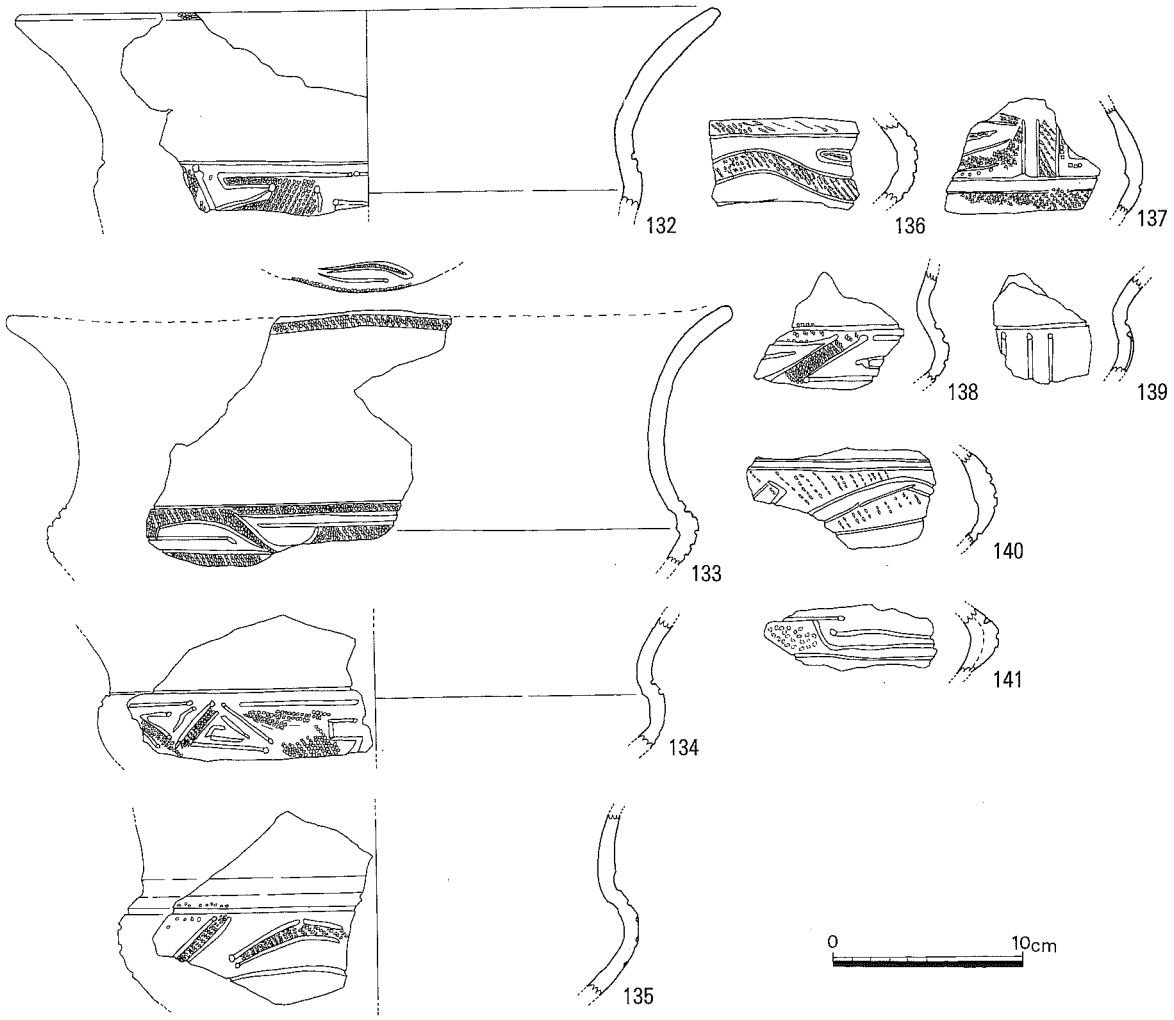
⑤第５類（128～141）

北久根山第一型式の深鉢形土器にともなう精製鉢形土器である。扁球形の胴部にラッパ状に外反する器形をなす一群である。**132**の復元口径は37cm、復元胴部最大径29cmである。口唇部に貝殻擬似縄文をもち，胴部には沈線を引いたのちに貝殻擬似縄文を充填させ，磨り消す。沈線端には刺突がみられる。**133**は復元口径38cm，復元胴部最大径34.5cmで，口唇部に単節斜縄文（ＬＲ）を施す。口縁内部にも沈線文を施し，縄文を充填させる。胴部にも同様に沈線文と単節斜縄文（ＬＲ）の充填がなされる。**134**は復元胴部最大径30cmで，胴部には三角形のモチーフを施し，貝殻擬似縄文で充填し，磨り消す。沈線端刺突がみられる。**135**は復元胴部最大径が27.5cmである。沈線端刺突をもつ沈線間には貝殻擬似縄文を充填させ，磨り消す。136～141は破片資料である。**138**が単節斜縄文（ＬＲ）であるほかは貝殻擬似縄文である。128～131は口縁部片で，**128**は刺突により擬似縄文を施し，**129**は単節斜縄文（ＲＬ）を施す。**130**は口唇部に擬似縄文，口縁部内面に連弧状の沈線文および沈線端に刺突を施した後に単節斜縄文（ＬＲ）を施す。**131**も口唇部に擬似縄文を付す資料である。

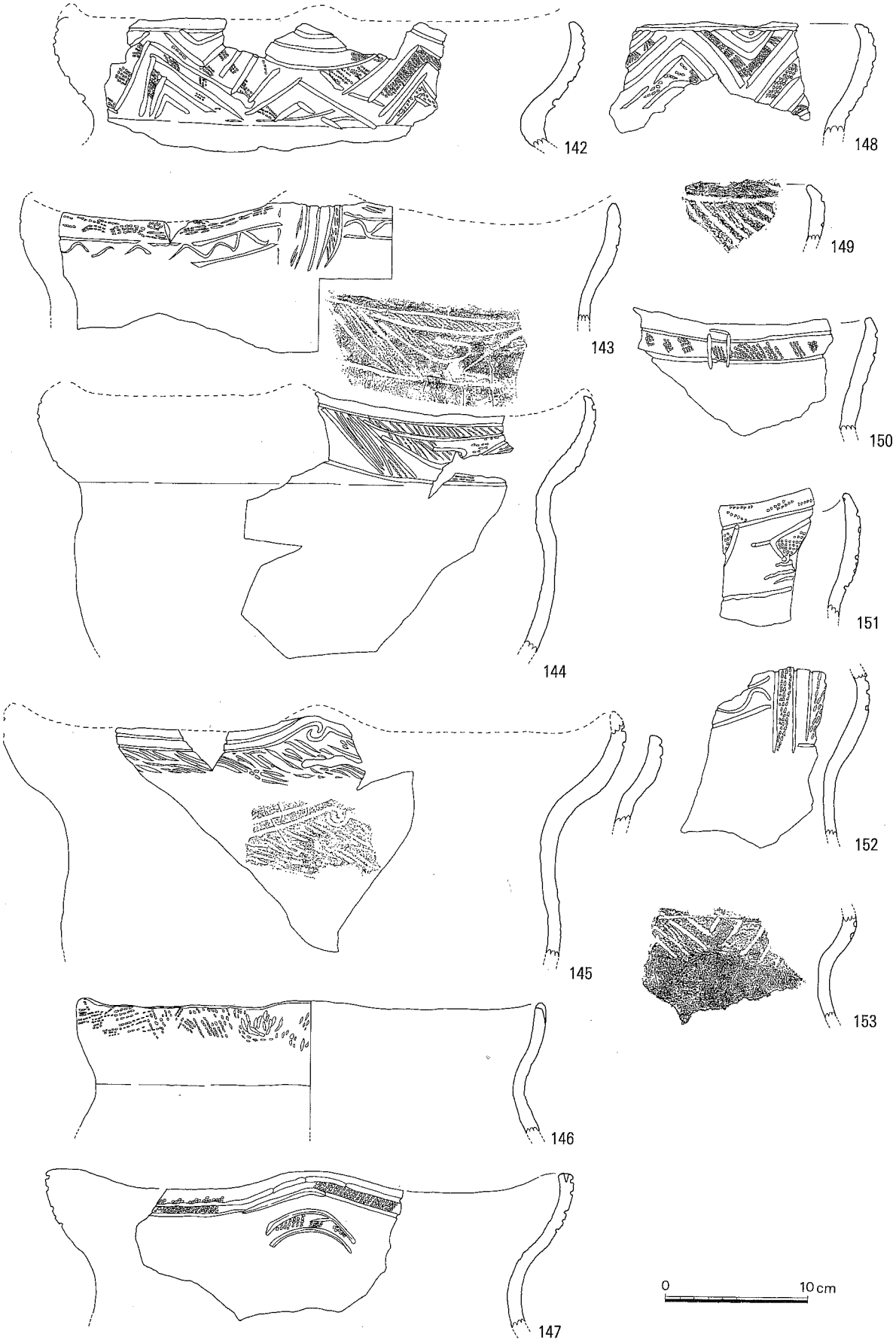
⒂ **第XIV群土器**（北久根山第二型式土器・辛川Ｉ式併行土器）（第14図123～127・第16図142～153）（図版５）

①第１類（123～127・137～153）

口縁部が内湾しながら立ち上がり，口縁部文様帯は沈線文・貝殻擬似縄文によって施文する半精製



第15図　縄文土器⑽（ｓ＝1/4）



第16図　縄文土器(11)（s＝1/4）

深鉢である。口縁は緩やかな波状を呈し，山形に隆起するものもある。胴部には三角形をモチーフにした文様帯をもつものもある。**142**は復元口径37cmを測る。内湾する口縁部には，三角形をモチーフとした沈線文と沈線の間を貝殻擬似縄文で部分的に充填する。148・153も同様な器形および文様をもつと推定される。**143**は復元口径42cmを測る。緩やかな波状口縁をもち，内湾する口縁部に沈線文と貝殻擬似縄文をもつ。２本の横走する沈線により口縁部文様帯を３分割し，上位に貝殻擬似縄文を充填させ，沈線間には波状の沈線文を施す。これらの文様帯は口縁波頂部において４本の縦位の短沈線によって切られている。この縦の短沈線は，橋状把手の痕跡と認識することもできよう。**152**も同様な器形文様をもつと推定される。**144**も143と同じく，波状口縁に内湾する口縁部をもち，横走する２本の沈線で，口縁部文様帯を３分割する。口縁上部に擬似縄文をもたない点が143と異なる。沈線間には地紋として貝殻条線を施し，それを切る沈線によって三角形のモチーフを描く。三角形内は鉤手状の沈線を施している。**145**は口縁部文様帯の地紋として，貝による条線を施す。口縁上部には２本の横走沈線を巡らし，下位の沈線は鉤手状に組み合わされている。**146**は内湾する口縁部文様帯の上半に粗雑な擬似縄文をもつ。**147**は内湾する口縁部の文様帯上位に擬似縄文の地紋を施したのちに，２本の沈線を横走させ，文様としている。口縁波頂部の下には２本の弧線文を施し，沈線間を貝殻擬似縄文で充填させている。**150**は口縁部文様帯に２本の沈線を巡らし，沈線間を貝殻擬似縄文で充填している。しかし文様帯は矩形の沈線文で切られている部分がある。**151**は口縁部の上位に擬似縄文を施し，そののちに上下に横走沈線を巡らしている。沈線間は曲線的な沈線を施し，沈線端に刺突をもつ。沈線間は擬似縄文で充填する。ここから以下は，胴部資料である。**154**は口縁部文様帯を沈線および沈線端刺突で飾り，胴部内面はケズリによって成形されている。**155**は粗製の深鉢で，口縁部および胴部の内湾の度合いが緩い資料である。曲線的な沈線文に，部分的に擬似縄文が雑に施される。**156**は胴部に粗雑な擬似縄文を地紋として施したのちに，沈線で文様帯の上下を区画し，さらに三角形のモチーフを描く資料である。**158**は155と同じく粗製の深鉢で，部分的に粗雑な擬似縄文を施し，155とよく似たタッチで沈線文を描く。**157**は連続刺突文を付した横走する２本の沈線を配することによって，文様帯を区画する資料である。文様帯内は綾杉状の沈線文を描き，一部の沈線は沈線端を深く刺突している。

123以下は本類の小破片の資料である。**123**は沈線文と刺突文で飾る口縁部片である。器形は浅鉢かと思われるが判然としない。**124**は深鉢の胴部片と考えられる。三角形の沈線文と貝殻擬似縄文より本類と考えた。**125**も深鉢の胴部片で，雲形の沈線文と擬似縄文，沈線と沈線端刺突が施される。**126**も124と同じモチーフと考えた。

②第２類（160～163）

ゆるやかな波状口縁をもち，内湾する口縁部をもつ半精製深鉢で，器形は第１類と同じである。しかし内湾する口縁部文様帯の施文が，貝殻による条痕文のみであるところが異なる。これらの貝殻条痕文は文様帯の下部ではナデ消されているため，器面のどこまでに施され，かつナデ消されたものか判然としない。いずれも内面は丁寧にナデられている。

③第３類（159・164～165）

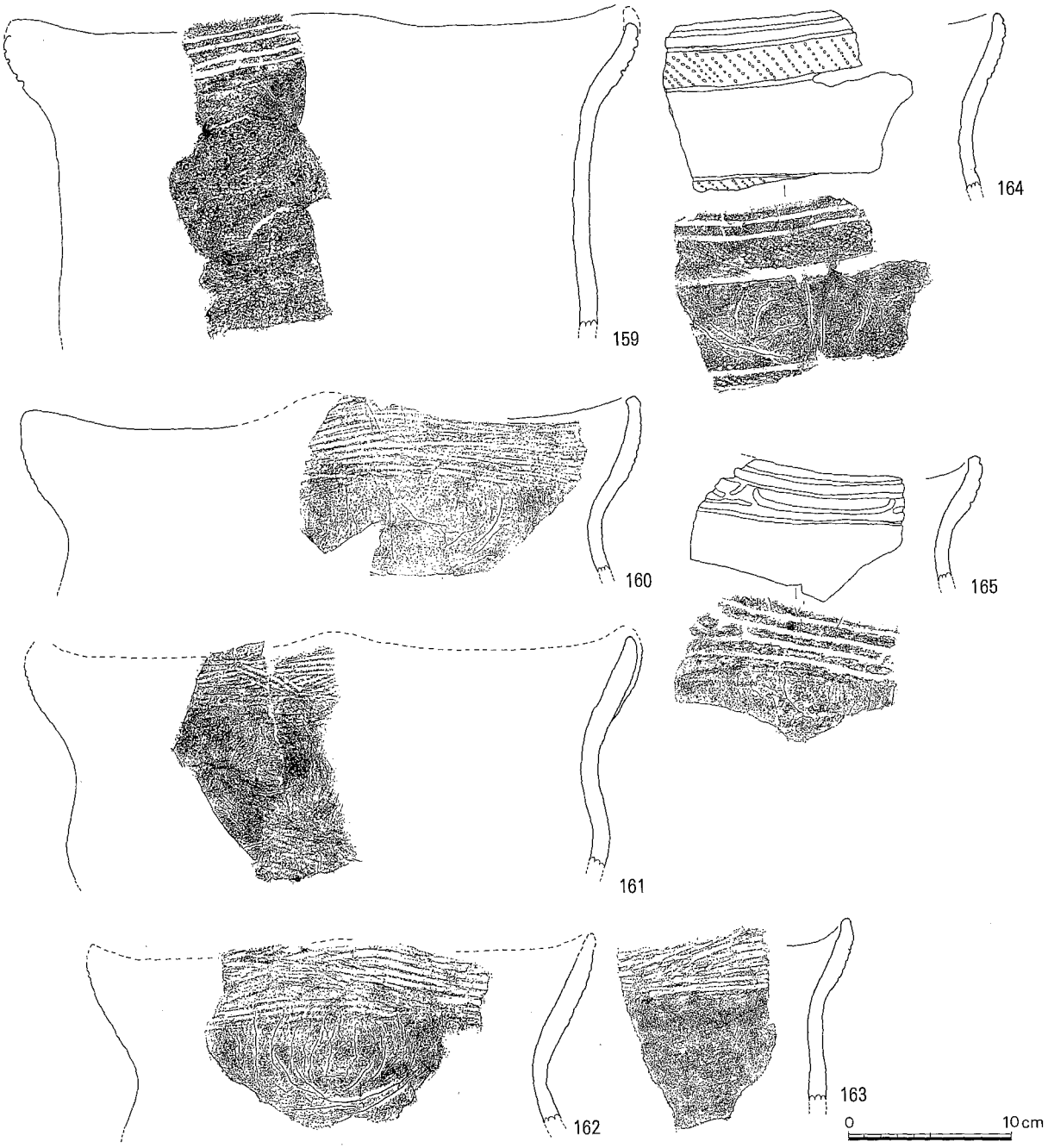
緩やかな波状口縁をもち，口縁部が内湾しながら立ち上がり，口縁部文様帯をもつことは第１類・２類と同様であるが，施文が３本ないしは４本の横走する沈線である点が異なる資料である。**165**は口縁部文様帯とともに胴部文様帯をもち，沈線間を貝殻擬似縄文で充填している。

⑯　第XV群（その他の北久根山式系土器）（第17～20図166～189・第23図213～221）

①第１類（166～169）（図版７）

北久根山式系土器の壺状の半精製鉢を一括した。**166**は復元口径38cmを測る。口縁部端が若干肥厚し

第17図　縄文土器(12)（s＝1/4）

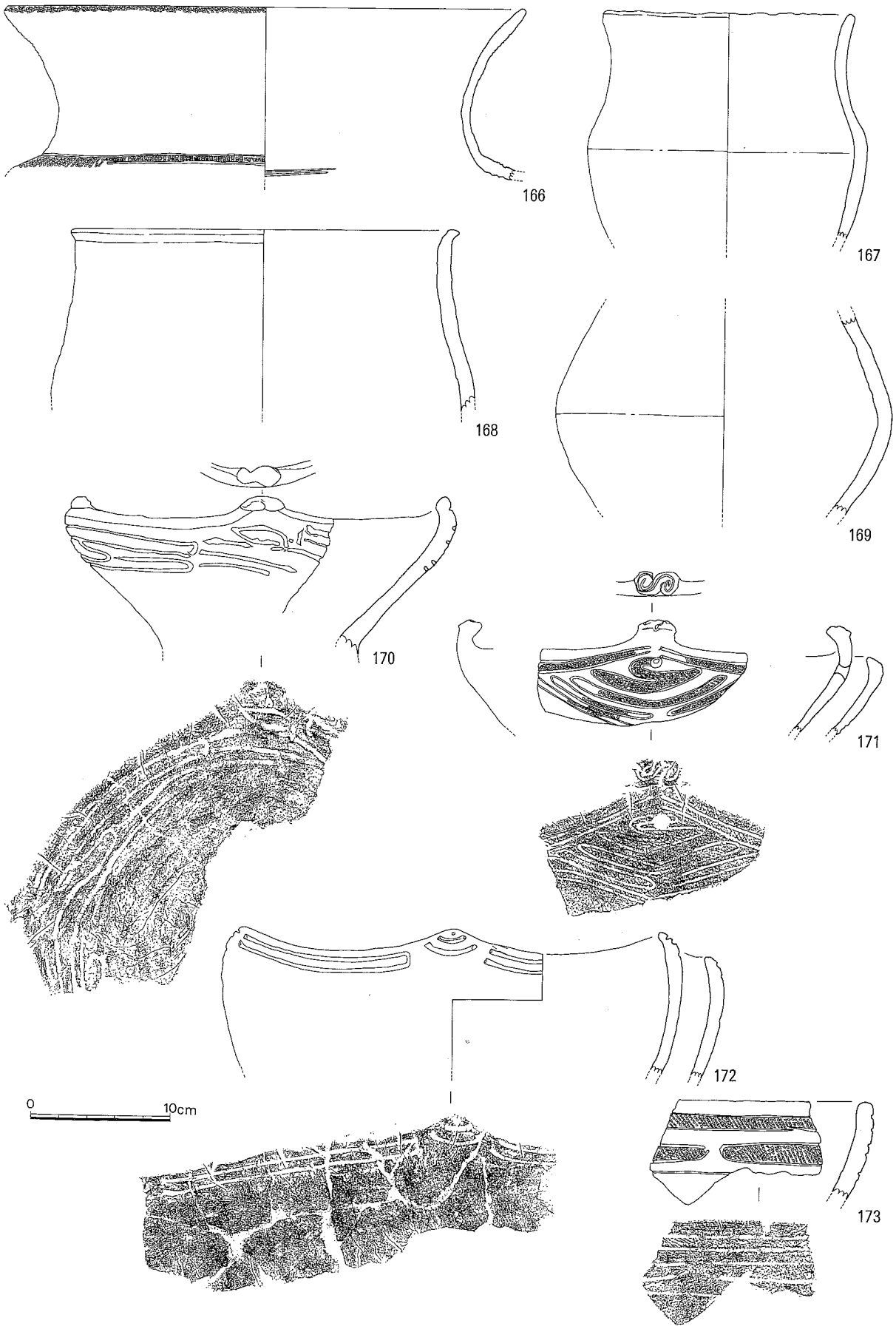


第18図　縄文土器(13)（s＝1/4）

ながら大きく外反する。口唇部には貝殻擬似縄文を施す。胴部文様帯は横走する沈線文と沈線間を充填した擬似縄文である。沈線端には刺突がみられる。**167**は無文の鉢で，復元口径18cmである。外面は全体をナデたのちに，肩部を削った痕跡がのこる。胴部内面には顕著なケズリ痕がみられ，全体はナデられている。**168**は復元口径28cmを測る。調整は磨滅していてナデ痕しか判然としない。**169**は外面はナデ，内面はケズリののちナデ調整を施している。

②第２類（170～173）（図版８）

北久根山式系土器の浅鉢ないし鉢である（註４）。**170**は突起を有する半精製鉢で，脚台がつく鉢であろう。復元口径は28cmを測る。突起は粘土塊を「Ｓ」字状に成形して貼付しているようである。口縁部から胴部にかけての文様はヘラ状の施文具によって沈線を曲線的に横走させることで施文している。**171**も突起をもつ精製の浅鉢である。復元口径は28cmである。突起は170と同様に，粘土塊を「Ｓ」



第19図　縄文土器⒁（s＝1/4）

字状に成形して貼付するが，あらためて細沈線によって「S」形をかたどっている。口縁部から胴部にかけては浅い沈線で曲線文を描き，沈線内は単節斜縄文（RL）で充填する。突起の下位には穿孔がみられる。**172**も半精製の浅鉢である。口縁部は緩やかな波状を呈し，波頂部には刺突文と弧状の沈線を2本配す。復元口径は33cmである。口縁部を巡る沈線は一筆で矩形を描くが，一方の短辺は閉じることはない。なお沈線端は刺突によって深く押さえる。内面はケズリ調整がおこなわれる。**173**はボウル状の半精製浅鉢である。平口縁で口縁上位に2本の横走沈線，下位に1本の横走沈線を巡らす。この沈線間を文様帯として擬似縄文を充填させる。内面は丁寧にナデられる。

③第3類（174・175）

全体の器形がわかる資料がないが，178の小形土器に近いとみられる。口縁は波状になり，口縁部に沿って2条の沈線を巡らし，沈線間に貝殻擬似縄文を充填させる。頸部の屈曲部にも沈線を1条巡らすところが特徴的である。胴部文様帯には沈線文と貝殻擬似縄文を施す。

④第4類（176～178）（図版9）

北久根山式系土器の小形土器である。**176**は口径10.5cm，底径5.5cm，器高7.0cmを測る。口縁部に4つの山形突起をもち，胴部にヘラ描きの沈線文をもつ。山形突起は刻みをもつものと，突起頂部を窪ませたものとがある。**177**は小形台付き鉢である。口径13cm，底径8cm，器高7.2cmである。口唇部に山形の細沈線文を施す。**178**は小形の鉢で，本群第3類を小形化したものと推定される。口縁部は波状で口縁に沿って1条の沈線を巡らせ，口唇部には単節斜縄文（RL）を施す。頸部付近に貝殻擬似縄文を施し，頸部屈曲部に沿って巡らした沈線と胴部に沿った沈線で切る。

⑤第5類（179・180）

北久根山式系土器の皿である。いずれも貝殻擬似縄文と沈線および沈線端刺突をもつ。

⑥第6類（182～189）

北久根山式系土器の脚部である。

⑦第7類（218～225）

内湾する口縁部片でボウル状の浅鉢となるような土器群を一括した。いずれも沈線文や貝殻擬似縄文で飾り，平坦口縁と波状口縁がある。**218**は弓状の複線の沈線，刺突文，貝殻擬似縄文が施され，内面は貝殻条痕ナデ消しである。**219**も同様の文様を付すが，口縁頂部にかかる沈線端に刺突をもつ。**221～225**も同様である。

⒄ **第XVI群土器**（後期無文土器）（第21～22図190～203）（図版6）

後期無文土器のうち，内外面に貝殻条痕文を施すものを第1類とし，施さないものを第2類とした。

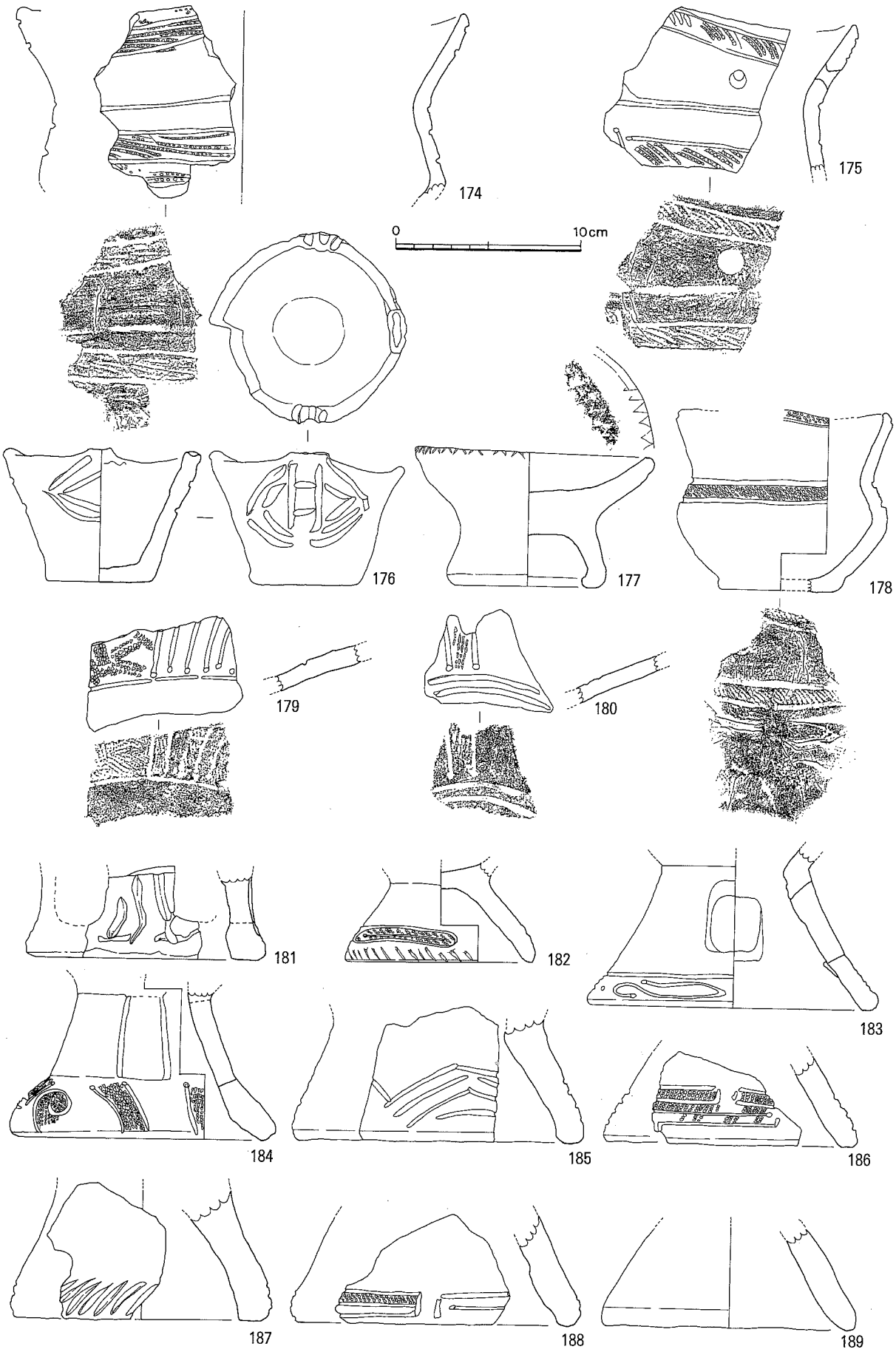
①第1類（190～198）

口縁部を緩やかに「く」字状に外反させ，内外面を貝殻条痕で調整した粗製土器である。口唇部に刻目をもつもの（190・191・194・195）ともたないもの（192・193・196・197・198）に細分できる。また，胎土に貝殻を含むもの（190・192・194・195・197）と，含まないもの（191・193・196・198）に細分することが可能である。しかし胎土の混和材と口唇部刻目との相関はない。なお190・191の復元口径はそれぞれ48.5cmと38cmである。

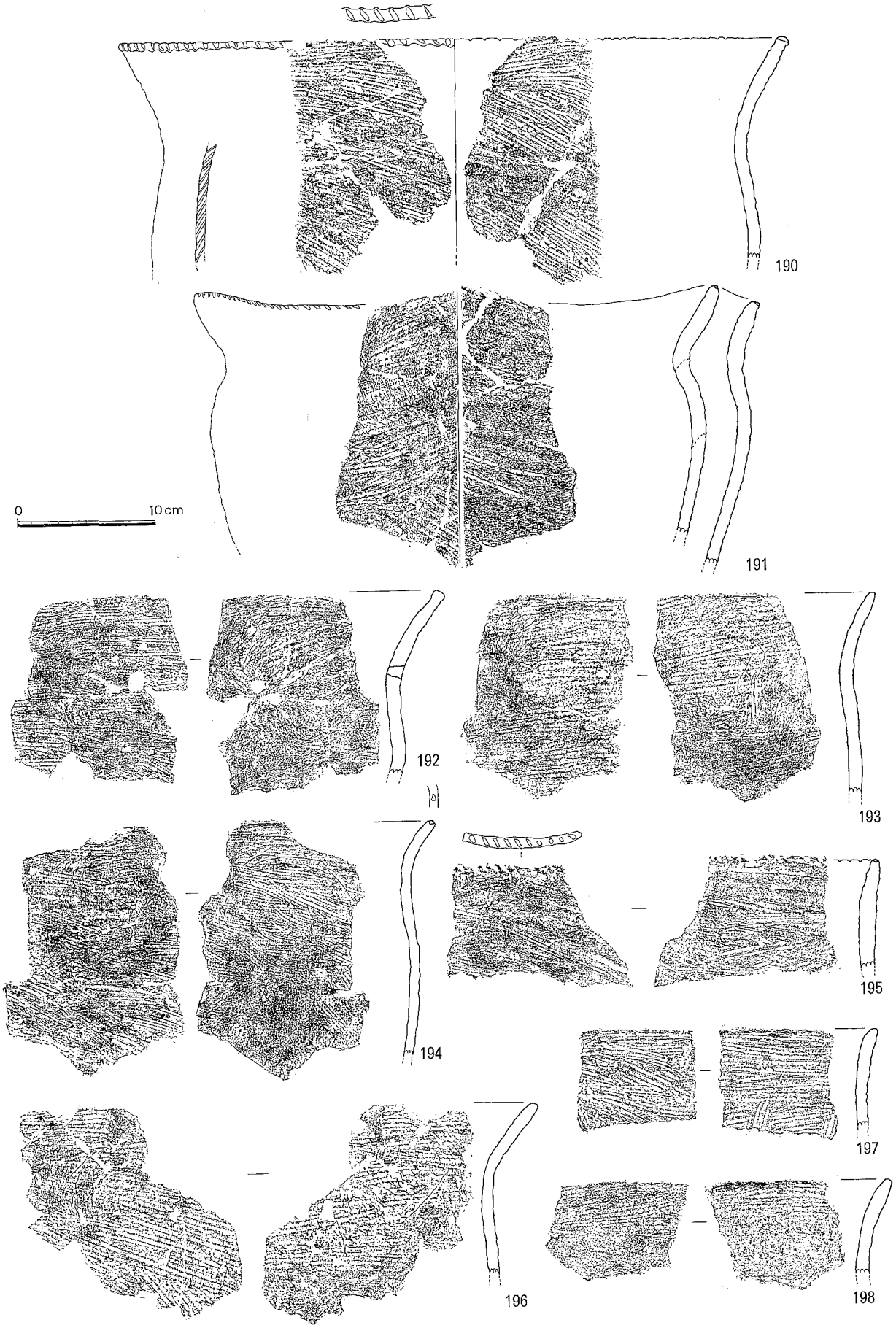
②第2類（199～203）

いずれも口縁部が外反しながら開く。199を除き，口唇部に刻目を施す。内面はヘラケズリ状にナデるもの（199・201・203）と，平滑にナデるもの（200・202）がある。200と202は胎土に貝殻を含み，その他の資料には胎土に金雲母を含む。202が赤褐色を呈する以外は暗褐色である。

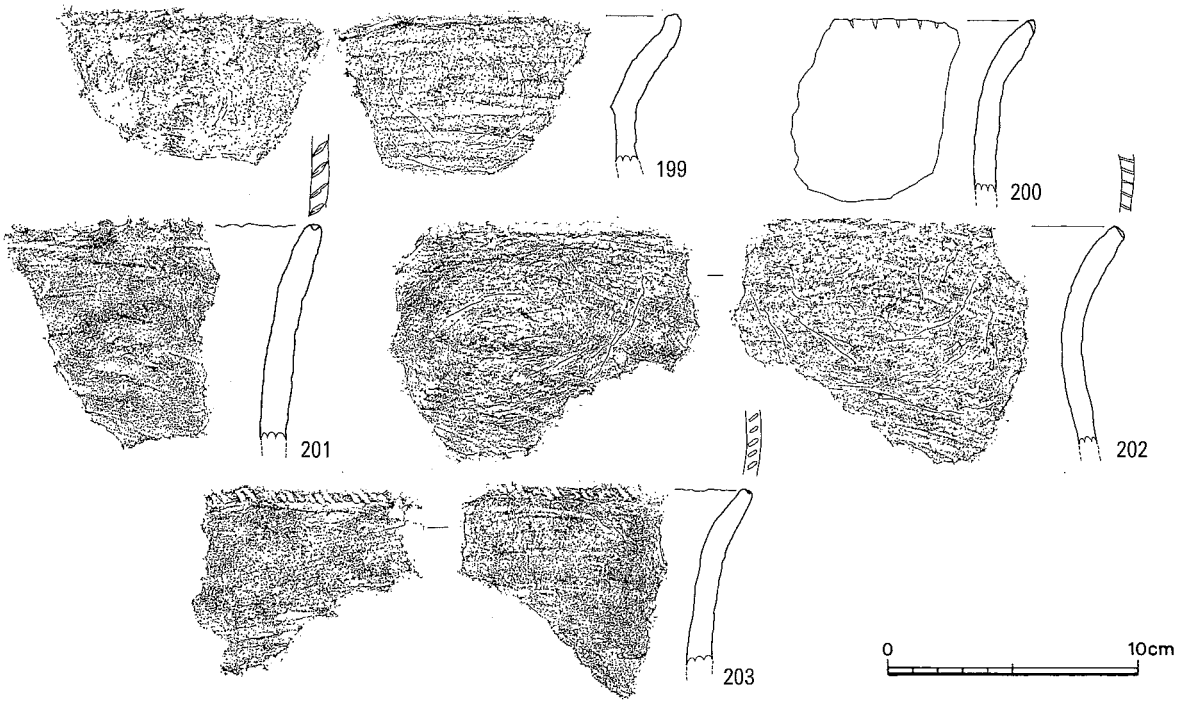
⒅ **第XVII群土器**（辛川II式併行土器）（第23図226～232）



第20図　縄文土器(15)（s＝1/3）



第21図　縄文土器(16)（s＝1/4）



第22図　縄文土器⒄（s＝1/3）

北久根山第二型式と西平式土器の間に位置づけられるであろう土器群である。肥後の当該期の土器である辛川II式併行の土器として報告したい。

①第1類（226・227・232）

波状口縁で，口縁部先端は内湾し，文様帯を形成する。文様は2本の沈線を巡らすが，口縁を全周するものではなく，矩形に完結したり，断絶したり，突起で遮られたりしている。**226・227**は，独鈷状に浮文がつけられている。浮文にも貝殻擬似縄文が施文される。この類の土器は辛川II式にはみられないようであるが，熊本県沖ノ原遺跡に類例がみられる（坂田1975）。

②第2類（228）

沈線間を単節斜縄文（RL）で充填している。中央部の文様は辛川II式の指標となる「鉤弧文」と呼ばれるものに類似する（富田1986）。

③第3類（229～231）

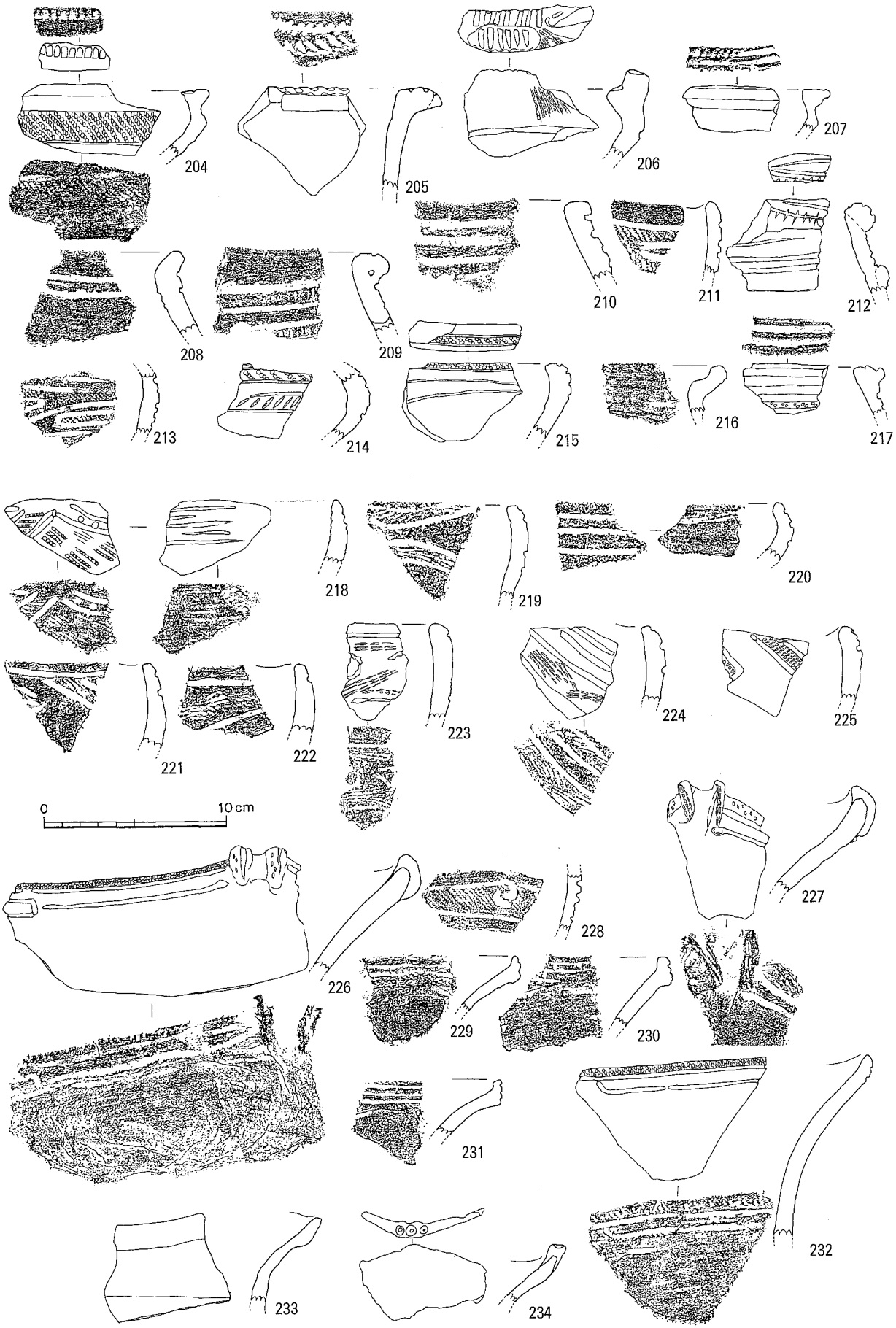
口縁部を屈曲肥厚させて文様帯を作出するものである。**229**は2本の沈線を引き，文様帯下半には縄文を施す。胎土に貝殻を多量に含んでいる。**230**は沈線端刺突文がみられる。**231**は3本の沈線を施し，文様帯の上半に縄文を施文している。

⒆　**第XVIII群土器**（三万田式土器）（第23図233・234）

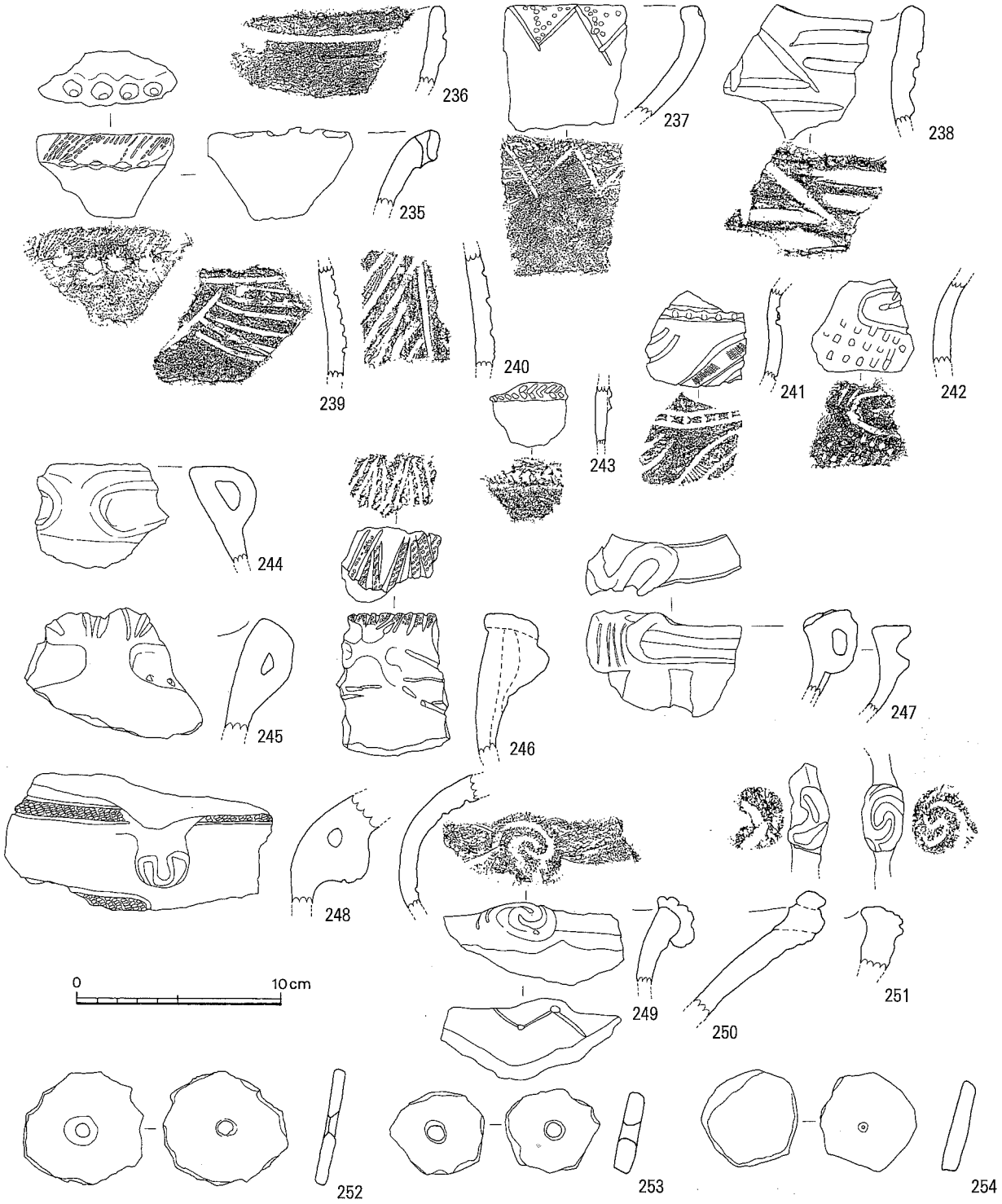
いずれも波状口縁の黒色磨研土器の口縁部片である。**234**は，口縁頂部に3個の刺突がみられる。

⒇　**第XIX群土器**（型式不明土器）（第23図235～242）

235は口縁部を外反させ，口縁端部を拡張して文様帯を作出し，そこへ貝殻擬似縄文を施し，上下より穿孔した資料である。異形の土器であるが，福江市白浜貝塚に類例がある（報文PL32-107の土器など）。**236**は口縁下に一条の沈線をもつもので，後期阿高系土器か。**237**は内湾する浅鉢の口縁部片である。山形の沈線文に貝殻擬似縄文を施文する。北久根山第二型式土器の範疇にはいるかと考える。238は滑石を含み，ヘラによる凹線を施す。239～241はいずれも沈線文をもち，**240**は撚糸文を充填させ，



第23図　縄文土器(18)（s＝1/3）



第24図　縄文土器⑲（s＝1/3）

241は貝殻擬似縄文を充填する土器片である。**242**は刺突文を地紋とするもので，類例に乏しい。**243**は隆帯に綾杉状に刺突をおこなう資料で，型式は不明である。

㉑　把手（第24図244～248）

244および**247**は後期阿高系土器の橋状把手である。**244**には滑石を含む。**247**は口縁頂部に粘土紐を貼付して浮文とし，胴部にはヘラ状工具による凹文を施す。245・246は北久根山式系の橋状把手と思われる。**245**は風化して不鮮明だが逆W字状の浮文が施されるているようだ。**246**の橋状把手は形骸化

し，橋状部は閉塞されている。口縁頂部に貝殻擬似縄文を施したのちに沈線文で切っている。体部には沈線文ないしは刺突文が施される。**248**は胴屈曲部に橋状把手をもち，上半部と下半部に単節斜縄文（ＲＬ）を施す。橋状把手の頂部には沈線で「Ｅ」を横にしたような意匠を施す。器形は浅鉢と考えられるが，北久根山第一型式・第二型式には類例はなく，北久根山式系の土器であろうが分類に窮する。把手の形状や施文は福江市白浜貝塚のもの（報文では PL18-31）に類似する。

(22) 突起（249～251）

249・251は渦紋の意匠をもつ突起である。**249**の内面は鋸歯状の沈線文をもつ。沈線端には刺突をもつため，北久根山第二型式式土器に含まれる資料であろう。**251**も類似した渦紋をもつが，渦紋を施したのちに貝殻擬似縄文で飾っている。

(23) 有孔円盤（第24図252～254）

252・253ともに滑石を含み，第Ⅶ群土器（坂の下式土器）に属するものであろう。**252**は直径5.5cm，**253**は直径4.5cmである。**254**は滑石を含まないもので，直径4.5cmである。穿孔痕はあるが，貫通していない。未製品と思われる。

(24) 底部（第25図255～260）

底部は滑石を含むもの，貝殻を混入するもの，混和材を含まないものがある。**255**は貝殻を胎土中に含み，器壁や底部に厚みがあり，第XVI群（後期無文土器）の底部とみられる。底部には魚骨とみられる圧痕がのこり，特徴的な土器である。**256**は胎土に滑石を含み第Ⅶ群土器（坂の下式土器）の底部と考えられる。底部には鯨の脊椎骨の圧痕がみられる。**257**は胎土・調整よりみて第XIII群土器（北久根山第一型式）の深鉢の底部である。258～260も後期の有文土器の底部であろう。**257・258**は上げ底気味になる。**259**は底部に粘土塊を貼り付け，横に張り出すように成形されている。**260**は底部内面のケズリ調整が顕著な例である。

［註］

註１　第XI群のような口縁部に粘土帯を貼付して口縁部を肥厚させている土器はかつて前川威洋氏が浜ノ洲貝塚出土土器のなかで「口縁の突帯は山形部で巻くようになるものもある。」と指摘された第５類と分類されたもの（前川1979）や，浜ン洲貝塚で深鉢形土器Ｅ類に分類されたもののなかに類似資料が散見される（島津1987）。従来より市来式土器との関連が指摘されているが，具体的な考察はなされていない。浜ノ洲５類については「総括」で後述するように富田紘一の指摘がある。

註２　島津義昭氏はこのような突起を「蛸口状の突起」とし，「鐘崎式には含まれない」とされた（島津1987）。

註３　Ｂ２類と分類された，帯状の口縁下部が肥厚し，断面三角形状を呈するものである（富田1996）。

註４　本類については，福岡県教育委員会の水ノ江和同氏に御教示をえた。

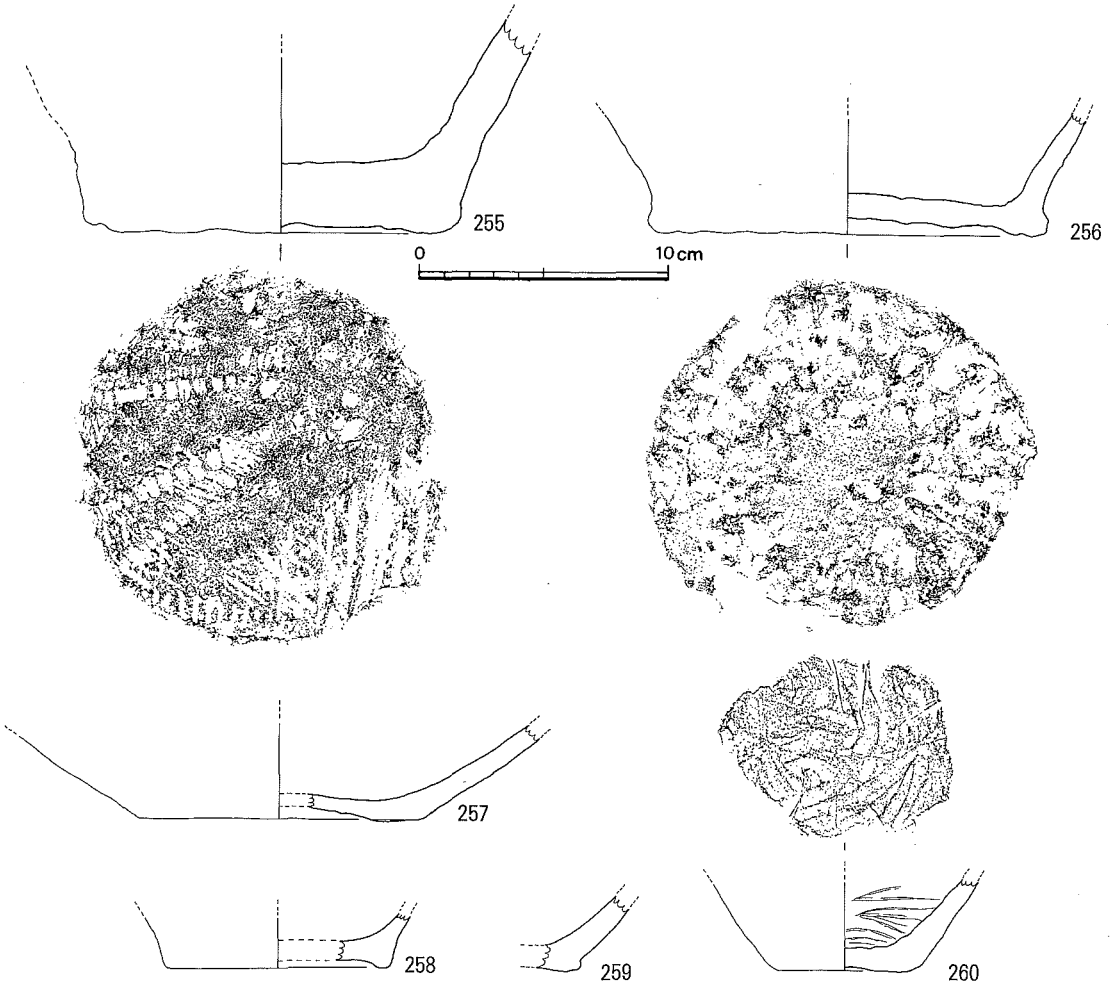
［引用・参考文献］

安楽勉・藤田和裕編1985『名切遺跡』（長崎県文化財調査報告書第71集）長崎県教育委員会

坂田邦洋1975「縄文時代に関する研究－北久根山式土器の設定－」『考古学論叢３』別府大学考古学研究会

島津義昭1987「第３章浜ン洲貝塚の調査」『浜ン洲貝塚・丸子島古墳－戸馳島古代遺跡発掘調査報告書－』熊本日日新聞社　熊本県宇土郡三角町

富田紘一1996『北久根山』肥後上代文化研究会



第25図　縄文土器⑳（s＝1/3）

第１表　土器観察(1)

図版番号	器種	部位	文　　様	成形手法・特徴	胎　　土	焼　成	色　　調	出土調査区
1	不明	胴部	隆帯	(外)ナデ・(内)貝殻条痕	石英・砂粒	良好	赤褐色(内外)	A
2	鉢	胴部	無文	貝殻条痕文(内外)	細砂粒	良好	暗赤褐色(内外)	B
3	深鉢	胴部	半截竹管文	ナデ(内外)	石英・長石・絹雲母	やや軟	黒褐色(外)・褐色(内)	B
4	深鉢	口縁部	隆帯・単節斜縄文(ＲＬ)・沈線文	ナデ(外)・貝条痕→ナデ消し(内)	白色砂	やや軟	褐色(内外)	B
5	深鉢	口縁部	隆帯・半截竹管文	単節斜縄文(ＲＬ)(外)・ナデ(内)	白色砂	良好	褐色(内外)	貝層
6	深鉢	口縁部	隆帯	単節斜縄文(ＲＬ)(外)・ナデ(内)	長石	やや軟	黒褐色(外)・赤褐色(内)	C-546
7	鉢	胴部	隆帯・半截竹管文	単節斜縄文(ＲＬ)(外)・ナデ(内)	白色砂	良好	暗褐色(外)・赤褐色(内)	貝層
8	鉢	胴部	隆帯・刺突文	単節斜縄文(ＬＲ)(外)・ナデ(内)	石英・白色砂	良好	黒褐色(外)・暗褐色(内)	
9	鉢	胴部	隆帯	単節斜縄文(ＬＲ)(外)・ナデ(内)	白色砂	やや軟	褐色(外)・黄褐色(内)	B
10	鉢	口縁部	隆帯	撚糸文(外)・ナデ(内)	角閃石・長石	良好	褐色(内外)	B
11	深鉢	口縁部	隆帯・半截竹管文	撚糸文(内外)	白色砂・砂粒	やや軟	暗褐色(外)・灰褐色(内)	
12	鉢	胴部	隆帯・半截竹管文	撚糸文(外)・ナデ(内)	白色砂	良好	暗褐色(内外)	
13	鉢	胴部	隆帯	撚糸文(外)・ナデ(内)	金雲母・長石	やや軟	黒褐色(外)・褐色(内)	貝層
14	鉢	胴部	隆帯・刺突	条痕文(外)・ナデ(内)	角閃石・砂粒	やや軟	暗褐色(内外)	B
15	鉢	口縁部	隆帯	条痕文(外)・ナデ(内)	白色砂	良好	暗褐色(内外)	
16	深鉢	口縁部	隆帯	刺突文(外)・擦過(内)	砂粒	やや軟	黒褐色(外)・褐色(内)	B
17	鉢	胴部	隆帯	ナデ(内外)	石英・砂粒	良好	暗褐色(内外)	貝層
18	鉢	口縁部	隆帯・刺突	ナデ(内外)	石英・白色砂	良好	黒褐色(外)・灰褐色(内)	B
19	鉢	胴部	隆帯	ナデ(内外)	砂粒	良好	灰褐色(内外)	貝層
20	鉢	口縁部	隆帯・半截竹管文・口縁部刻目	ナデ(内外)	砂粒	良好	褐色(内外)	
21	鉢	口縁部	隆帯・刺突	ナデ(内外)	長石・砂粒	良好	黄褐色(内外)	C
22	鉢	胴部	隆帯・半截竹管文	ナデ(外)・ケズリ(内)	石英・砂粒	やや軟	黒褐色(外)・褐色(内)	
23	深鉢	口縁部	無文	単節斜縄文(ＲＬ)(外)・ナデ(内)	細砂粒	やや軟	暗褐色(内外)	B
24	深鉢	胴部	無文	単節斜縄文(ＲＬ)(外)・ナデ(内)	砂粒	やや軟	黒褐色(内外)	C-871
25	深鉢	胴部	無文	単節斜縄文(ＬＲ)(外)・ナデ(内)	金雲母	やや軟	赤褐色・(外)褐色(内)	C-544
26	鉢	胴部	無文	単節斜縄文(ＲＬ)(外)・ナデ(内)	細砂粒	良好	褐色(内外)	B
27	鉢	胴部	無文	単節斜縄文(ＲＬ)(外)・ナデ(内)	細砂粒	良好	暗褐色(内外)	貝層
28	鉢	胴部	無文	縄文(外)・ナデ(内)	金雲母	良好	暗褐色(内外)	A
29	鉢	胴部	無文	縄文(外)・貝条痕(内)	細砂粒	良好	暗褐色(内外)	
30	鉢	胴部	地紋	単節斜縄文(ＲＬ)(外)・ナデ(内)	金雲母・白色砂	良好	褐色(内外)	B-410
31	鉢	胴部	無文	縄文(外)・ナデ(内)	細砂粒	良好	褐色(内外)	
32	鉢	胴部	無文	撚糸文か無節斜縄文(外)・ナデ(内)	石英	やや軟	茶褐色(内外)	C-871
33	鉢	胴部	半截竹管文	単節斜縄文(ＲＬ)(外)・ナデ(内)	白色砂	良好	褐色(内外)	
34	鉢	胴部	無文	縄文(外)・ナデ(内)	金雲母・砂粒	やや軟	褐色(外)・黒褐色(内)	C-541
35	鉢	胴部	無文	縄文(外)・ナデ(内)	白色砂	良好	暗褐色(内外)	
36	深鉢	胴部	半截竹管文	撚糸文(外)・ナデ(内)	白色砂・長石	良好	黒褐色(外)・灰褐色(内)	C-536
37	深鉢	胴部	無文	撚糸文(外)・ナデ(内)	白色砂	良好	褐色(内外)	B-202
38	深鉢	胴部	無文	撚糸文(外)・ナデ(内)	白色砂	良好	赤褐色(外)・暗褐色(内)	B

第 2 表　土器観察(2)

図版番号	器種	部位	文　　様	成形手法・特徴	胎　　土	焼　成	色　　調	出土調査区
39	深鉢	胴部	無文	撚糸文(外)・ナデ(内)	砂粒	良好	赤褐色(外)・暗褐色(内)	B
40	深鉢	胴部	無文	撚糸文(外)・ナデ(内)	砂粒	良好	暗褐色(内外)	
41	深鉢	胴部	無文	撚糸文(外)・ナデ(内)	白色砂	良好	黒褐色(外)・灰褐色(内)	C-537
42	鉢	口縁部	刺突文	ナデ(内外)	長石	やや軟	黒褐色(内外)	
43	鉢	胴部	刺突文	ナデ(内外)	細砂粒	やや軟	褐色	B
44	深鉢	口縁部	沈線文・補修孔	ナデ(内外)	長石・砂粒	良好	褐色(内外)	B
45	深鉢	口縁部	短沈線文	ナデ(内外)	滑石	良好	暗褐色(内外)	B
46	深鉢	口縁部	短沈線文	ナデ(内外)	長石・砂粒	良好	褐色(内外)	B
47	深鉢	口縁部	短沈線文	ナデ(内外)	砂粒・長石	良好	褐色(内外)	貝層
48	深鉢	口縁部	短沈線文	ナデ(内外)	滑石	良好	暗褐色	A-560
49	深鉢	口縁部	短沈線文	ナデ(内外)	滑石	良好	暗褐色	
50	鉢	口縁部	沈線文・刺突文	ナデ(外)擦過(内)	長石	良好	赤褐色(外)褐色(内)	B
51	鉢	口縁部	凹文・押引文	ナデ(内外)	滑石	堅緻	白黄色(外)・暗灰色(内)	C-882
52	鉢	口縁部	凹文・押引文	ナデ(内外)	滑石(内外)	堅緻	黒灰色(内外)	貝層
53	鉢	口縁部	凹文・押引文	ナデ(内外)	滑石	堅緻	赤褐色(内外)	B
54	鉢	口縁部	凹文・押引文	ナデ(内外)	滑石	堅緻	白黄色(内外)	B
55	鉢	口縁部	凹文・押引文	ナデ(内外)	滑石(内外)	堅緻	白黄色(内外)	C
56	深鉢	胴部	無文	ナデ(外)・条痕(内)	滑石	堅緻	淡赤褐色(内外)	
57	深鉢	口縁部	凹文・沈線文	ナデ(内外)	滑石	堅緻	暗赤褐色(内外)	C-881
58	深鉢	口縁部	口唇部刻目・沈線・斜行沈線	ナデ(内外)	長石・砂粒	良好	褐色(外)・明黄褐色(内)	A
59	浅鉢	口縁部	口唇部刺突文・口唇部刻目・刻目突帯・凹線	ナデ(内外)	滑石	良好	暗赤褐色(外)・赤褐色(内)	B-216
60	深鉢	口縁部	縦位短沈線・横位沈線	ナデ(内外)	滑石	やや軟	黒褐色(内外)	C-525
61	鉢	橋状把手	刻目突帯・短沈線	ナデ(内外)	滑石	良好	赤褐色(内外)	
62	深鉢	口縁部	斜行沈線・沈線	ナデ(内外)	細砂粒	良好	暗黄褐色(内外)	A
63	深鉢	胴部	貝殻腹縁圧痕	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	明褐色(内外)	
64	深鉢	口縁部	貝殻腹縁圧痕	ナデ(内外)	長石	良好	褐色(外)・黒褐色(内)	
65	深鉢	口縁部	無文	ナデ(内外)	砂粒・長石	良好	黒褐色(外)・黄褐色(内)	A
66	深鉢	口縁部	口唇部刻目・刺突文	ナデ(内外)	砂粒	やや軟	暗褐色(内外)	A
68	深鉢	口縁部	刺突文	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	褐色(外)・暗褐色(内)	B
69	深鉢	胴部	凹文	ナデ(内外)	滑石	堅緻	暗赤褐色(外)・暗褐色(内)	B-216
70	鉢	口縁部	凹線・突起	ナデ(外)・条痕(内)	滑石	堅緻	暗赤褐色(外)・黒褐色(内)	C-897
71	鉢	胴部	凹線	ナデ(内外)	滑石	堅緻	暗赤褐色(内外)	A
72	鉢	口縁部	凹点文・凹線	ナデ(内外)	滑石	堅緻	赤褐色(内外)	A-896
73	深鉢	口縁部	凹文	ナデ(外)・指おさえ(内)	滑石	堅緻	暗赤褐色(内外)	B-076/078
74	深鉢	口縁部	凹点文・凹文	ナデ(内外)	滑石	良好	暗褐色(内外)	C-895
75	深鉢	口縁部	凹点文・凹文・補修孔	ナデ(内外)	滑石(内外)	堅緻	暗褐色(内外)	B
76	深鉢	口縁部	凹点文・凹線文	ナデ(内外)	滑石	やや軟	暗赤褐色(内外)	
77	鉢	口縁部	突帯・凹文	ナデ(内外)	砂粒	堅緻	暗赤褐色(外)・暗褐色(内)	
78	深鉢	口縁部	無文	ナデ(外)・指頭圧痕(内)	滑石	良好	赤褐色(内外)	B
79	深鉢	口縁部	突帯・凹文	ナデ(内外)	貝粉	良好	暗赤褐色(内外)	
80	口縁部	突起	刻目突帯・凹文	ナデ(内外)	貝粉	良好(内外)	暗赤褐色(内外)	B
81	鉢	口縁部	沈線状凹文	ナデ(内外)	長石	良好	黄橙色(内外)	表採
82	深鉢	胴部	浮文・凹点文	ナデ(内外)	滑石	堅緻	褐色(内外)	A
83	浅鉢		橋状把手・突起・凹線	ナデ(内外)	細砂粒	堅緻	赤褐色(内外)	B-080
84	深鉢		凹文・凹点文	ナデ(内外)	滑石	良好	赤褐色(内外)	
85	浅鉢	橋状把手	沈線・櫛歯状刺突文	ナデ(内外)	角閃石	良好	黄褐色(内外)	C
86	浅鉢	口縁部	櫛歯状刺突文・沈線	ナデ(内外)	細砂粒・長石	良好	黄褐色(内外)	A
87	浅鉢	橋状把手	櫛歯状文・渦文・沈線・擬似縄文	ナデ(外)・ケズリ(内)	砂粒	堅緻	暗褐色(内外)	A-722
88	浅鉢	口縁部	櫛歯状刺突文・沈線	ナデ(内外)	白色砂・長石・絹雲母	良好	黄褐色(内外)	A-675
89	浅鉢	胴部	沈線・単節斜縄文(RL)	ナデ(外)・ケズリ→ナデ(内)	精選	良好	明黄褐色(内外)	A-448
90	浅鉢	胴部	沈線・単節斜縄文(RL)	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	赤褐色(外)・黒褐色(内)	A
91	浅鉢	口縁部	単節斜縄文(RL)・沈線・突起	ナデ(内外)	角閃石・長石	堅緻	明黄褐色(外)・黒褐色(内)	A
92	鉢	口縁部	口縁部肥厚・浮文	ナデ(内外)	精選	良好	黄橙色(内外)	
93	深鉢	口縁部	口縁部肥厚・刺突文	ナデ(内外)	赤色砂・細砂粒	良好	褐色(内外)	B
94	鉢	口縁部	浮文・穿孔	ナデ(内外)	貝粉を大量に含む	やや軟	淡赤褐色(外)・黒褐色(内)	C
95	鉢	口縁部	口縁部肥厚・無文	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	暗褐色(内外)	
96	深鉢	口縁部	橋状把手・斜行沈線・浮文	ナデ(内外)	長石・砂粒	良好	茶褐色(外)・黄橙色(内)	A-379
97	深鉢	口縁部	橋状把手・刺突文・沈線文	ナデ(内外)	角閃石・長石・砂粒	良好	暗褐色(内外)	
98	深鉢	口縁部	橋状把手・斜行沈線	縦位研磨(外)・横位研磨(内)	金雲母・砂粒	良好	黒褐色(内外)	A-71/144
99	深鉢	口縁部	橋状把手・斜行短沈線・沈線	ナデ(外)・ケズリ(内)	金雲母・砂粒	やや軟	茶褐色(内外)	A-104/105
100	深鉢	口縁部	「W」字状沈線文・斜行沈線	ナデ(内外)	金雲母・長石・角閃石・砂粒	良好	褐色(内外)	A
101	深鉢	口縁部	逆W字貼付文・貝条痕・口唇部刻目	ナデ(内外)	金雲母	良好	褐色(外)・黒褐色(内)	A
102	深鉢	口縁部	逆W字貼付文・口唇部刻目	ナデ(内外)	角閃石・長石・細砂粒	良好	黒褐色(内外)	A-271
103	深鉢	口縁部	浮文・斜行沈線	ナデ(内外)	金雲母	堅緻	黒褐色(内外)	A-504
104	深鉢	口縁部	橋状把手・刺突文・斜行沈線文	ナデ(内外)	金雲母・角閃石・砂粒	堅緻	赤褐色(外)・黒褐色(内)	A
105	深鉢	口縁部	W字状貼付文・斜行沈線文	ナデ(外)・研磨(内)	金雲母・長石	堅緻	黒褐色(外)赤褐色(内)	A-902
106	深鉢	口縁部	橋状把手・浮文・沈線文	ナデ(内外)	角閃石・絹雲母	良好	明黄褐色(外)・灰黄褐色(内)	A
107	深鉢	口縁部	短沈線文	研磨状ナデ(外)・ナデ(内)	金雲母・砂粒	良好	茶褐色(外)・黄橙色(内)	A-665
108	深鉢	口縁部	斜行沈線文・横走沈線文	ナデ(内外)	金雲母・長石・角閃石	良好	黒褐色(内外)	A
109	深鉢	口縁部	斜行沈線	研磨状ナデ(内外)	金雲母・長石・細砂粒	良好	褐色(外)・黒褐色(内)	A
110	深鉢	口縁部	綾杉状文	ナデ(内外)	金雲母・角閃石・長石・赤色砂	良好	黒褐色(外)・明黄褐色(内)	A
111	深鉢	口縁部	斜行沈線・口唇部沈線	ナデ(外)・ケズリ(内)	金雲母・砂粒	良好	黒褐色(内外)	A-132
112	深鉢	口縁部	綾杉状沈線文	ナデ(内外)	角閃石・砂粒	良好	褐色(外)・黒褐色(内)	A 煤付着
113	深鉢	口縁部	斜行沈線・横走沈線	単節斜縄文(RL)・ナデ(内外)	角閃石・長石	堅緻	黒褐色(内外)	A-699
114	深鉢	口縁部	短沈線文	ナデ(外)・研磨状ナデ(内)	角閃石・長石	良好	黒褐色(外)・赤褐色(内)	A-814
115	深鉢	口縁部	斜行沈線(外)	ナデ(内外)	金雲母	良好	黒褐色(内外)	A-566
116	深鉢	口縁部	綾杉状短沈線・隆帯	ナデ(内外)	金雲母・長石・砂粒	良好	黒褐色(外)・褐色(内)	A
117	深鉢	口縁部	斜行沈線・隆帯	ナデ(内外)	角閃石・長石・絹雲母・砂粒	良好	黒褐色(内外)	A-618
118	深鉢	口縁部	斜行短沈線・山形沈線文・隆帯	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	褐色(外)・灰褐色(内)	B
119	深鉢	口縁部	綾杉状短沈線文・口唇部に沈線	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	茶褐色(外)・明黄褐色(内)	A-568
120	深鉢	口縁部	斜行短沈線・沈線文	ナデ(内外)	金雲母・角閃石・白色砂	良好	赤褐色(外)暗赤褐色(内)	A-267
121	深鉢	口縁部	綾杉状沈線・口唇部沈線→刺突	ナデ(内外)	金雲母	良好	褐色(内外)	
122	深鉢	口縁部	斜行短沈線・口唇部沈線	ナデ(内外)	金雲母・砂粒	良好	暗茶褐色(内外)	A
123	浅鉢	口縁部	短沈線文・刺突文	ナデ(内外)	長石・金雲母	良好	褐色(外)・茶褐色(内)	B
124	深鉢	胴部	沈線文・擬似縄文	ナデ	金雲母・砂粒	堅緻	黄褐色(外)・黒灰色(内)	A
125	深鉢	胴部	沈線文・沈線端刺突	ナデ(内外)	角閃石・長石・砂粒	良好	赤褐色(外)・黒灰色(内)	A-596
126	深鉢	胴部	沈線・沈線端刺突・擬似縄文	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	黄褐色(外)・暗褐色(内)	A
127	鉢	胴部	沈線文・擬似縄文	ナデ(内)	長石・砂粒	良好	褐色(内外)	
128	鉢	口縁部	刺突による擬縄文(口唇)	ナデ(内外)	精選	良好	明黄褐色	A
129	鉢	口縁部	単節斜縄文(RL)	ナデ(内外)	金雲母	堅緻	赤褐色(内外)	B
130	鉢	口縁部	連弧沈線文・沈線端刺突・単節斜縄文(LR)	沈線文・擬似縄文	角閃石・長石	良好	褐色(内外)	B
131	鉢	口縁部	無文	口唇部擬似縄文・研磨状ナデ(外)・ナデ(内)	角閃石・長石	良好	暗褐色(外)・黄褐色(内)	A
132	浅鉢	口縁部	沈線・沈線端刺突文・擬似縄文	研磨(内外)	金雲母・砂粒	堅緻	茶褐色(外)・黒褐色(内)	
133	浅鉢	口縁部	単節斜縄文(LR)・磨消・沈線文・沈線端刺突	研磨(外)・ヨコナデ(内)	金雲母・砂粒	良好	茶褐色(内外)	A-501/569
134	浅鉢	胴部	沈線・擬似縄文・磨消・沈線端刺突	研磨(外)・ナデ→ケズリ(内)	金雲母	良好	赤褐色(外)・暗褐色(内)	A
135	浅鉢	胴部	沈線・擬似縄文・磨消・沈線端刺突	ナデ・ケズリ(内)	金雲母・長石・砂粒	堅緻	黒褐色(内外)	B
136	浅鉢	胴部	沈線文・擬似縄文	ナデ(内外)	細砂粒・長石	良好	暗褐色(内外)	A-620
137	浅鉢	胴部	沈線・擬似縄文・磨消	ナデ(外)・ケズリ→ナデ(内)	細砂粒・絹雲母	良好	黒褐色(内外)	A
138	浅鉢	胴部	沈線・単節斜縄文(LR)	ナデ(外)・研磨(内)	金雲母・角閃石	良好	暗褐色(外)・黒褐色(内)	A-707
139	浅鉢	胴部	縦位沈線・沈線端刺突	研磨(外)・ナデ(内)	金雲母	良好	黒褐色(外)・暗褐色(内)	A-757
140	浅鉢	胴部	沈線文・擬似縄文	ナデ(内外)	角閃石・細砂粒・赤色砂	良好	褐色(内外)	A
141	浅鉢	胴部	沈線文・沈線端刺突・擬似縄文	ナデ(内外)	長石	良好	灰褐色(内外)	A-432
142	深鉢	口縁部	沈線・擬似縄文	ナデ(内外)	絹雲母・砂粒	良好	黒褐色(外)・暗褐色(内)	A
143	深鉢	口縁部	沈線・擬似縄文	ナデ(内外)	角閃石・長石・細砂粒	良好	暗褐色(外)・灰黄色(内)	B
144	深鉢	口縁部	沈線・擬似縄文	ナデ(内外)	角閃石・長石・砂粒	良好	黒褐色(外)・暗褐色(内)	A-062
145	深鉢	口縁部	沈線文・貝条痕	研磨(外)・ナデ(内)	角閃石・長石	良好	淡黄褐色(外)・黒灰色(内)	A
146	深鉢	口縁部	擬似縄文	ナデ(内外)	角閃石・細砂粒	良好	黒褐色(外)・灰褐色(内)	A-175
147	深鉢	口縁部	沈線文・擬似縄文	ナデ(内外)	金雲母・砂粒	やや軟	黒褐色(外)・黄褐色(内)	A-864

第 3 表　土器観察(3)

図版番号	器種	部位	文　　様	成形手法・特徴	胎　　土	焼　成	色　　調	出土調査区
148	深鉢	口縁部	沈線・擬似縄文	ナデ(内外)	砂粒・長石	良好	褐色(外)・灰褐色(内)	A
149	浅鉢	口縁部	沈線	ナデ(内外)	長石	良好	黒褐色(外)・茶褐色(内)	A
150	深鉢	口縁部	沈線文・擬似縄文	ナデ(内外)	絹雲母・砂粒	良好	灰褐色(内外)	A-116
151	深鉢	口縁部	沈線文・擬似縄文	ナデ(内外)	砂粒・長石	良好	暗褐色(外)・褐色(内)	B
152	深鉢	口縁部	沈線・擬似縄文	ナデ(内外)	長石	良好	黒褐色(外)・灰褐色(内)	A
153	深鉢	口縁部	沈線文・擬似縄文	ナデ	角閃石・長石	良好	黒褐色(内外)	B
154	深鉢	胴部	沈線文・沈線端刺突	ナデ(外)・ケズリ→ナデ(内)	金雲母・砂粒	良好	黒褐色(外)・暗黄褐色(内)	
155	深鉢	口縁部	沈線・擬似縄文	ナデ(内外)	角閃石・砂粒	良好	暗茶褐色(外)・茶褐色(内)	A-059/141
156	深鉢	胴部	沈線文・擬似縄文	ナデ(内外)	角閃石・絹雲母・砂粒	良好	褐色(内外)	A-615
157	深鉢	胴部	刺突文・沈線文	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	褐色(外)・灰褐色(内)	B
158	深鉢	胴部	沈線文	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	灰褐色(外)黒褐色(内)	A
159	深鉢	口縁部	沈線文	ナデ(内外)	角閃石・長石・砂粒	やや軟	黒褐色(内外)	
160	深鉢	口縁部	貝条痕文	条痕→ナデ消し(外)・研磨(内)	角閃石・細砂粒	良好	黒褐色(外)・茶褐色(内)	A
161	深鉢	口縁部	貝条痕文	条痕→ナデ消し(外)・ナデ(内外)	角閃石・絹雲母・砂粒	良好	黒褐色(外)・灰褐色(内)	A-678
162	深鉢	口縁部	貝条痕文	条痕→ナデ消し(外)・研磨(内)	角閃石・長石	良好	暗褐色(外)・褐色(内)	A,,
163	深鉢	口縁部	無文	貝条痕	角閃石・長石	良好	黒褐色(外)・灰褐色(内)	A-121
168	鉢(壺状)	口縁部	無文	ナデ(内外)	絹雲母・長石・砂粒	良好	褐色(外)・黄橙色(内)	A,,
169	鉢	胴部	無文	ナデ(外)・ケズリ→ナデ	金雲母・砂粒	良好	褐色(外)・黒褐色(内)	A-372
170	鉢(台付)	口縁部	沈線文・枝状突起	ナデ(内外)	金雲母・砂粒・長石・絹雲母	やや軟	赤褐色(外)・黒褐色(内)	A-793
171	浅鉢	口縁部	擬似縄文・沈線文・枝状突起	ナデ(内外)	金雲母・砂粒	堅緻	黒褐色(内外)	A-793
172	浅鉢	口縁部	沈線文・刺突文	研磨(外)・ケズリ(内)	角閃石・長石・砂粒	良好	褐色(外)・暗褐色(内)	A,,
173	浅鉢	口縁部	沈線文・擬似縄文	ナデ(内外)	角閃石・長石・砂粒	良好	褐色(外)・黒褐色(内)	A-795
174	鉢	口縁部	沈線・擬似縄文	ナデ(内外)	長石	良好	褐色(内外)	A,,
175	鉢	口縁部	沈線・擬似縄文・補修孔	研磨(外)・ナデ(内)	角閃石	良好	黒褐色(外)褐色(内)	
176	小形深鉢	完形	山形突起・沈線文	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	褐色(内外)	
177	台付小形鉢	完形	細沈線	ナデ(内外)	貝殻	良好	淡黄褐色(外)・灰褐色(内)	B
178	小形深鉢	1/2残存	沈線・擬似縄文	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	褐色(内外)	B
179	皿	体部	沈線文・沈線端刺突・貝殻擬似縄文	ナデ(内外)	長石	良好	赤褐色(内外)	A
180	皿	体部	沈線文・沈線端刺突・貝殻擬似縄文	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	暗褐色(内外)	A
181	脚	脚部(透かし)	凹文	ナデ(内外)	滑石	良好	赤褐色(内外)	B
182	脚	脚	沈線・沈線端刺突・磨消・貝殻擬似縄文	ナデ(内外)	角閃石・砂粒	やや軟	黄橙色(内外)	A
183	脚	脚	透かし・沈線文・沈線端刺突	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	褐色(外)・暗褐色(内)	A-773
184	脚(透かし)		沈線文・沈線文刺突・貝殻擬似縄文	研磨(内外)	長石		褐色(内外)	A-581
185	脚	脚	沈線文	ナデ(内外)	砂粒	良好	黄褐色(内外)	A-748
186	脚	脚	沈線文・沈線端刺突・貝殻擬似縄文	ナデ(内外)	砂粒	良好	淡黄褐色	A-763
187	脚	脚	沈線文	ナデ(内外)	金雲母・細砂粒	良好	赤褐色(内外)	A
188	脚	脚	沈線文・沈線端刺突・単節斜縄文(ＲＬ)	ナデ(内外)		良好	褐色(内外)	
189	脚	脚	無文	ナデ(内外)	金雲母・角閃石・長石	良好	淡黄橙色(内外)	A-811
190	深鉢	口縁部	口唇刻目	貝殻条痕(内外)	貝粉	良好	灰褐色(内外)	B
191	深鉢	口縁部	口唇刻目	貝殻条痕(内外)	金雲母・砂粒	やや軟	暗褐色(外)・褐色(内)	
192	深鉢	口縁部	無文	貝殻条痕(内外)	貝殻	やや軟	茶褐色(外)・赤褐色(内)	A
193	深鉢	口縁部	無文	貝殻条痕	金雲母・砂粒	やや軟	暗褐色(外)・黄褐色(内)	B
194	粗製深鉢	口縁部	無文	貝殻条痕(内外)	貝粉	やや軟	褐色(内外)	B 内面下半に煤付着
195	深鉢	口縁部	口唇部刻目	貝殻条痕(内外)	金雲母・砂粒	良好	黒褐色(内外)	A
196	深鉢	口縁部	無文	貝殻条痕(内外)	砂粒	やや軟	茶褐色(外)・褐色(内)	A-014
197	深鉢	口縁部	無文	貝殻条痕(内外)	貝粉	やや軟	暗褐色(外)・明褐色(内)	
198	深鉢	口縁部	粗製無文	貝条痕(内外)	長石・砂粒	やや軟	褐色(内外)	A
199	深鉢	口縁部	無文	ナデ(外)・ケズリ状ナデ(内)	砂粒・金雲母	やや軟	灰褐色(外)・暗褐色(内)	A
200	粗製深鉢	口縁部	口唇部刻目	擦過条痕(外)・ナデ(内)	貝粉	良好	暗褐色(外)・明黄褐色(内)	B
201	深鉢	口縁部	口唇部刻目	ヘラナデ(内)	金雲母・砂粒	良好	暗褐色(内外)	
202	粗製深鉢	口縁部	無文	口唇部刻目	貝粉	良好	赤褐色(内外)	
203	深鉢	口縁部	口唇部刻目	擦過条痕(外)・ヘラケズリ状ナデ(内)	金雲母・砂粒	良好	暗褐色(内外)	A
204	浅鉢	口縁部	単節斜縄文(ＲＬ)	ナデ(内外)	長石	やや軟	黒褐色(内外)	A
205	鉢	口縁部	刺突による綾杉状文	ナデ(内外)	金雲母・角閃石・長石	良好	褐色(内外)	A-363 黒斑有(内)
206	浅鉢	口縁部	櫛歯状刺突文・貝殻擬似縄文	ナデ(内外)	角閃石・長石	やや軟	赤褐色(外)・灰黒褐色(内)	A
207	浅鉢	口縁部	沈線文・貝殻擬似縄文。口唇部沈線	ナデ(内外)	金雲母・長石	良好	黒褐色(内外)	
208	浅鉢	口縁部	沈線	ナデ(外)・貝殻条痕(内)	細砂粒	良好	明黄褐色(内外)	表採
209	浅鉢	口縁部	沈線・貝殻擬似縄文・口唇部沈線・補修孔	ナデ(内外)	角閃石・絹雲母	良好	赤褐色(内外)	A
210	浅鉢	口縁部	沈線	ナデ(内外)	石英粒・白色砂	良好	赤褐色(内外)	B
211	精製浅鉢	口縁部	単節斜縄文(ＲＬ)・沈線	ナデ(内外)	精選	堅緻	黄褐色(内外)	
212	浅鉢	口縁部	刺突文・沈線	ナデ(内外)	長石	良好	淡黄褐色	A-392
213	浅鉢	胴部	沈線文・単節斜縄文(ＲＬ)	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	黄褐色(外)・淡赤褐色(内)	A
214	浅鉢	口縁部	貝刺突文・沈線・貝殻擬似縄文	ナデ(内外)	長石・絹雲母	良好	赤褐色(内外)	
215	浅鉢	口縁部	貝刺突文・沈線・貝殻擬似縄文	ナデ(内外)	絹雲母・石英粒	やや軟	赤褐色(内外)	B
216	浅鉢	口縁部	無文	ナデ(内外)	砂粒	良好	淡赤褐色(内外)	A
217	浅鉢	口縁部	沈線文・貝殻擬似縄文・口唇部に二条沈線	ナデ(内外)	角閃石・長石・絹雲母	良好	黒褐色(内外)	
218	浅鉢	口縁部	貝沈線(外)・刺突文(外)・貝殻擬似縄文(外)	貝条痕(内)	長石	良好	褐色(内外)	A-468
219	浅鉢	口縁部	沈線・貝殻擬似縄文・沈線端刺突	ナデ(内外)	金雲母・石英	良好	褐色(外)・黒褐色(内)	A
220	浅鉢	口縁部	沈線文	ナデ(外)・条痕(外)	長石	良好	褐色(外)・黒灰色(内)	A
221	浅鉢	口縁部	沈線文・貝殻擬似縄文	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	黒褐色(外)・褐色(内)	A
222	浅鉢	口縁部	沈線文・貝殻擬似縄文	ナデ(内外)	金雲母	良好	黒褐色(内外)	A-274
223	浅鉢	口縁部	沈線・貝殻擬似縄文	ナデ(内外)	金雲母・石英粒	良好	淡赤褐色(内外)	A
224	浅鉢	口縁部	沈線文・貝殻擬似縄文	ナデ(内外)	金雲母・砂粒	良好	黒褐色(外)・茶褐色(内)	
225	浅鉢	口縁部	斜行沈線・貝殻擬似縄文	ナデ(内外)	長石・赤色砂	良好	暗褐色(内外)	A
226	鉢	口縁部	沈線・浮文・擬似縄文	ナデ(外)・貝条痕→ナデ消し(内)	角閃石・砂粒	良好	淡黄褐色(外)・茶褐色(内)	A-723
227	鉢	口縁部	浮文・擬似縄文・沈線	ナデ(内外)	金雲母・砂粒	良好	黒褐色(内外)	A-268
228	鉢	胴部	単節斜縄文(ＲＬ)・沈線・鉤弧文	ナデ(内外)	長石・角閃石	やや軟	暗褐色(内外)	B
229	浅鉢	口縁部	沈線	ナデ(外)・研磨(内)	貝粉	良好	茶褐色(外)・黒褐色(内)	表採
230	浅鉢	口縁部	沈線・沈線端刺突	ナデ(内外)		良好	褐色(内外)	A
231	浅鉢	口縁部	沈線文	縄文(外)・ナデ(内)	長石	良好	褐色(内外)	B
232	鉢	口縁部	沈線文・貝殻擬似縄文	ナデ(内外)	角閃石・長石・赤色砂・砂粒	良好	黒褐色(内外)	A
233	浅鉢	口縁部	無文	研磨(内外)	砂粒	堅緻	黒褐色(内外)	A
234	浅鉢	口縁部	刺突文	研磨(内外)		良好	黒褐色(内外)	表採
235	鉢	口縁部	穿孔・擬似縄文	ナデ(内)	金雲母・砂粒	良好	灰褐色(外)・黒褐色(内)	A-090
236	鉢	口縁部	沈線	ナデ(内外)	細砂粒	良好	褐色(内外)	B
237	浅鉢	口縁部	山形沈線文・擬似縄文	ナデ(内外)	長石	良好	黒褐色(外)・茶褐色(内)	A-376
238	深鉢	口縁部	凹線	ナデ(内外)	滑石	良好	黒褐色(外)・暗赤褐色(内)	B
239	鉢	胴部	沈線文	ナデ(内外)	角閃石・長石	やや軟	褐色(内外)	A
240	深鉢	胴部	沈線・撚糸文	ナデ(内外)	角閃石・長石・砂粒	良好	赤褐色(外)・灰褐色(内)	B
241	鉢	胴部	沈線・貝殻擬似縄文	ナデ(内外)	金雲母・角閃石	堅緻	赤褐色(内外)	A-606
242	鉢	胴部	沈線文・刺突文	ナデ(内外)	角閃石・長石	良好	暗褐色(内外)	A
244	鉢	橋状把手	無文	ナデ(内外)	滑石	堅緻	淡赤褐色(内外)	
245	鉢	橋状把手	沈線文	ナデ(内外)	金雲母・長石・砂粒	やや軟	黄橙色(内外)	C
246	鉢	橋状把手	口唇部に貝殻擬似縄文・沈線文	ナデ(内外)	金雲母	良好	淡赤褐色(外)・茶褐色(内)	B
247	鉢	口縁部	橋状把手	ナデ(内外)	長石・細砂粒	良好	明黄褐色(外)・暗褐色(内)	表採
248	鉢	橋状把手	単節斜縄文(ＲＬ)・磨消・沈線	ナデ(内外)	金雲母・砂粒	良好	茶褐色(外)・黄褐色(内)	A
249	鉢	口縁部	渦紋貼付・沈線文および刺突文(内)	無文	赤色砂・白色砂・長石	良好	黄褐色(内外)	A
250	鉢	口縁部	貼付文	ナデ(内外)	金雲母・砂粒	良好	褐色(内外)	A
251	不明	突起	無文	貝殻擬似縄文(外)・ナデ(内)	角閃石・砂粒	良好	淡赤褐色(外)・黒褐色(内)	A-046
252	有孔円盤	完形	無文	ナデ(内外)	滑石	良好	赤褐色(外)・暗褐色(内)	
253	有孔円盤	完形	無文	ナデ(内外)	滑石	良好	暗褐色(内外)	
254	有孔円盤		無文	ナデ(内外)	白色砂・長石	良好	暗褐色(内外)	
255	深鉢	底部	魚骨圧痕	ナデ(内外)	貝殻	良好	赤褐色(外)・暗褐色(内)	
256	深鉢	底部	鰭脊椎骨圧痕	ナデ(内外)	滑石	良好	暗赤褐色(内外)	B
257	深鉢	底部	無文	研磨状ナデ(内外)	金雲母・砂粒	良好	褐色(内外)	A
258	鉢	底部	無文	条痕(外)・ナデ(内)	細砂粒	良好	褐色(外)・灰褐色(内)	表採
259	鉢	底部	無文	ナデ(内外)	長石・角閃石	良好	暗褐色(内外)	A
260	鉢	底部	無文	ナデ(外)・ケズリ(内)	角閃石・長石	良好	灰褐色(外)・暗褐色(内)	B

2．石器

今回の調査で出土した石器は総数で265点を数えるが，撹乱部分からの出土も多く，一括して取り扱うこととした。定形石器を中心に55点を取り上げ，地点ごとに実測図を掲載し説明を加える。おおむねA地点は2層から，B・C地点は3層から出土した石器群とすることができる。

(1) A地点

【剥片石器】第26図1～12

1は小形の二等辺三角鏃で，大きさの割に分厚い。浅い弧状の抉りが入る。**2**は大形剥片鏃である。大振りの縦長剥片を素材とする。基部側の抉りは浅く，調整剥離も雑である。側縁調整は顕著ではない。この種の大形剥片鏃は五島列島から対馬にかけての外洋に面した縄文時代後期の遺跡で検出される石器で，前期から中期にかけて隆盛した石銛（安山岩製の有茎のもの）や組合せ道具である石鋸（鋸歯状の抉りをもつ大形石鏃）にかわるものとして登場し，石鋸と組み合わせて使用するもので，その先端部に装着するヘッドと推測されている。

3は折断した縦長剥片の基部側を使用した端刃削器であろう。打点側に刃部を形成している。**4**は風化して白色化した頁岩を素材とする削器である。両面から調整剥離が丁寧に入る。刃縁はジグザグを呈する。

5は大形の縦長剥片の基部側に抉入状の調整加工を施した石器である。剥片の先端部には折断するための浅い抉りと折断面を残しており，本来はつまみ形石器であったものと思われる。ところが抉入部には顕著な擦痕がみられることからこの部分を使用する石器であると推測される（註1）。**6**はいわゆるつまみ形石器である。両側縁から抉りが施され，先端部には折断面を残す。

7・**9**は使用痕のある大形の縦長剥片である。両側辺に使用痕と思われる微細な剥離が看取される。いずれも縦長剥片を素材とし，おそらく本来は大形剥片鏃の素材と思われる（註2）。**8**は大形の縦長剥片の基部側にあたる。**10**・**11**は小形の使用痕のある縦長剥片である。**11**は「鈴桶型刃器技法」の所産か。**12**は不定形な剥片で，被熱している。

【礫石器類】第27図13～21，第28図22～27

13は蛇紋岩製の磨製石斧である。全面が丁寧に研磨されているが，基部・刃部の両端は破損している。**14**は砂岩の大形剥片を素材とした石斧で，刃部は若干弧状を呈するものの丁寧に研磨して作出されている。表面には自然面を大きく残し，裏面の刃部側に主要剥離面の一部が残る。**15**～**19**はいずれも乳棒状石斧の資料である。**15**は刃部側に敲打痕を残すものの刃部の研磨はみられない。**16**～**19**までは製作途中での破損品である。**17**は全面に敲打痕が残っており完成間近で破損したものか（註3）。

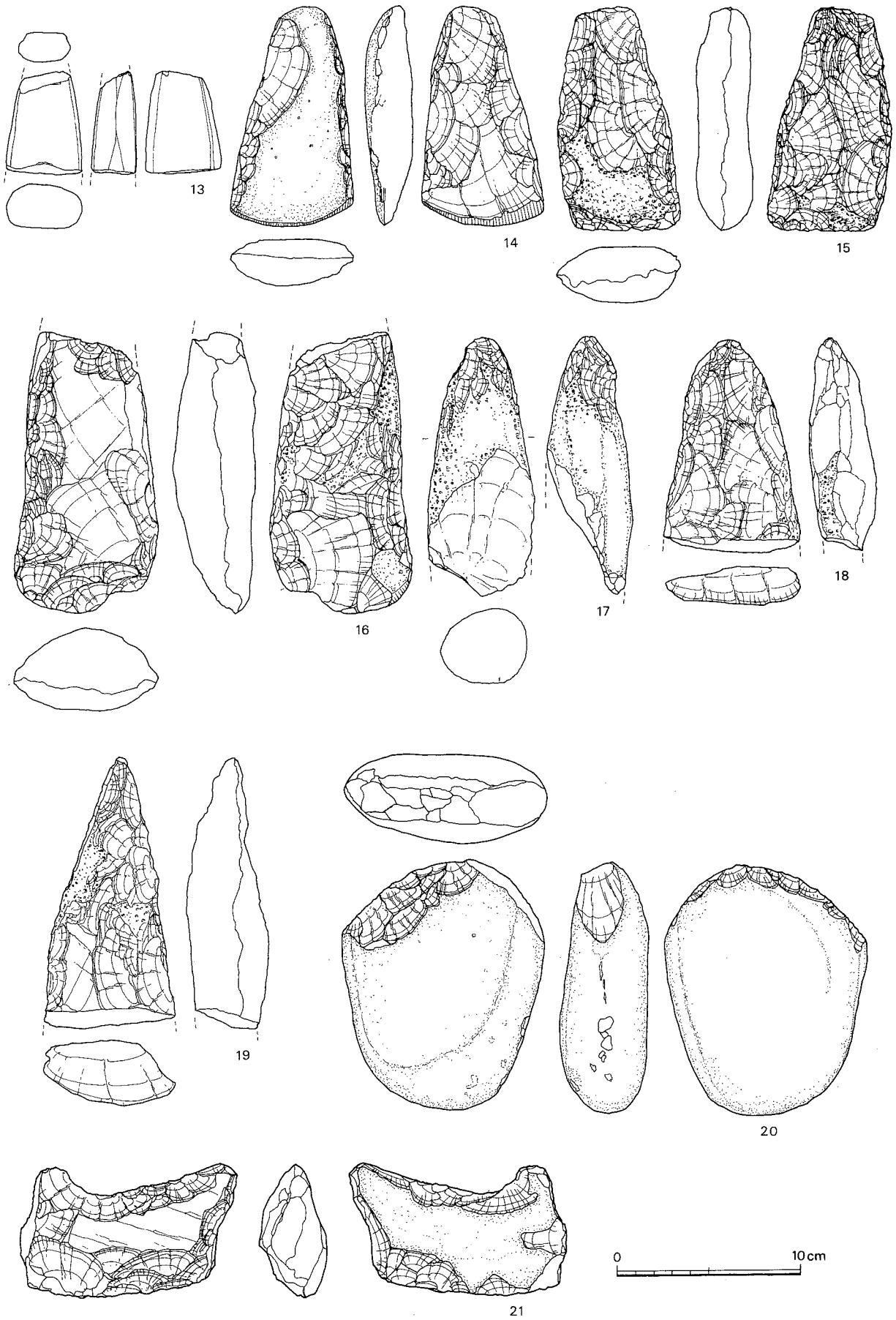
20は砂岩の楕円形を呈する大形の扁平な海浜礫を素材とし，一端に交互剥離によって刃部を形成するいわゆるチョッピングトゥールである。**21**は2つの尖頭部をもつ双角状礫器である。石材は溶結凝灰岩の転礫で，片面に自然面を大きく残すとともに主要剥離面も一部残っている。**22**は分厚い円礫を用いた凹石であろう。平坦面側に敲打による若干の凹みがある。周縁が敲打によって潰れており敲石の機能も備えていたものと思われる。石材は不明である。**23**～**25**は扁平な海浜円礫を素材とする石錘である。長軸もしくは短軸のいずれかに対称的に紐かけの加工を施す。**23**は不整形な扁平礫を使った石錘である。長軸方向に紐かけ部を作出している。**23**・**24**が砂岩，**25**が溶岩を素材とする。**26**は溶結凝灰岩の縦長の棒状礫を使った敲石である。両端に顕著な敲打痕があり，用途としては乳棒状石斧の敲打調整が考えられる。**27**は海浜円礫の荒割剥片である（註4）。

第26図　石器(1)（s＝2/3）

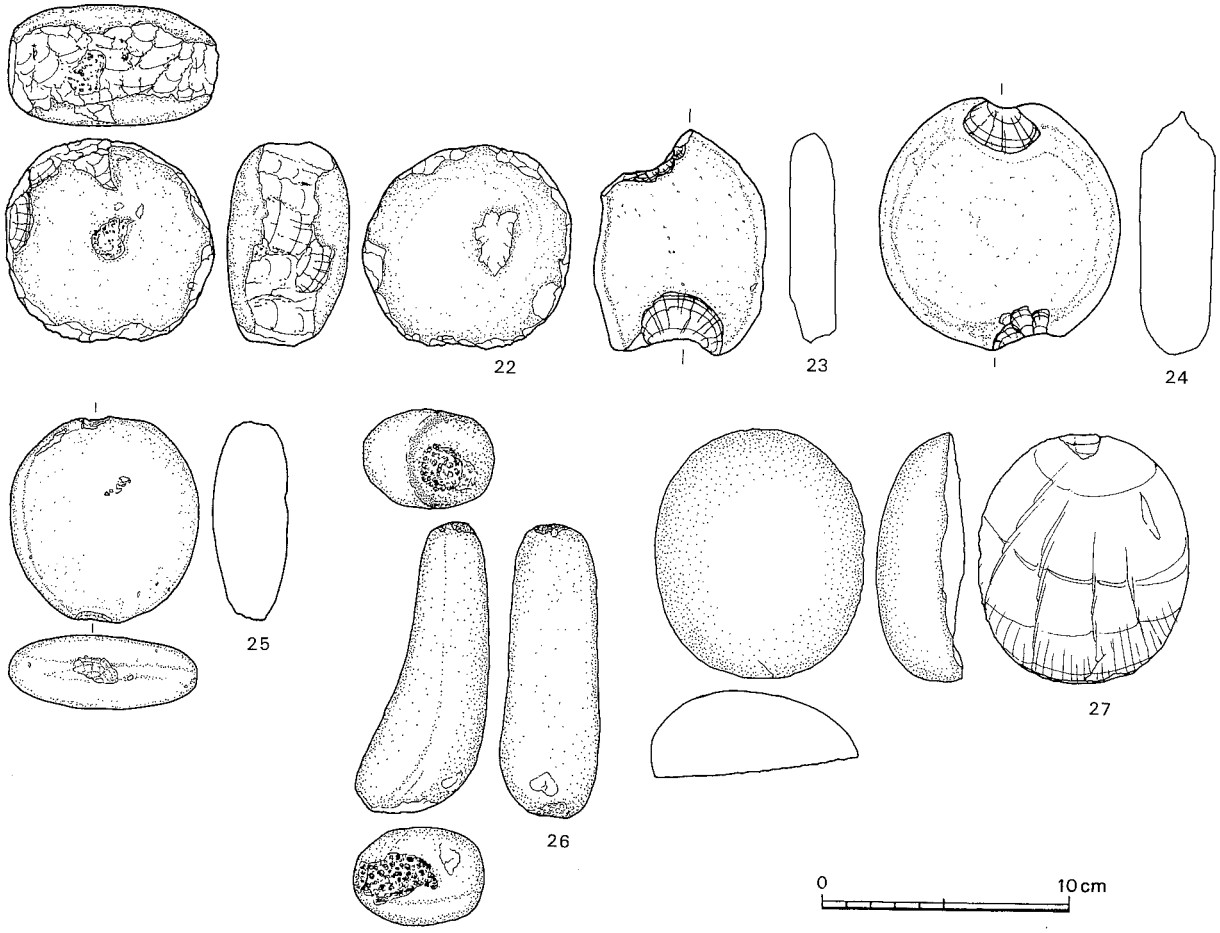
(2)　B・C地点

【剥片石器】第29図28～35

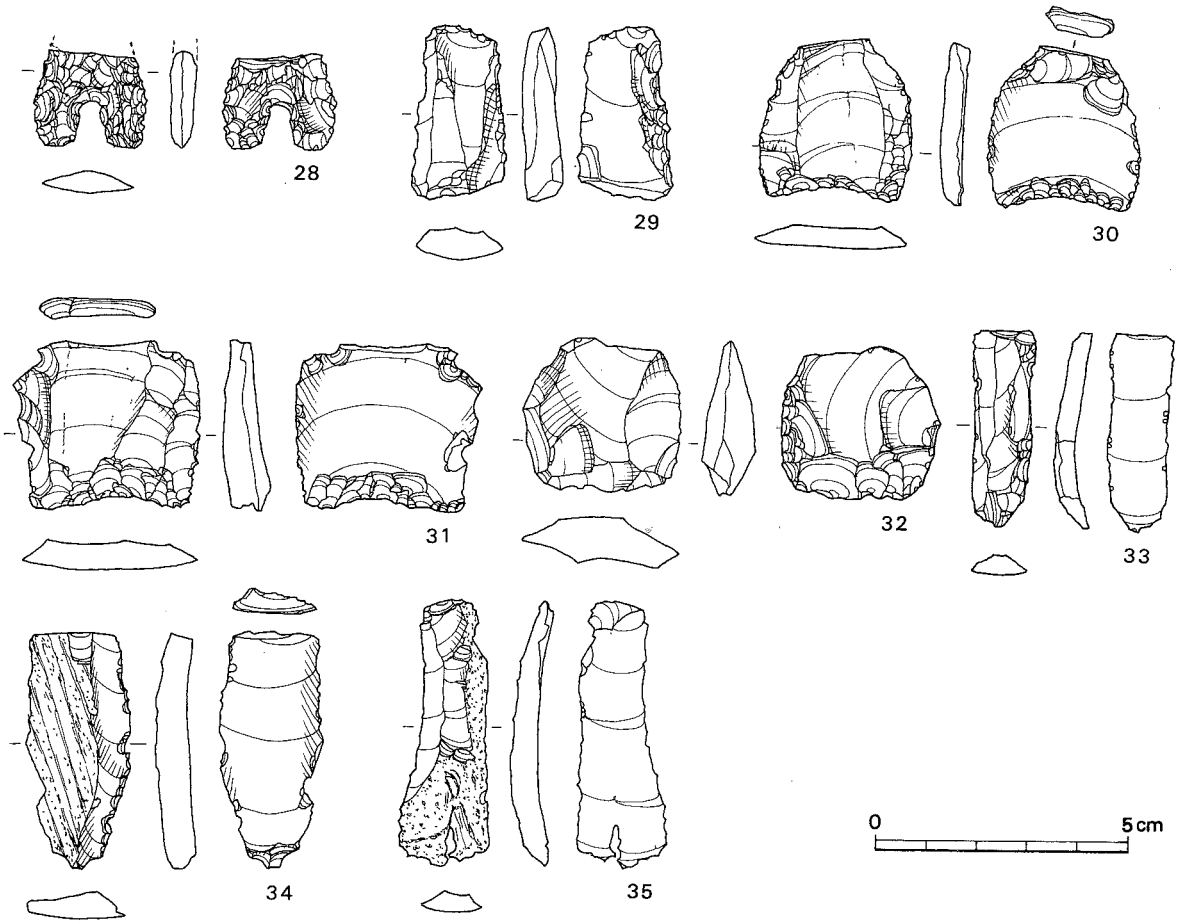
28は大振りの浅い抉りの凹基の石鏃である。脚部は左右非対称である。表裏からの調整剥離によって両側縁は鋸歯状となっている。**29**は削器である。縦長剥片を素材とし，刃部は主要剥離面側に作られる。**30・31**は大形の縦長剥片の基部側を利用した石器である。剥片の先端部には折断するための浅い抉りと折断面を残しているところから本来はつまみ形石器であったものと思われる。**32**は不明石器である。不定形剥片を素材とする。基部とみた側には直線的な粗雑な調整剥離があり，また主要剥離



第27図　石器(2)（s＝1/2）



第28図　石器(3)（s＝1/2）



第29図　石器(4)（s＝2/3）

面側に掻器的な調整もみられる。**33**〜**35**は使用痕のある縦長剥片である。**34**・**35**には自然面が残されており，その観察からこれらの縦長剥片を作出する黒曜石は伊万里市腰岳産であることが確認される。縦長剥片は器表側の剥離痕をみると上下方向からなされており，しかも丁寧な頭部調整が施されるなど典型的な「鈴桶型刃器技法」による「縦長剥片」である。

【礫石器類】第30図36〜45，第31図46〜48

36・**37**は蛇紋岩製の磨製石斧である。２点ともに破損しており，被熱のため変色している。**38**〜**40**は乳棒状石斧の資料である。**38**は刃部側の研磨も丁寧であり完成品であろうが刃部は破損している。**39**も刃部の研磨がみられるものの最終的には敲打調整で二折したものか。**41**は溶結凝灰岩の転礫を使用した石錘である。短軸に紐かけ用の調整加工を施している。**42**も石錘である。砂岩の不整形な転礫を素材とする。**43**は砂岩の円礫を素材とする凹石である。中央部に浅い凹みがあり，周縁には敲打痕が看取される。**44**・**45**は縦長の溶結凝灰岩の海浜礫を使用した敲石である。**44**は大形の海浜礫の荒割り用，**45**は乳棒状石斧作成の敲打用の敲石であろう。**46**は結晶片岩製の石皿である。ほぼ四角形に面取りをしている。**47**は溶結凝灰岩の海浜円礫の荒割剥片である。**48**は不明石器である。いびつな平面四角形を呈する扁平礫の各辺の中央に剥離を施し，見かけは十字形石器に近い。

(3)　採集資料

【剥片石器】第32図49〜51

49は細身の石鏃で，やや深めの抉りが入る凹基の基部をもつ。脚部は左右対称になり先細りである。表裏両面ともに丁寧な調整剥離が施されており，側縁部は鋸歯状につくりだしている。わずかに先端を欠する。**50**は深い抉りの凹基の石鏃であるが、上半部を欠するため全体は不明である。脚部は左右対称で先端部が丸みをもつ。**51**は使用痕のある縦長剥片である。先端部に自然面をわずかに有する。

【礫石器】第33図52〜55

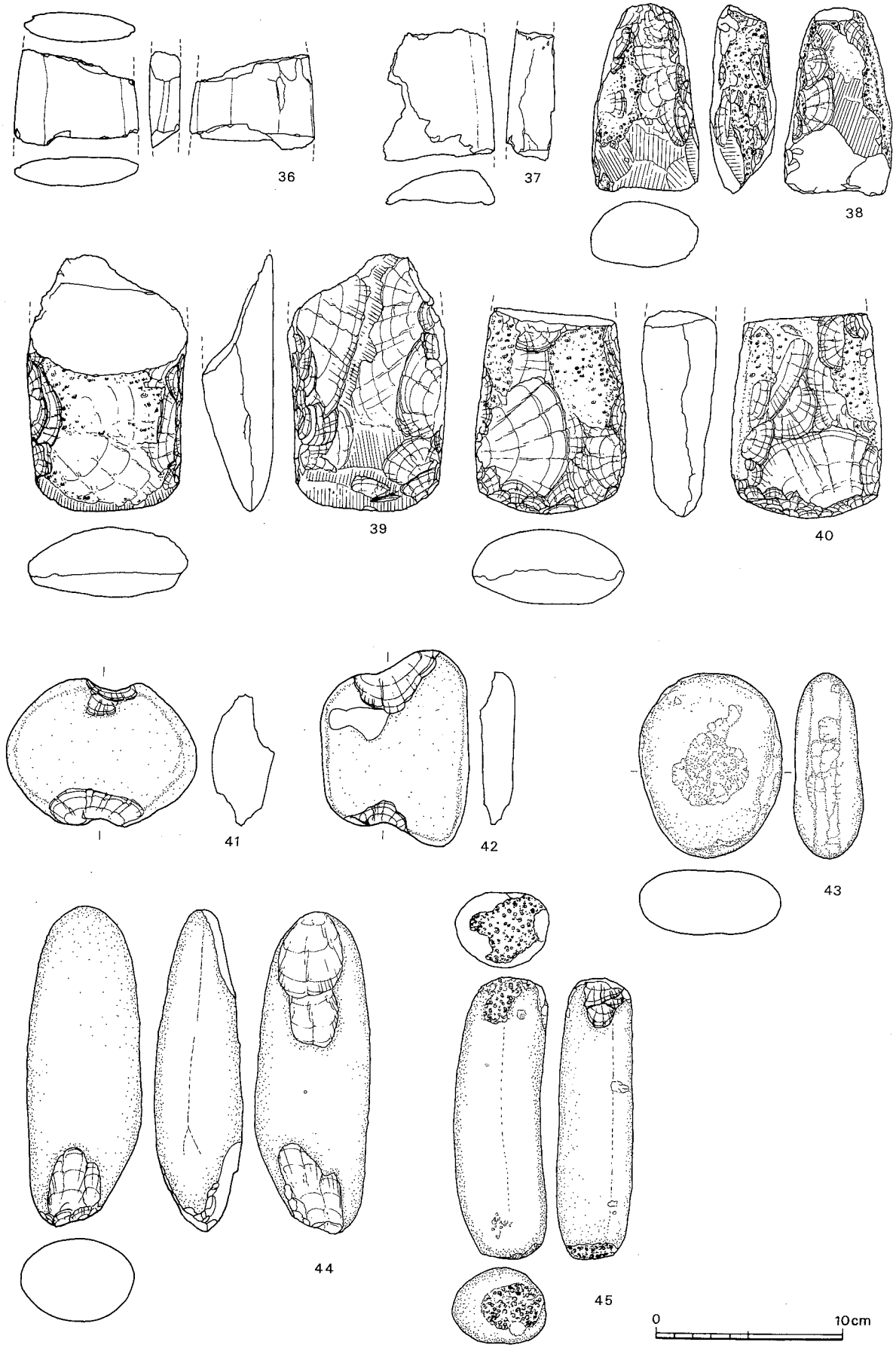
52・**53**は溶結凝灰岩を素材とする乳棒状石斧の資料である。**52**は加工開始時点の資料である。**53**は製作途中の破損品である。**54**は石ノミと思われる石器であるが，刃部の研磨はみられない。**55**は尖頭状礫器である。ほぼ三角形に整形しており，尖頭部も３カ所と考えられる。溶結凝灰岩の転礫を素材とする。

註１　この種の石器について管見を当たってみたが類例は散見される。富江湾を挟んだ福江市大浜遺跡で１点，郷ノ浦町名切遺跡で数点，峰町佐賀貝塚でも出土している。折断部を残していることから考えて刺突具的な使用を想定することは困難である。また打点側に施された調整剥離は基部加工とするには躊躇せざるを得ない。ここでは第　図８にみられるような抉入部の擦痕に注目したい。擦痕は抉入状のカーブを利用して対象物に働きかけるものと思われる。ここではその機能を骨角器の器面調整としての研磨と推測したい。その理由として，砥石がほとんど出土しないこと，骨角器の製造が極盛期に達することなどがあげられよう。

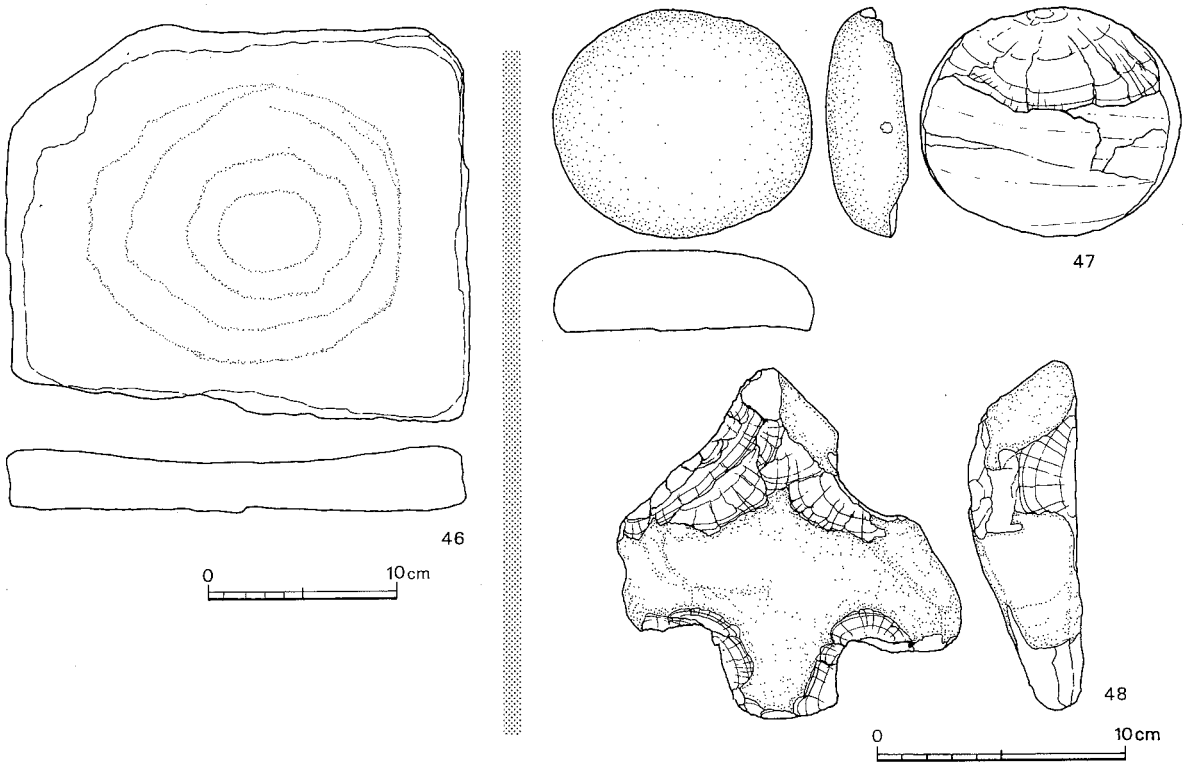
註２　これらの剥片石器の素材は，２点は表面が鈍い黒色黒曜石であるほかはすべて漆黒色を呈する黒曜石を素材とする。黒色黒曜石の原産地は佐世保市針尾島とみられるが，そのほかの良質の漆黒色黒曜石は34・35に残された自然面の観察から伊万里市腰岳産とみられる。特に「鈴桶型刃器技法」は腰岳産の角礫状の黒曜石と強く結びついており，松浦牟田産や佐世保市淀姫産・針尾島産の黒曜石を使用した例はほとんどない。

註３　乳棒状石斧については福江市中島遺跡の報文中でその製作工程復元を推測した(川道1997)。この石器は調整方法として全面に敲打整形するという技法的特徴を有するために製作途中での破損も多い。

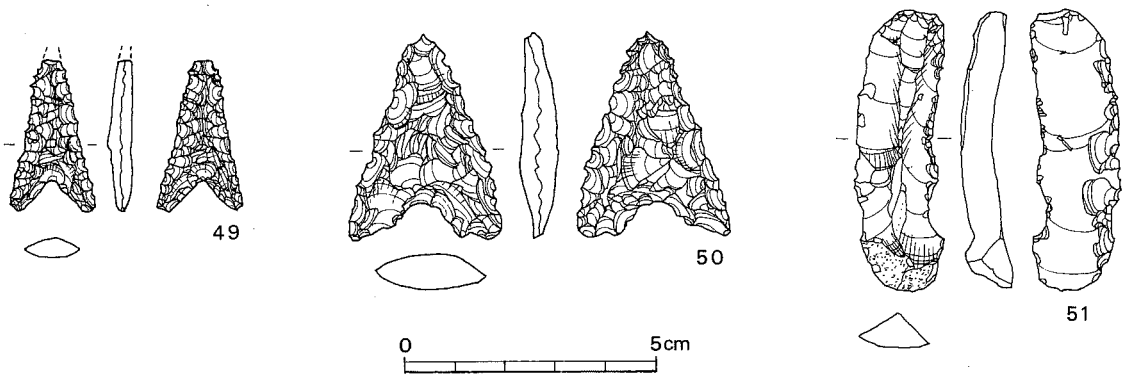
註４　海浜礫の荒割剥片は対岸の福江市中島遺跡で大量に出土している。



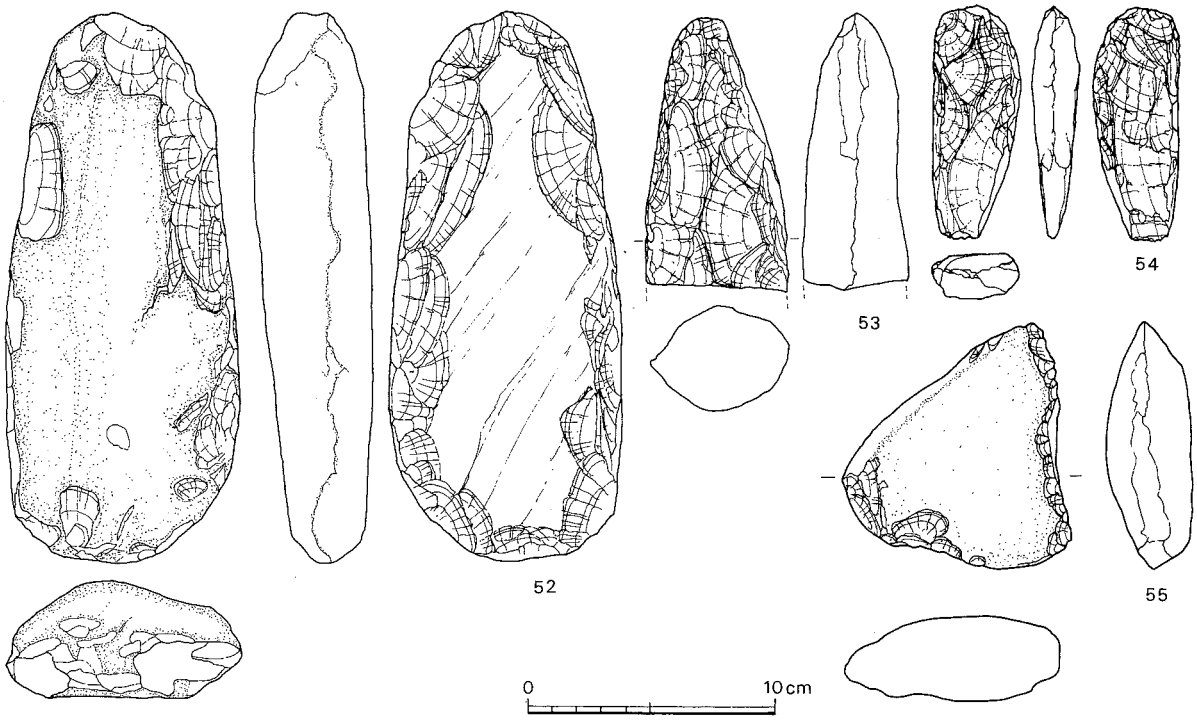
第30図　石器(5)（s＝1/2）



第31図　石器(6)（46：s＝1/3，47・48：s＝1/2）



第32図　石器(7)（s＝2/3）



第33図　石器(8)（s＝1/2）

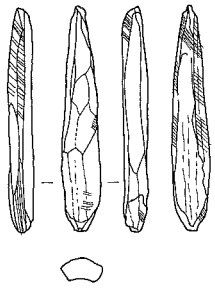
第4表　石器観察表

図版番号	出土区	器　　種	石　　質	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考
第26図 1	A地点	石鏃	漆黒色黒曜石	2.0	1.7	0.4	1.3	完形
2	A地点	剝片鏃	漆黒色黒曜石	4.7	3.1	0.4	4.7	
3	A地点	端刃削器	漆黒色黒曜石	2.8	1.8	0.6	3.2	側辺に使用痕
4	A地点	削器	頁岩	4.3	5.9	1.1	49.7	両刃
5	A地点	つまみ形石器	漆黒色黒曜石	3.7	3.1	0.6	7.3	基部調整・擦痕あり
6	A地点	つまみ形石器	漆黒色黒曜石	3.7	3.4	1.0	9.4	
7	A地点	使用痕のある剝片	漆黒色黒曜石	8.0	3.5	0.8	22.3	鈴桶型
8	A地点	剝片	漆黒色黒曜石	3.0	2.9	0.9	7.2	
9	A地点	使用痕のある剝片	漆黒色黒曜石	7.2	2.3	0.6	10.1	鈴桶型
10	A地点	剝片	漆黒色黒曜石	3.9	1.9	0.6	3.6	
11	A地点	使用痕のある剝片	漆黒色黒曜石	4.2	2.0	0.6	5.9	先端欠・鈴桶型
12	A地点	剝片	漆黒色黒曜石	3.2	1.8	0.4	2.1	被熱
第27図13	A地点	磨製石斧	蛇紋岩	*5.5	4.1	2.4	*84.2	両端欠
14	A地点	局部磨製石斧	溶結凝灰岩	12.0	6.6	2.4	229.3	斜刃・側辺に敲打痕
15	A地点	乳棒状石斧未製品	溶結凝灰岩	12.0	6.0	3.0	282.5	
16	A地点	乳棒状石斧未製品	凝灰質岩	*15.4	7.5	4.4	*650.0	
17	A地点	乳棒状石斧未製品	溶結凝灰岩	*14.0	5.7	4.4	*355.5	
18	A地点	乳棒状石斧未製品	溶結凝灰岩	*11.6	7.2	3.6	*324.8	
19	A地点	乳棒状石斧未製品	溶結凝灰岩	*14.8	7.0	4.3	*443.9	
20	A地点	礫器	砂岩	13.5	10.9	4.8	790.0	両刃
21	A地点	双角状礫器	溶結凝灰岩	7.5	11.8	3.6	351.2	
第28図22	A地点	敲石	不明	8.1	8.5	4.8	505.9	全周に敲打痕
23	A地点	石錘	砂岩	8.9	6.6	1.9	162.4	
24	A地点	石錘	砂岩	9.8	9.5	3.0	438.2	
25	A地点	石錘	溶岩	8.0	7.3	2.9	200.1	
26	A地点	敲石	溶結凝灰岩	11.9	4.3	3.9	303.3	
27	A地点	大形剝片	不明	9.9	8.3	3.3	356.1	
第29図28	C地点	石鏃	黒灰色黒曜石	*1.9	2.2	0.4	*1.5	半裁
29	B地点	削器	漆黒色黒曜石	3.4	1.9	0.7	4.6	被熱
30	B地点	つまみ形石器	漆黒色黒曜石	3.2	3.0	0.4	4.9	基部調整あり
31	B地点	つまみ形石器	漆黒色黒曜石	3.3	3.7	0.6	8.0	基部調整あり
32	B地点	不明石器	漆黒色黒曜石	3.0	3.1	1.0	8.8	
33	B地点	使用痕のある剝片	漆黒色黒曜石	3.9	1.2	0.3	1.9	透明感あり
34	B地点	使用痕のある剝片	漆黒色黒曜石	4.6	2.1	0.6	5.6	打点部欠・自然面
35	B地点	使用痕のある剝片	漆黒色黒曜石	5.2	1.9	0.5	3.8	自然面あり・鈴桶型
第30図36	B地点	磨製石斧	蛇紋岩	*4.8	6.5	1.6	*75.5	両端欠・被熱
37	B地点	磨製石斧	蛇紋岩	*6.4	*5.6	*2.5	*120.3	両端欠・被熱
38	B地点	乳棒状石斧	溶結凝灰岩	*9.7	5.6	3.5	*243.2	刃部欠
39	B地点	乳棒状石斧未製品	凝灰質岩	*10.3	7.9	3.9	*493.0	
40	B地点	乳棒状石斧未製品	溶結凝灰岩	*13.5	8.3	3.7	*434.4	刃部磨製
41	B地点	石錘	溶結凝灰岩	7.7	9.8	3.2	303.2	
42	B地点	石錘	砂岩	10.2	7.6	2.1	218.1	
43	B地点	凹石	砂岩	9.5	7.4	3.6	339.2	全周に敲打痕
44	B地点	敲石	溶結凝灰岩	16.8	6.0	4.5	650.0	
45	B地点	敲石	溶結凝灰岩	14.7	3.9	4.7	492.1	
第31図46	B地点	石皿	結晶片岩	20.7	24.3	4.3	3470.0	
47	B地点	大形剝片	アルコース砂岩	9.1	10.3	2.9	369.5	
48	B地点	十字形石器？	砂岩	13.7	13.8	4.3	650.0	
第32図49	表採	石鏃	黒灰色黒曜石	*3.0	1.7	0.4	*1.3	先端欠
50	表採	石鏃	黒灰色黒曜石	4.0	3.0	0.7	5.6	鋸歯状
51	表採	使用痕のある剝片	漆黒色黒曜石	5.5	1.7	0.8	6.6	厚手
第33図52	表採	乳棒状石斧未製品	溶結凝灰岩	*11.0	5.6	4.1	*284.2	
53	表採	乳棒状石斧素材	溶結凝灰岩	21.6	9.2	4.6	1310.0	
54	表採	石ノミ	ホルンフェルス	9.2	3.4	1.8	72.3	刃部研磨
55	表採	尖頭状礫器	溶結凝灰岩	9.5	14.2	6.7	630.0	

3．骨角器

【ヤス】第34図

長さ4.5cmを測る小形のヤスである。先端部は鋭く尖るものの基部は丸みを帯びる。シカの骨を用いたものと思われる。

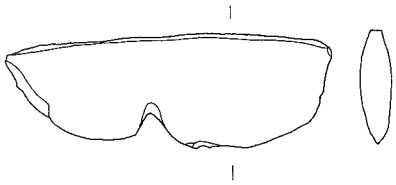


第34図　骨角器（s＝2/3）

4．装身具

【石製装身具（玦状耳飾り）】第35図

蛇紋岩を素材とすると思われるが風化しているために確実ではない。石庖丁形を呈する樋口清之分類のF型の範疇に入るものと思われる。横長で，上部が直線的になり，抉りは逆V字形で浅く中央よりやや左側に施される。左右非対称であり，破損したものを再加工している段階の資料とも考えられる。本県での出土例はきわめて稀で，五島列島北部小値賀町野首遺跡に2点類例がある（註1）。



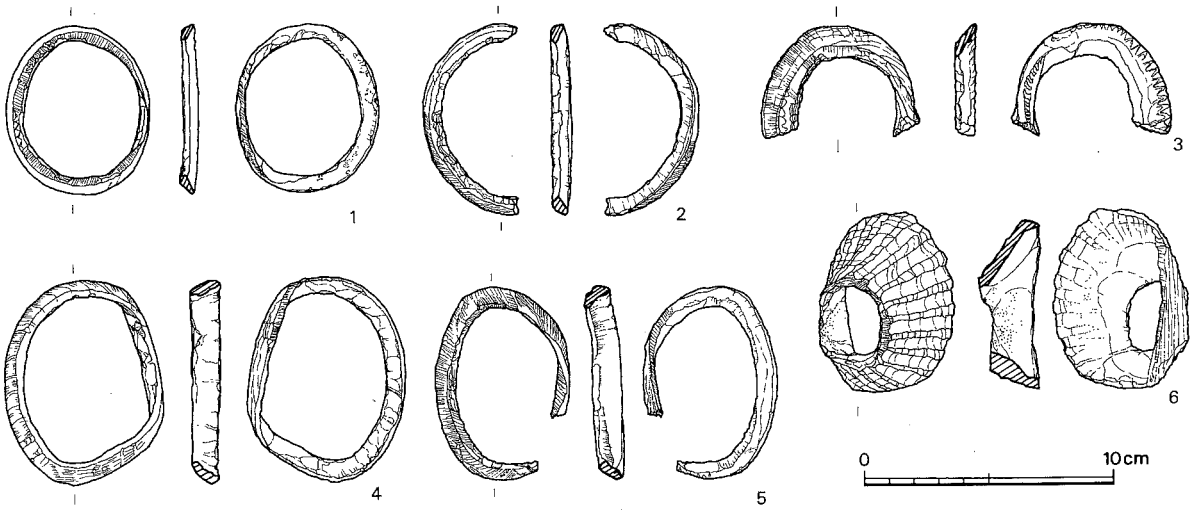
第35図　石製装身具（s＝2/3）

【貝輪】第36図

貝輪は破片も含めて25点出土したが，そのうち保存状態の良好な6点を図示した。**1**～**3**はベンケイガイを素材とする。**4**・**5**はサルボウガイ。**6**はハイガイ製で，穿孔部の径が小さいことから未製品と思われるが殻頂側には研磨した痕跡がみられる。そのほか図示しなかったが，ウミギクガイ製のものもあった。**1**～**5**の貝輪は，外側表面には丁寧な研磨が施されるが，内側周縁部の研磨はほとんどみられない。貝輪は，いずれも貝層もしくは撹乱からの出土で，埋葬に伴うものはみられない。既調査分37点を加えて62点という数字は，県内では対馬佐賀貝塚の133点に次ぐものである。

サルボウガイは内湾の砂泥性の海浜に棲息する貝類で，本遺跡の周辺にその産地を求めることは困難であるとの指摘を受けた。今回の調査で確認した点数は破片を含めて，ベンケイガイ13点，サルボウガイ11点であった。前回調査ではサルボウガイが多いとされているが，両者はほぼ拮抗するらしい。

註1　小値賀町教育委員会の塚原博氏に御教示を受けた。また同氏によればこの種の玦状耳飾りは山陰地方の隠岐島と島根県および鳥取県の海岸部に出土するものに類似しており，きわめて限定されるものであるらしい。



第36図　貝輪（s＝1/2）

5．自然遺物

宮下貝塚出土の動物遺存体

宮路淳子（京都大学大学院人間・環境学研究科）

1　はじめに

今回報告する動物遺存体は，町道の道路改良工事にともなって行われた緊急調査で出土したものである。出土した動物遺存体は，哺乳類・魚類・鳥類・爬虫類で，時期は縄文時代後期前葉から中葉にわたる。発掘地点はA～Cの3トレンチで，昭和40年発掘区の東側に接する(註1)。同定できた資料は725点であり，出土種別にみると哺乳類が611点で全体の84％と大多数を占め，魚類が93点，鳥類19点，爬虫類1点がこれに続く。今回の遺物は，発掘時に目についたものだけを取りあげた資料であり，資料選別にふるいなどは用いられていない。

以下に，動物種別の概要を述べる。

2　出土した動物種

a魚類　同定できたのは，ブダイ科，ベラ科，サメ科，ハタ科，マダイ，ヘダイ，ハリセンボン，イシダイ科，ウツボの9種類，93点で，動物遺存体全出土点数のうち12％であった（表6）。

ブダイ科　この科の魚は前上顎骨・歯骨・咽頭骨が特徴的である。魚類の中では出土点数が最も多かった。上咽頭骨L11，R13，下咽頭骨L2，R4，L/R13，前上顎骨R2，歯骨L6，R2の合計52点が出土した。

ベラ科　この科の魚も咽頭骨が特徴的であり，下咽頭骨が1点出土している。その最大横径は44.0㎜で，それほど大型のものではない。

ハタ科　ハタ科の前上顎L1，R1，歯骨R2，主上顎骨R2が出土している。数は少ないが大型のものも含まれ，大型の前上顎骨長は，全長100㎜に達すると思われる（一部欠損）。

タイ科　マダイ前上顎骨R1，主上顎骨R2，上後頭骨1，ヘダイ歯骨R1が出土している。

サメ科　椎骨を18点検出している。その大部分はネズミザメ科Lamnidaeに特徴的な形態をもつものであって，大型のものは椎体径42.9㎜，同長17.9㎜に達した。しかし，量的に多かった椎体径20.0㎜～30.0㎜位であった。

イシダイ科　イシダイもしくはイシガキダイの前上顎骨L2が出土している。岩礁域での漁撈を特徴づける魚種である。

ハリセンボン　下咽頭骨が1点出土している。

ウツボ科　歯骨1点が出土している。

出土した魚類は，いずれも沿岸から内湾の岩礁域に生息する種類であり，遺物中には不明の大型魚類の椎骨なども含まれるが，基本的に出土魚類の多くは遺跡の東側にひろがる富江湾内で漁獲されたものと考えられる。本貝塚においては，大型魚類を対象とした外海での漁撈は，それほど発達していなかったようである。

b爬虫類　ウミガメ類の大腿骨が1点出土している。かなり大きな個体であり，鋭利な道具で折断された痕跡を残している。ウミガメ類にはウミガメ科とオサガメ科があるが，ウミガメ類として一括した。

c鳥類　鳥類は19点出土している。大腿骨，烏口骨などがあり，量的には，おそらくキジの類（キジ科）が最も多いであろう。ニワトリも出土しているが，後世の混入ではないかと思われる。

d哺乳類　哺乳類は611点出土し，そのうちニホンジカが534点と圧倒的に多い。他にイノシシが50点，タヌキが23点，アシカが2点，ヒトが1点，イルカが1点出土している（表7）。

ニホンジカ　総数534点で，動物遺存体の全出土数の76％にのぼる。出土部位では，下顎骨，上腕

骨，脛骨などが多い。

ニホンジカで特徴的なのは，体格の小さな個体が大半を占めることである。下顎骨を用いて年齢査定（註２）を行ったところ，メスで11～13歳の範囲におさまる可能性が高いという結果がでており，成獣が多いことがわかる。四肢骨の計測値は，脛骨 Bd 平均27.32㎜，上腕骨 BT 平均31.06㎜，基節骨 GL 平均38.48㎜などである(表８)。これらはいずれも，ホンシュウジカの現生標本の10分の９ほどの大きさである。酒詰仲男は，同じ福江島の大浜遺跡（縄文後期～弥生前期）から出土したシカについて，四肢骨が日本列島の他の遺跡から出土する個体に比して小型であることを指摘している（註３)。筆者も，1997年度の大浜遺跡の調査で出土した個体群について分析を行い，同様の結果を得た（註４)。今回，宮下貝塚から出土したニホンジカの計測値は，島嶼部に生息する動物が小型化するとしたこれまでの見解を，縄文時代にまでさかのぼって補強する結果となった。

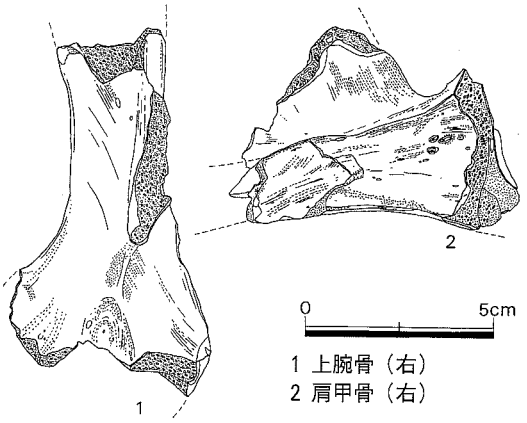
イノシシ　50点が出土している。イノシシが多量に出土した対馬の佐賀貝塚（縄文中・後期）と比較すると，イノシシとシカの割合が全くことなり，比率が逆転しているのが興味深い(註５)。下顎臼歯M３の数は，L3，R1である。永久歯の萌出段階と摩耗具合を調べたところ，出土した顎骨６点では，第３大臼歯が未萌出のものは１点のみであった。また，椎骨や四肢骨についても骨端部の化骨化はほぼ終了しており，成獣が多いことを示している。

タヌキ　９点出土した。同定できた部位は，犬歯，下顎骨，上腕骨，大腿骨などである。

ヒト　第５中足骨（左）が１点出土している

クジラ・イルカ類　椎骨が１点出土している。

鰭脚類　アシカ科（ニホンアシカ）は，肩甲骨１，上腕骨１が出土している（第37図)。

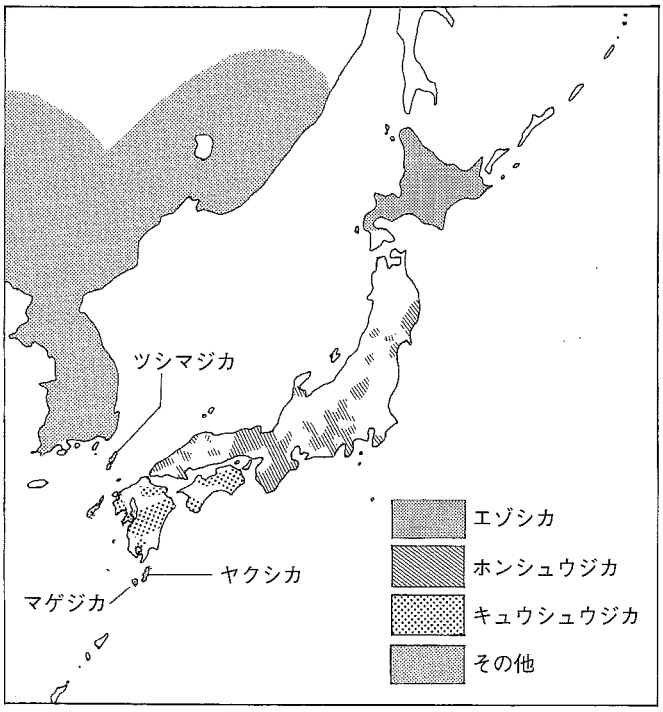


第37図　Ｂトレンチから出土したアシカ

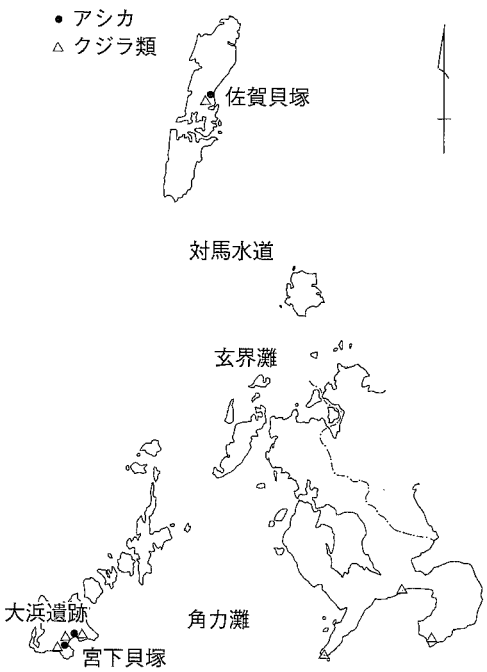
3　考察

本遺跡から出土した動物遺存体は，総数725点である。その内訳は，哺乳類が最も多く，次いで魚類，鳥類，爬虫類が続く。島嶼部の沿岸部に立地する貝塚遺跡でありながら魚類の出土が少ないが，これは遺物取り上げの状況によるものと考えられる。今回の調査では特に，島嶼部に生息するニホンジカの小型化とニホンアシカの利用を確かめたことが成果であるといえる。

前述したように，酒詰仲男は大浜遺跡から出土したニホンジカが小さいことに注目し，島嶼化によってニホンジカが矮小化した可能性を指摘した。現在日本には，６種のニホンジカ亜種が分布しているが(第38図)，今回宮下貝塚から出土したニホンジカの各部位を計測した結果，これらのうちの小型亜種に値が近いことが予想された（註７)。



第38図　ニホンジカの生息地域



第39図　長崎県内から出土した海獣類

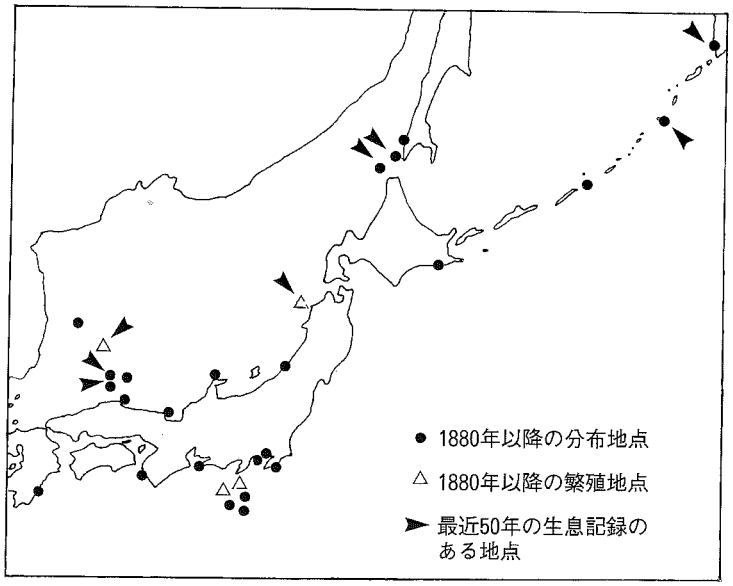
また，対馬の佐賀貝塚（縄文後期）では，ニホンジカがイノシシに比べると出土数が圧倒的に少なく，そのなかに大・小の大きさの異なるタイプの個体が混在している。金子浩昌は大きい方のグループのシカについては，対馬，日本本土以外の場所で生息していた個体が運び込まれた可能性を指摘している(註８)。福江島から出土している縄文時代のニホンジカには，そのような差異は認められなかった。

クジラ類，イルカ類，アシカの出土は，本遺跡の島嶼的な特徴を示している。今回の宮下貝塚の調査では，ニホンアシカの肩甲骨１，上腕骨１が出土した。長崎県内の縄文時代後期の遺跡では，クジラ類，イルカ類，鰭脚類は現在までのところ８遺跡から出土している(第39図)。このことから，五島列島，壱岐，対馬周辺の水域が，これらの海獣類の回遊路にあたっていたことがわかる。アシカはこのうち，対馬の佐賀貝塚，福江島の大浜遺跡，宮下貝塚の３遺跡から出土している。宮下貝塚と同じく富江湾岸に立地する大浜遺跡からは，肩甲骨，上腕骨，橈骨，尺骨などが出土し，対馬の佐賀貝塚からは，下顎骨，橈骨，尺骨，大腿骨，肩甲骨，寛骨が出土している。

カリフォルニアアシカ属（Zalophus）の動物は，現在は北アメリカの太平洋岸とガラパゴス諸島に生息しているが，かつては日本にも生息していた。現在，日本の沿岸にニホンアシカの姿はみられず，環境庁はこれを絶滅種としている(1991年)。ニホンアシカは，日本産鰭脚類８種のなかでもっとも南に分布していた種で，本州沿岸で繁殖していた唯一の鰭脚類である。かつては亜寒帯の千島・サハリン（樺太）から亜熱帯の伊豆諸島にかけて広く分布しており，1880年代以降の分布地点が29カ所明らかにされている(第40図)。それによると，北限はカムチャッカ半島南端，南限は宮崎市であり，繁殖地も４カ所知られている。

18世紀末までさかのぼると，長崎や福岡，鬱陵島，朝鮮半島北部にも生息していたという（註９）。島根県竹島では，1956年までアシカ猟が行われていた。その捕獲数から，明治維新頃の生息数は３万～５万頭以上であったと推測されているが，これらの生息地の多くでは，19世紀末あるいは20世紀初頭に絶滅した。その原因は，明治新政府が駆除や乱獲を放置し，繁殖期（４～７月）に性別・年齢を問わず捕獲されたためとされている。

縄文時代では，約70の貝塚からアシカ・トドなどの海獣類が出土している（註10）。ニホンアシカは当時の日本列島沿岸諸地域に広く生息していたと考えられる。対馬や五島列島周辺の海域もまた，ニホンアシカの生息域であったと考えられ，食料資源と



第40図　ニホンアシカの生息地域

してだけではなく，油や衣服などの原料としても縄文人に利用されていたことが推測できる。

しかし宮下貝塚からは，海獣類や大型魚類を対象とした銛頭や釣針などの漁撈具がそれほど多く出土していない。同時期に形成された対馬の佐賀貝塚からは，海獣類，大型魚類の遺存体とともに骨角製の釣針や銛頭などが多数出土しており，大型回遊海獣類・魚類を捕獲する漁撈文化が盛んであったことを示している(註11)。本貝塚の縄文人は，そのような対馬暖流の影響する外洋に適応する漁撈形態とはまた違った，沿岸漁撈文化を発達させていたと考えられる。

今回出土した動物遺存体は，五島列島および島嶼部における縄文時代の生業活動を復元していくうえで，貴重な資料であるといえる。

【参考文献】

伊沢紘生・粕谷俊雄・川道武男編1996『日本動物大百科２』平凡社。

伊藤徹魯1996「ニホンアシカは絶滅したか」『日本動物大百科２』平凡社。

大泰司紀之1980「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学第13号』日本文化財科学会　pp.51-74。

大泰司紀之1983「シカ」『縄文文化の研究第２巻』雄山閣　pp.122-135。

賀川光夫1971『長崎県文化財調査報告書第９集　宮下遺跡調査報告解説編』長崎県教育委員会。

金子浩昌1989「佐賀貝塚出土の脊椎動物遺存体」『佐賀貝塚』長崎県峰町教育委員会　pp.243-248。

酒詰仲男1964「大浜遺跡」『昭和37年度・昭和38年度長崎県五島列島遺跡調査報告』長崎県教育委員会　pp.1-19。

正林　護編1989『佐賀貝塚　峰町文化財調査報告書第９集』長崎県峰町教育委員会。

正林　護1996「佐賀貝塚」『原始・古代の長崎県　資料編Ⅰ』長崎県教育委員会　pp.122-130。

寺田正剛1995「永瀬貝塚」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅲ』長崎県教育委員会　pp.1-21。

賀川光夫・内藤芳篤1968『長崎県文化財調査報告書第７集　宮下遺跡調査報告図録編』長崎県教育委員会。

長崎県教育委員会編1998『長崎県文化財調査報告書第141集　大浜遺跡』長崎県教育委員会。

宮路淳子1998「大浜遺跡の動物遺存体」『長崎県文化財調査報告書第141集　大浜遺跡』長崎県教育委員会。

渡辺　誠1998「諫早市有喜貝塚の動物遺体」『有喜貝塚－動物遺存体－』諫早市教育委員会　pp.1-18。

【註】

註１　宮下貝塚は昭和39年に，地元の郷土史家田中榮次氏によって発見された。その後昭和40年に長崎県教育委員会・富江町教育委員会・長崎大学・別府大学によって共同で発掘調査が行われ，多数の土器・石器類の他に動物遺存体が出土している。

註２　大泰司1980　註３　酒詰1964　註４　宮路1998　註５　正林1989　註６大泰司1983

註７　四国，九州，五島列島に分布するキュウシュウジカ Celvus nippon nippon は，ホンシュウジカよりもひとまわり小型である。ホンシュウジカが頭骨最大長平均28㎜，角の長さ平均500㎜，体高は平均846㎜であるのに対して，キュウシュウジカは頭骨最大長平均26㎜，角の長さ平均350㎜，体高は平均804㎜である（大泰司1983)。ヤクシカ Celvus nippon yakushimae は屋久島に分布し，キュウシュウジカよりさらに小さく，角は255～330㎜にすぎない。馬毛島にはヤクシカとキュウシュウジカの中間のマゲジカ Celvus nippon mageshimae を産する。宮下貝塚から出土した角はいずれも250～300㎜の範囲におさまっている。

註８　金子1989　　註９　伊沢ほか1996

註10　松井　章氏の御教示による。

註11　註５に同じ

第5表　宮下貝塚から出土した動物遺存体

脊椎動物門　PHYLUM VERTEBRATA

軟骨魚類綱　CLASS CHONDRICHTHYES

板鰓亜綱　Subclass Elasmobranchii
　ネズミザメの一種　Family Lamnidae

硬骨魚類綱　CLASS OSTEICHTYES
　ハタ科の一種　Family Serranidae
　タイ科　Family Sparidae
　　マダイ　Pagrus major
　　ヘダイ　Sparus sarba
　ベラ科の一種　Family Labridae
　ブダイ科の一種　Family scaridae
　ハリセンボン科　Family Diodontidae
　　ハリセンボン　Diodon holocanthus

爬虫綱　CLASS REPTILIA
カメ目　Order Testudines

鳥類綱　CLASS AVES
　ガンカモ科の一種　Family Anatidae
　キジ科の一種　Family Phasianidae
　雉鶏科　Family Phasianidae
　　ニワトリ　Gallus gallus domesticuus

哺乳綱　CLASS MAMMALIA
　イノシシ科　Family Suidae
　　イノシシ　Sus scrofa
　シカ科　Family Ceruidae
　　シカ　Cervus nippon
　ヒト科　Family Hominidae
　　ヒト　Homo sapiens
　イヌ科　Family Canidae
　　イヌ　Cnis familiaris
　アシカ科　Family Otariidae
　　ニホンアシカ　Zalophus californianus japonicus
　イルカ科　Family Delphinidae

第6表　出土した魚類

	L/R	上咽頭骨	下咽頭骨	前上顎骨	歯　骨	椎　骨	主上顎骨	上後頭骨	遊離歯	計
ブダイ科	L	11	2	2	8					
	R	13	4	1	3					
	L/R		13							
ベラ科			2							
エイ/サメ科						18				
イシダイ科	L			2		1				
マダイ	L									
	R			1			2	1		
ハタ科	L			1						
	R			1	2		1			
ヘダイ	L									
	R				1					
サメ									1	
ハリセンボン			1							
ウツボ	L/R				1				1	
										94

第7表　出土した哺乳類

		頭蓋骨	下顎骨	上顎骨	肩甲骨	上腕骨	尺骨	橈骨	中手骨	大腿骨	脛骨	中足骨	距骨	踵骨	基節骨	中節骨	末節骨	臼歯	椎骨	計
シ　カ	L	16	15		28	4		26	10	7	34	14	11	23				9		
	R		24	1	16	12	2	12	7	5	28	7	13	23				6		
	L/R	7	14			13	6	45	3	4					35	4	2	1	47	
																				534
イノシシ	L		2	1	2	1	14		1						3	2		3		
	R		4		3	1	9		2									1		
	L/R																		1	
																				50
イルカ																			1	1
タヌキ	L			1		1	1			2	3								1	
	R				1	3				2	3									
	L/R	5																		23
																				608

第 8 表　ニホンジカ計測値

部位	R/L	地区名	GL	GLI	GLm	PL	SD	BT	Bp	Bd	BFp	BFd	Dd	成長
頸　骨	R	MIYA-A								27.24			18.48	化骨化
頸　骨	R	MIYA-A								26.23			20.84	化骨化
頸　骨	R	MIYA-A								27.92			19.53	化骨化
頸　骨	R	MIYA-A								32.68			23.35	化骨化
頸　骨	R	MIYA-A								26.18			19.64	化骨化
頸　骨	L	MIYA-B								28.76			21.37	化骨化
頸　骨	L	MIYA-A								32.03			24.72	化骨化
頸　骨	L	MIYA								29.76			21.71	化骨化
頸　骨	L	MIYA-A								29.56			22.1	化骨化
頸　骨	L	MIYA-A								29.88			21.54	化骨化
頸　骨	L	MIYA								28.12			20.17	化骨化
頸　骨	L	MIYA-A								30.23			23.08	化骨化
頸　骨	L	MIYA-A								26.98			20.69	化骨化
頸　骨	L	MIYA-A								30.24			22.95	化骨化
頸　骨	L	MIYA-A								31.95			23.3	化骨化
頸　骨	L	MIYA-A								24.94			20.8	化骨化
頸　骨	L	MIYA-B								29.97			20.16	化骨化
大腿骨	L	MIYA-B						30.45		30.67				化骨化
大腿骨	L	MIYA-B						31.69		33.63				化骨化
大腿骨	L	MIYA-A						27.76		30.42				化骨化
大腿骨	L	MIYA						29.78		31.53				化骨化
大腿骨	R	MIYA						31.92		35.19				化骨化
大腿骨	R	MIYA-A					15.27	34.75		36.48				化骨化
大腿骨	L	MIYA					15.78							化骨化
橈　骨	R	MIYA-A	145.1			140.2	15.36		28.17	25.02	27.07	23.55		化骨化
距　骨	L	MIYA-A		31.75	35.05									
距　骨	L	MIYA-A		30.71	33.75									
距　骨	L	MIYA-B		30.76	33.72									
距　骨	L	MIYA-B		32.24	34.98									
距　骨	L	MIYA-A		29.12	31.75									
距　骨	L	MIYA-B		31.3	33.41									
距　骨	R	MIYA-B		29.17	32.25									
距　骨	R	MIYA-A		30.83	33.58									
距　骨	R	MIYA-A		29.7	32.13									
距　骨	R	MIYA-A		33.82	35.73									
距　骨	R	MIYA-A		32.82	35.61									
距　骨	R	MIYA-B		30.68	33.3									
距　骨	R	MIYA-A		29.55	31.68									
距　骨	R	MIYA-A		33.72	36.76									
距　骨	R	MIYA-A		31.77										
距　骨	R	MIYA-A		28.87	31.53									
距　骨	R	MIYA		31.12	33.22									
距　骨	R	MIYA-A		29.53	32.25									
距　骨	R	MIYA-B		31.24	33.7									
距　骨	R	MIYA-A		30.5	32.96									
距　骨	R	MIYA		31	34.45									
距　骨	R	MIYA-B		32.49	34.97									
距　骨	R	MIYA-A		33.66	36.85									
基節骨	R	MIYA-A	38.53				10.49		13.58	11.27				
基節骨	R	MIYA-B	35.91				8.92		12.31	10.62				
基節骨	R	MIYA-A	37.46				9.29		12.59	11.17				
基節骨	R	MIYA-A	34.59				9.04		12.05	10.76				
基節骨	R	MIYA-B	40.12				11.32		14.21	12.03				
基節骨	R	MIYA-B	40.86				10.18		13.98	12				
基節骨	R	MIYA-B	38.12				9.58		12.5	10.92				
基節骨	R	MIYA-A	37.47				9.57		12.85	10.85				
基節骨	R	MIYA-A	36.04				9.85		13.51	11.27				
基節骨	R	MIYA-B	38.32				10.08		13.04	11.04				
基節骨	R	MIYA-A	36.83				9.28		13.15	10.71				
基節骨	L	MIYA-C	38.73				9.04		11.9	9.49				
基節骨	L	MIYA-A	40.78				9.73		12.69	11.3				
基節骨	L	MIYA-B	38.82				9.95		13.46	11.57				
基節骨	L	MIYA-C	40.4				10.06		13.75	11.6				
基節骨	L	MIYA-B	39.45				10.14		3.63	11.74				
基節骨	L	MIYA-C	40.79				9.84		13.73	11.42				
基節骨	L	MIYA	38.29				10.44		13.2	11.23				
基節骨	L	MIYA-A	36.45				9.48		12.54	9.76				
基節骨	L	MIYA-B	38.62				10.37		13.34	11.69				
基節骨	L	MIYA-A	38.75				9.1		12.47	12.3				
基節骨	L	MIYA-A	39.79				11.38		14.37	12.25				
基節骨	L	MIYA-B	40				10.42		14.25	12.1				
中節骨	L	MIYA-A	36.88				9.25		12.63	10.76				

(2) 貝類

宮下貝塚は発見のそもそもの発端から分厚い貝層をもつ貝塚として知られていた。今回の調査区はその貝層をほぼ東西に縦断するもので，貝塚のほぼ中央部に当たるものと思われる。撹乱が激しいために原位置にある貝層の抽出に苦労したが，40×40×30㎜のブロックサンプルを抽出することができ，分析の対象とした。資料は種ごとに個体数を数え，合計6,872個体であった。その結果巻貝類の腹足綱が13種類，二枚貝の斧足綱が２種類の合計15種類がリストされた。

貝類のほとんどは生態群集型でいえば潮間帯の岩礁や岩礫に棲息する貝類でⅠ型にあたり，6,798個を数え，百分率では実に98.9％を占める。スガイが86％を越え，クマノコガイ・コシダカガンガラ・イシダタミ・オオコシダカガンガラなどのりゅうてん科とにしきうず科の潮間帯岩礁性の巻貝類が圧倒的多数を占める。これに対し，アサリなどの潮間帯の砂浜に棲む貝類（Ⅱ・Ⅲ型）の絶対量が圧倒的に少ないことが注目される。こうした傾向はブロックサンプル地点以外でも同様な傾向にあり，スガイが選択的に採集されていたことが推測される。

またブロック抽出標本には含まれなかったものの，標本として採集した貝として次のようなものがある。腹足綱に属するみみがい科のメカイアワビ，てんぐにし科のテングニシおよび斧足綱に属するいたやがい科のイタヤガイ・ナデシコガイ・ヒオウギガイ，うみぎくがい科のウミギクガイがあった。

こうした貝種の構成は宮下貝塚を取り巻く環境を雄弁に物語るものである。現在遺跡の左手には砂礫混じりの海岸が，右手には溶岩による岩礁地帯が広がる。砂浜海岸は部分的で，しかも砂礫混じりでハマグリの棲息には適するものの，砂泥を好むアサリの棲息には適していないらしい。岩礁地帯に多産するにしきうず科とりゅうてん科のスガイ・クマノコガイなどの小形巻貝類が圧倒的な比率を占めることは，この種の貝類の採集が日常的に行われていたことを物語り特にスガイは潮汐に関係なく採集可能な貝であり，宮下貝塚の基本的な食料の一つであり，この種の巻貝の採集には季節性を考える要がなかったものと思われる。またブロックサンプルには含まれなかった量的に少ない貝類の多くは春秋の大潮時に採集されたものと思われる。

昭和40年の調査報告書によると貝層の貝類は，コシダカガンガラとトコブシなどが多かったと報告されているが誤認であろう。今回のブロックサンプルの結果や貝層の状況からみてスガイが大部分を占めることは確実である。トコブシにいたってはほとんどその姿を見ることはできずわずかに１点検出したにすぎない。

第９表　貝類組成表

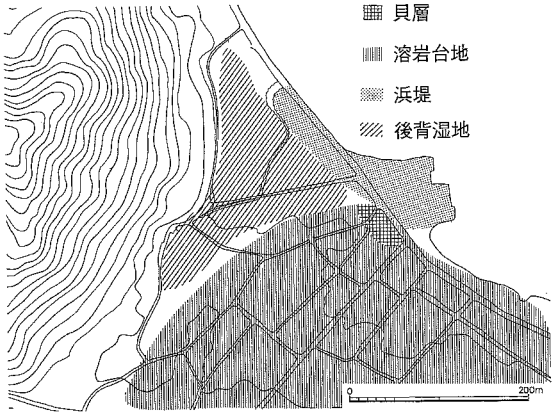
番号	綱　名	科　名	種　名	個体数	百分率	群集型
1	腹足綱	みみがい科	マダカアワビ	7	0.10	Ⅰ
2	（巻貝類）		トコブシ	4	0.05	Ⅰ
3		つたのは科	マツバガイ	2	0.03	Ⅰ
4		にしきうず科	クマノコガイ	418	6.00	Ⅰ
5			イシダタミ	67	0.96	Ⅰ
6			コシダカガンガラ	190	2.73	Ⅰ
7			クボガイ	3	0.04	Ⅰ
8			ヘソアキクボガイ	5	0.07	Ⅰ
9			オオコシダカガンガラ	39	0.56	Ⅰ
10			バテイラ	38	0.55	Ⅰ
11		りゅうてん科	サザエ	14	0.20	Ⅰ
12			スガイ	5946	85.37	Ⅰ
13		うみにな科	ウミニナ	74	1.06	Ⅲ
14		すいしょうがい科	マガキガイ	1	0.01	Ⅰ
15		たまがい科	ツメタガイ	1	0.01	Ⅱ
16		ふじつがい科	サツマボラ	1	0.01	Ⅱ
17		あっきがい科	イボニシ	13	0.19	Ⅰ
18			レイシ	86	1.23	Ⅰ
19		えぞばい科	バイ（シマバイ）	4	0.05	Ⅱ
20	斧足綱	いたぼがき科	マガキ	2	0.03	Ⅰ
21	（二枚貝類）		イワガキ	6	0.09	Ⅰ
22		ざるがい科	ナガザルガイ	1	0.01	Ⅰ
23		まるすだれがい科	ハマグリ	28	0.40	Ⅲ
24			チョウセンハマグリ	10	0.14	Ⅲ
25			ヌノメアサリ	1	0.01	Ⅲ
26			オキシジミ	3	0.04	Ⅲ
27			シオフキ	1	0.01	Ⅲ

第Ⅳ章　ま　と　め

第１節　宮下貝塚をめぐるいくつかの問題

１．宮下貝塚とその周辺の環境

宮下貝塚の周辺地形の情報は平成３年の重要遺跡範囲確認調査および平成８年の個人病院建設に伴う範囲確認調査によるところが大きい。貝塚自体は今回の調査地点を中心とする長径60m×短径30mの範囲に広がることが予想されるとともに，遺跡の北側田ノ江方面へ伸びる浜堤が存在することがほぼ確実になった。浜堤は遺跡の前面に突き出た岩礁（只刈山起源の溶岩）を起点とするものと思われ，今回の調査においても国道側で一部検出した。浜堤の背後は後背湿地となり，現在は狭小な沖積地が形成され谷底平野となっている。半島を形成する溶岩は粘性が高く，只刈山を中心に円を描くように流出して，標高50m以下の低平な溶岩台地を形成している。遺跡の所在する地点は只刈山の北側にあたり，その北に展開する五島層群と近接する。遺跡は標高５m前後の溶岩台地の傾斜の緩やかな部分を利用しており，平均傾斜は５％程度である。それほど土層の形成は進んでおらず，１m前後掘り下げると地山の溶岩に達する。標高の高い部分では，風化土層が流出し溶岩が露出している地点も多い。



第41図　周辺地形図

２．遺物分布の問題

調査は道路部分を便宜的に二分し，標高の高い方をＡ地点，低い方をＢ地点とした。その後ブロック塀の内側にも調査区を広げたためにそこをＣ地点とした。水道管工事による撹乱および昭和40年調査などによって原位置を保っている部分が帯状にしかも狭長に残っているのみであったため，遺物の取り上げは「原位置」のものはドットをとり，それ以外はそれぞれの地点ごとに一括して取りあげた。

宮下貝塚の今回の調査で，縄文時代前期の轟Ｂ式土器から後期後葉段階の三万田式土器まで都合16形式の土器を抽出することができた。ここで分析の対象としたのは土器形式の明らかな口縁部破片および有文部破片である。そのおよその基準は次のとおりである。

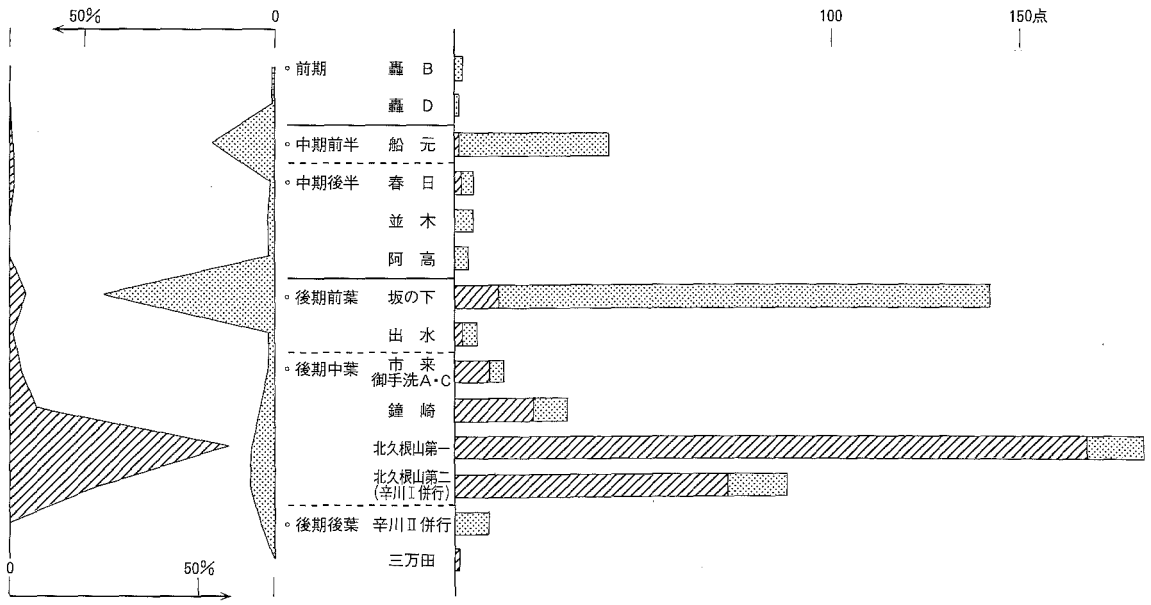
ａ．破片の大きさはおよその目安として佐世保市下本山岩陰の報告書で使われている基準に準拠しP_2（４平方cm）以上とした。

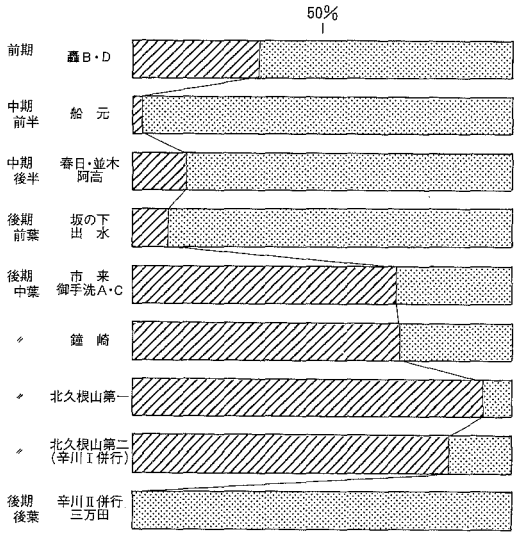
ｂ．接合した土器については，接合する以前の状態で数えた。

ｃ．「原位置」にある土器も数えた。

ｄ．Ａ地点は総計290点，Ｂ＋Ｃ地点は240点の土器を検討の対象とした。

まず①は各地点ごとの出現頻度グラフである。Ａ地点290点，Ｂ＋Ｃ地点240点に対するそれぞれの出現頻度の割合を示している。Ａ地点では前期から後期前葉の出水式土器段階までは，坂の下段階で小さいピークがあるもののわずかな出土量であり，この時期にはこの地点の利用がほとんどなかったものと思われる。後期中葉の市来式・御手洗Ａ・Ｃ式段階で増加に転じ，北久根山第一式段階で最大の時期を迎えた後，次の北久根山第二式段階では量的に減少し始め，後期後半段階の西平式では出現をみなくなる。Ｂ＋Ｃ地点では中期前半の船元式土器段階に一つのピークを迎え，その後春日・並木・阿高段階では減少した後，後期前葉の坂の下式土器で頂点に達する。その後北久根山第一段階ではＡ地点とは反対にその出現は急速に減少する。





第42図　宮下貝塚出土土器分析グラフ

時期	土器型式	A地点		B地点		C地点		B＋C		合計
前期	轟B	1	50.00	1	50.00	0	0.00	1	50.00	2
		0.34	0.19	0.53	0.19	0.00	0.00	0.42	0.19	
	轟D	0	0.00	1	100.0	0	0.00	1	100.0	1
		0.00	0.00	0.53	0.19	0.00	0.00	0.42	0.19	
中期前半	船元	1	2.44	28	68.29	12	29.27	40	97.56	41
		0.34	0.19	14.97	5.28	22.64	2.26	16.67	7.55	
中期後半	春日	2	40.00	3	60.00	0	0.00	3	60.00	5
		0.69	0.38	1.60	0.57	0.00	0.00	1.25	0.57	
	並木	0	0.00	3	60.00	2	40.00	5	100.0	5
		0.00	0.00	1.60	0.57	3.77	0.38	2.08	0.94	
	阿高	0	0.00	4	100.0	0	0.00	4	100.0	4
		0.00	0.00	2.14	0.75	0.00	0.00	1.67	0.75	
後期前葉	坂の下	12	8.45	99	69.72	31	21.83	130	91.55	142
		4.14	2.26	52.94	18.68	58.49	5.85	54.17	24.53	
	出水	2	33.33	1	16.67	3	50.00	4	66.67	6
		0.69	0.38	0.53	0.19	5.66	0.57	1.67	0.75	
後期中葉	市来	9	69.23	2	15.38	2	15.38	4	30.77	13
	御手洗A・C	3.10	1.70	1.07	0.38	3.77	0.38	1.67	0.75	
	鐘崎	21	70.00	8	26.67	1	3.33	9	30.00	30
		7.24	3.96	4.28	1.51	1.89	0.19	3.75	1.70	
	北久根山第一	168	91.80	15	8.20	0	0.00	15	8.20	183
		57.93	31.70	8.02	2.83	0.00	0.00	6.25	2.83	
	北久根山第二	73	82.95	15	17.05	0	0.00	15	17.05	88
	(辛川Ⅰ併行)	25.17	13.77	8.02	2.83	0.00	0.00	6.25	2.83	
後期後葉	辛川Ⅱ併行	0	0.00	7	77.78	2	22.22	9	100.0	9
		0.00	0.00	3.74	1.32	3.77	0.38	3.75	1.70	
	三万田	1	100.0	0	0.00	0	0.00	0	0.00	1
		0.34	0.19	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
	合計	290	54.72	187	35.28	53	10.00	240	45.28	530

第10表　宮下貝塚土器統計表

こうした遺物分布域の移動をどう理解すればいいのだろうか。そのための前提として次のことを指摘しておく。C地点は宅地の庭にあたり道路工事や水道管工事の影響を受けていない。この地点からは後期中葉の土器の出土はわずかであり，この傾向はB地点においても同様である。このことから判断してB＋C地点における工事等による土層の削平はあまりないものと思われる。

こうした土器の偏在について，この項では「縄文後期再海進」（安田1997）いわゆる縄文後期海進にその答えを求めてみたい。「縄文後期再海進」は「縄文中期の小海退」と「弥生の小海退」の間の温暖な時期で，わずかながら海水面の上昇がみられるという(註1)。宮下貝塚では標高の低いところ（B・C地点）から高い方（A地点）へ遺物分布が移動しており，この「縄文後期再海進」と符合する現象として考えられる。それは，後期中葉の市式来，御手洗A・C式土器段階に始まり，次の鐘崎式土器段階では主体はA地点に完全に移り，北久根山第一式・同第二式段階ではA地点で安定した出土状態となる。傍証として遺跡の前面の国道付近から田ノ江方向へ伸びる浜堤があげられよう。後期海進によって形成されたとみられており，この時期に海面上昇が起こり，標高の低いB・C地点の利用が困難になりA地点へと移らざるを得なかったものであろうか。

しかしB・C地点が海面下に下がり潮汐に洗われた痕跡は認められず，また貝層は標高を下げるにつれて薄くなりながらも存在し，人骨の埋葬や石斧の集積などの遺構も構築されており全くの空白となるわけではない。祭祀的ないし呪術的な空間利用も想定でき，後期海進以外の要因も当然考えられるところである。

3．宮下貝塚の盛衰

②のグラフからは宮下貝塚の盛衰を読みとることができよう。

宮下貝塚に最初の足跡が記されるのは縄文時代前期の轟B段階であるが，前期はかろうじてその存在が確認できる程度である。中期前半には瀬戸内系の船元式土器が到来してこの地を席巻してしまい主体を占めることになる。その後中期後半には春日・並木・阿高の一群が登場するもののいずれも微量にすぎず，痕跡を残したといった程度であった。ところが後期に入ると宮下貝塚は一転した繁栄を極めることになる。坂の下段階では遺物量が前代に比べて段違いに増加する。安定した定住生活が営まれたことが考えられ，3層の混土貝層が形成され，土器の集積遺構や表採品ではあるがイノシシ形土製品（註2）も出土するなど呪術的な要素も出現し，装備される。

次の出水段階では遺跡利用は急減し，後期中葉の市来・御手洗A・御手洗C段階で微増に転じ，鐘崎段階を経て，北久根山第一段階で宮下貝塚はその活動の頂点を迎える。北久根山第一と次の第二段階の時期には，層厚50cmを越える分厚い貝層が形成され，イルカ・アシカといった大形海棲獣やシカ・イノシシやサメ・マダイなどの魚骨など大量に検出されている。そうしたものの捕獲に使用された石器や骨角器をはじめ，貝層中から出土した土器の個体数も膨大である。また貝輪や玉類，玦状耳飾りや土器の器形のバリエーションの豊富になり，石斧の集積や人骨の埋葬などもみられる。

こうしたことからこの時期の富江湾周辺の基地的な存在として機能したことが推測される。

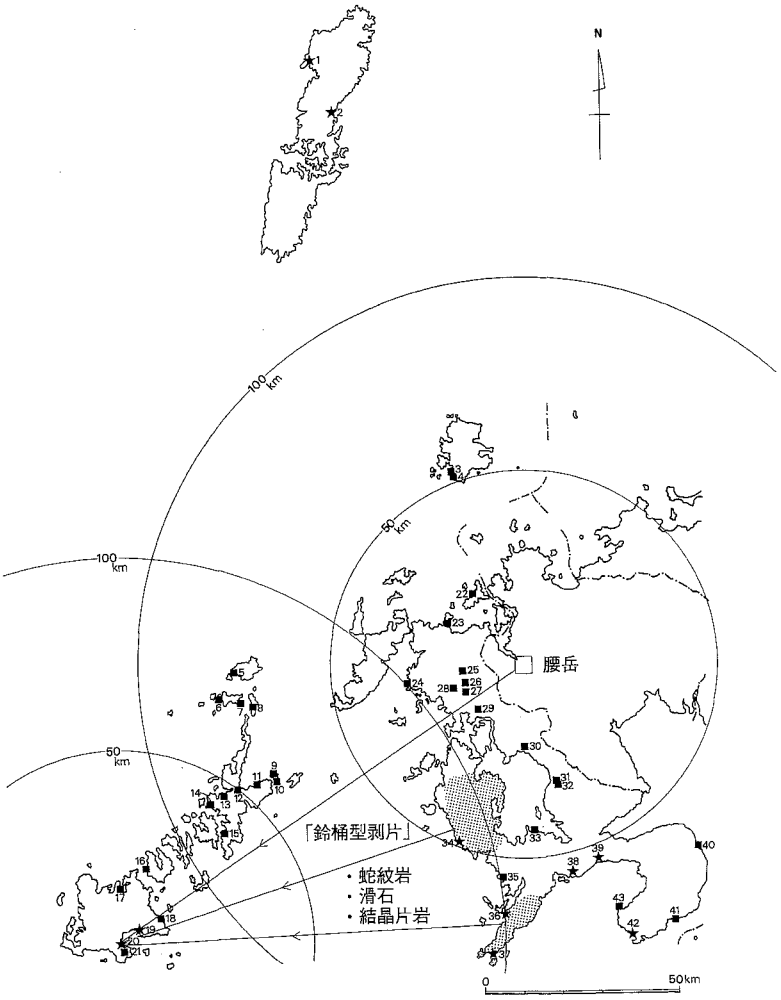
繁栄を極めた宮下貝塚も後期後葉になると遺物の量は急減してしまい，晩期にはまったく姿を消してしまう。

4．縄文時代後期中葉段階の遺跡分布

長崎県内における該期の遺跡分布図は，殿崎遺跡の報文において高野晋司が作成しており（高野1986），27遺跡があげられている。

今回は43遺跡を集成しており，約1.6倍の増加である。

対馬では東岸と西岸に拠点的な遺跡がある。なかでも東岸の峰町佐賀貝塚は，1985年に調査された遺跡で，夥しい石斧や「鈴桶型剝片」，大形剝片鏃，ヤスなどの刺突具



第43図　縄文後期中葉段階遺跡分布図

を中心とする骨角器，豊富な貝輪などが出土した。あたかも工房址と見まごう状態である。またキバノロ製垂飾品やサルアワビ・ユキノカサ製貝輪など遠隔地からの搬入が想定される遺物の出土も多い。

壱岐ではこの時期の発掘調査例はほとんどない。佐世保以北の県北地方の遺跡分布は大きく二つに分けられる。鷹島町三代遺跡・松浦市池田遺跡・小佐々町古田遺跡は海岸から指呼の距離にあり，標高も低い。三代遺跡・池田遺跡は調査面積が狭小のためにあまり多くを論じることはできないが，五島列島の遺跡と同じ様な立地であり拠点的な遺跡と位置づけることもできよう。それに対し佐世保市内の下本山岩陰を除く洞穴遺跡と世知原町の岩谷口岩陰は，海岸からの距離が大きく，標高も高い。いずれの遺跡においても該期の土器はわずかに数点で，特徴的な文様の故に検出されたという程度であり，到底拠点的な遺跡として位置づけることはできないものと思われる。

大村湾岸では伊木力遺跡をはじめ4遺跡がある。伊木力遺跡は前期を主体とする遺跡であるが，後期にも見るべきものがある。初出の鹿角製の組合せ銛頭や超大型石錘，丸木船と思われる大形の板材など大村湾を舞台とした漁撈活動の一端を垣間見ることが可能である。

外海（そとめ）とよばれ，対馬暖流が洗う西彼杵半島西岸から長崎半島にはこの時期の遺跡が点在する。この地域の海岸線は岩礁と浜堤が交互に出現する場合が多く，後期に遺跡は縄文前期海進によって形成された浜堤に営まれる場合が多い。外海町出津遺跡，長崎市手熊貝塚・深堀遺跡，野母崎町脇岬遺跡などが代表的な拠点遺跡である。貝塚を形成する場合が多く，骨角器や獣骨はいうに及ばず埋葬人骨など多彩な情報を提供している（註3）。

第11表　縄文後期中葉遺跡地名表

長崎県縄文時代後期中葉段階遺跡地名表			標高(m)	海岸からの距離(km)	調査の履歴	土器		石器				骨角器				海獣類		陸獣		魚類		
番	遺跡名	所在地				鐙崎	北久根山	石鏃	大剣片鏃	打製石鏃	剣片鏃	ヤス	単式釣針	結合釣針	T字釣針	離頭銛	クジラ	イルカ	アシカ	シカ	イノシシ	サメ	マグロ	マダイ
1	志多留貝塚	上県町	3	0.01	◎	○	○	○	−	○	−	○	−	○	○	○	○	○	○	○	○	○	−	○
2	佐賀貝塚	峰町	4	0.1	◎	○	○	○	○	○	○	○	−	○	○	○	○	○	○	○	○	○	−	○
3	鎌崎遺跡	郷ノ浦町	2	0.01	△	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
4	名切遺跡	郷ノ浦町	2	0.01	○	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
5	宮ノ首遺跡	宇久町	4	0.01	○	−	○	○	−	○	−	／	／	／	／	／	○	／	／	／	／	／	／	／
6	矢熊遺跡	小値賀町	3	0.01	△	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
7	殿崎遺跡	小値賀町	3	0.01	◎	○	○	○	○	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
8	野首遺跡	小値賀町	10	0.01	○	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
9	頭ケ島白浜遺跡	有川町	2	0.01	○	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
10	頭ケ島浜泊遺跡	有川町	2	0.01	○	○	−	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
11	立石遺跡	有川町	1	0.01	△	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
12	西ノ股遺跡	上五島町	0	0.01	○	○	○	−	−	?	−	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
13	脇ノ田遺跡	上五島町	1	0.01	△	○	−	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
14	小浦遺跡	上五島町	5	0.02	○	−	○	−	−	○	−	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
15	桐古里遺跡	上五島町	2	0.01	△	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
16	田ノ浦遺跡	福江市	1	0.01	△	○	−	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
17	鰐川貝塚	岐宿町	7	0.01	○	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
18	白浜貝塚	福江市	4	0.01	○	○	○	○	○	○	○	○	−	−	−	−	／	／	／	／	／	／	／	／
19	大浜・中島遺跡	福江市	2	0.01	◎	○	○	○	○	○	○	○	−	−	○	−	○	○	○	○	○	○	−	○
20	宮下貝塚	富江町	5	0.01	◎	○	○	−	○	○	○	○	−	○	−	○	○	○	○	○	○	○	−	○
21	女亀遺跡	富江町	10	0.03	○	○	−	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
22	三代遺跡	鷹島町	3	0.01	◎	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
23	池田遺跡	松浦市	15	0.1	○	○	−	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
24	古田遺跡	小佐々町	2	0.01	○	−	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
25	岩谷口岩陰	世知原町	85	10.0	○	○	○	／	／	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
26	岩下洞穴	佐世保市	200	8.0	○	−	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
27	大門洞穴	佐世保市	69	7.0	○	○	○	／	／	?	?	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
28	下本山岩陰	佐世保市	16	2.0	○	○	−	−	−	○	○	○	−	○	−	−	−	−	−	○	○	○	−	○
29	天神洞穴	佐世保市	40	1.0	△	○	−	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
30	白井川遺跡	東彼杵町	5	0.4	○	○	−	−	−	○	−	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
31	野田A遺跡	大村市	45	2.6	○	−	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
32	葛城遺跡	大村市	45	2.6	○	○	−	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
33	伊木力遺跡	多良見町	2	0.01	○	○	○	／	／	○	○	○	−	−	−	○	−	−	−	○	○	−	−	−
34	出津遺跡	外海町	5	0.01	◎	○	○	−	−	○	○	／	／	／	／	／	○	○	−	○	○	−	−	○
35	手熊貝塚A	長崎市	5	0.05	△	−	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
36	深堀遺跡	長崎市	4	0.1	◎	○	−	○	−	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
37	脇岬遺跡	野母崎町	5	0.01	◎	○	○	○	−	○	−	○	○	○	○	−	○	○	−	○	○	○	○	○
38	大門貝塚	飯盛町	5	0.05	○	?	?	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
39	有喜貝塚	諫早市	14	0.1	◎	○	○	−	−	○	○	○	／	／	／	／	○	／	／	○	○	／	／	／
40	三会下町遺跡	島原市	0	0	○	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
41	有家堂崎遺跡	有家町	0	0	○	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
42	国崎遺跡	南串山町	2	0.01	○	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
43	永瀬貝塚	加津佐町	20	0.08	○	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／

凡例　調査の履歴　◎：後期主体　○：発掘歴あり　△：表採資料
　　他の欄　○：資料あり　−：出土なし　／：検索不能

最後に五島列島をみてみよう。宇久町宮ノ首遺跡は調査面積が狭いために内容が不鮮明であるが，砂丘の基部に占拠し，貝層をもつことなどからすれば有望な遺跡であることは疑う余地はない。小値賀町の野崎島にある野首遺跡からは縄文時代の各時期の膨大な土器・石器・装身具類が出土している。現在整理中で報告書の刊行が待たれる。福江島の富江湾を挟んだ福江市大富江町宮下貝塚はほぼ同時期の遺跡で，その内容もきわめて類似する。前者は鬼岳の溶岩の末端部に位置し，岩礁性小巻貝を主体とする貝塚を形成し，イルカ・アシカなどの海獣を捕獲しシカ・イノシシなどの哺乳類やサメ・マダイなどの魚類を獲得している。大浜・中島遺跡にはカシ類を生貯蔵するドングリ貯蔵穴が構築されている。

本書で動物遺存体についての論考を述べた宮路淳子によれば宮下貝塚の魚類について，大型の魚類がみられず，外洋を回遊する魚種もみられないところから富江湾内に漁撈活動の中心があったという。また本貝塚の貝種の

同定に尽力いただいた寺田辰郎・寺田貴子によれば，宮下貝塚と中島・大浜遺跡の貝を比較した場合，宮下貝塚の方が個体が大きいことを指摘され，貝の生育する環境の違いが大きいという（註５）。

遺跡の立地は後期段階になると以前にもまして沿岸部への進出がみられる。第11表によれば，43遺跡中現海岸線から１km以上離れた遺跡は７カ所，全体の16％に過ぎない。そのうち佐世保市下本山岩陰は，遺跡周辺が埋め立てられた結果であり往時は海岸までは数百メートルであったらしい。海岸部に立地する遺跡は波打際から潮間帯にまたがるものが多い。こうしたことは漁撈活動への依存度が高揚した結果を示すものであろう。この時期は「中期海退」と「弥生海退」の間の温暖な「後期小海進」にあたり，若干ながら海面が上昇することによって沈降海岸が形成され魚介類の生育に好適な環境がととのったことが考えられる。

長崎県内の縄文時代の貝塚は18カ所である。時期的にみると，前期には５遺跡，中期２遺跡であるが，後期には爆発的に増加し14遺跡を数える。８割近くが後期に営まれており，後期遺跡と漁撈活動の強い結びつきが指摘される。動物遺存体が出土している遺跡は，対馬の志多留貝塚・佐賀貝塚，宇久町宮ノ首遺跡，西彼杵半島の出津遺跡，長崎半島の先端の脇岬遺跡，橘湾沿岸の有喜貝塚と福江島の大浜・中島遺跡および宮下貝塚の８遺跡である。このうち宮ノ首遺跡は調査が小範囲のために貝塚の実体が把握できていないので除外して考えることにする。宮下貝塚ではニホンジカが圧倒的で76％，次いでイノシシが６％であわせると80％を越えるという。こうしたことは比率の変動や量的な多寡はあるものの他の貝塚でも同じ傾向にあることは想像に難くない。貝塚から出土する動物遺存体のうち獣骨ではシカ・イノシシの陸棲獣が主体を占めることはほぼ確実であろう。石器組成の中に打製石鏃が基本的に装備されることもその裏付けとなる。また日常的な生業としては岩礁性小巻貝の採集があり，植物性食糧の確保も大浜・中島遺跡にみられるドングリ貯蔵穴などの存在から確認されるところである。外洋性と評価され，海獣類や大型魚類を捕獲するこの地域の遺跡においても基本的にはシカ・イノシシなどの陸獣とドングリなどの木の実などに頼らざるを得なかったものであろうか。ところで当地方では，クジラ・イルカ・アシカなどの海獣類やサメ・マグロなどの大型魚類の捕獲という「対馬暖流型漁撈文化」（註６）や「西北九州型漁撈文化」（註７）といったものが存在することが指摘されている（橘1979，安楽1985，木村1987・1994・1995，山崎1988，澤下・松永1994など）。集約すると，海獣・大型魚類を対象とする石銛・石鋸などの刺突具や「西北九州型結合釣針」などの骨角器を使用して漁撈文化で，対馬暖流の洗う九州西岸から壱岐・対馬を越えて朝鮮半島南部の多島海までの広域に展開する。縄文時代前期段階に形成され，中期を経て後期段階まで連綿と続くもの（山崎1988）とされる。

第11表には各遺跡から出土した生業に関わる石器・骨角器と対象となったと思われる海獣・陸獣・大型魚類を載せている。この表では石器の項目に「石銛」の欄がない。県内の報告書を熟読するとこの時期の確実な出土例を検出することはできなかった。田島龍太も指摘するように石銛はつぐめのはな遺跡を除けばほとんどが数点というごく限られた点数の出土であり，調査区が限定された場合には検出されないことも考えられるが県内35遺跡で出土していないことからこの時期には組成されないとすべきであろう。福田一志は縄文時代後期を南福寺・坂の下段階，鐘崎・北久根山段階，三万田段階の３期に区分し，それぞれの段階の石器群を分析した（福田1997）。後期中葉の石器群としては，小値賀町殿崎遺跡第１調査区・対馬佐賀貝塚をとりあげ，石銛状の大形剝片鏃が出現するなど，剝片鏃に依存する率が高くなること，安山岩製の大形石銛はこの時期になると減少あるいは大形剝片鏃にとってかわられ，石鋸の出土がやや減少する傾向にあるとした。石銛は，後期初頭段階までは確実に出土しているが，中葉段階には姿を消してしまうようである。福田は石銛に代わるものとして大形剝片鏃

を当てる。この石器の出土地は佐賀貝塚・殿崎遺跡・白浜貝塚・大浜・中島遺跡・そして宮下貝塚の5遺跡にすぎず速断はできない。石銛はクジラ・イルカ類の捕獲具と位置づけられてきたが，後期中葉段階ではその姿を消してしまうらしい。それに代わるものとしては離頭銛・西北九州型釣針・逆T字形釣針などの豊富な骨角器の出現があげられよう。

紙面も尽きたので最近の長崎県内における縄文時代の生業論の現状について渡邊康行の頭ケ島白浜遺跡での業績を評価して項を閉じたい。渡辺は報告書の中で，遺物の遺存状況，石材について（註8），石器組成のついての各項で詳細なデータを積み上げた後に「頭ケ島白浜遺跡における活動の推定」をする。研究史を素描した後，立地環境と石器組成から頭ケ島白浜遺跡で行われた生業活動の復元を試みている。データの取り扱いも慎重であり，論旨の展開も明快である。結論としては遺跡で行われた生業活動として，季節的ないし定期的に行われたイルカなどの海獣類の捕獲・解体作業を想定した。捕獲は石銛などの寡少性から座礁したイルカの撲殺と判断している。結論については異論もあるが，遺跡から得られた情報を駆使して生業活動の実態に迫る渡辺の方法は，県内においては出色であり，今後は民族学などのデータを援用して一層の研究の深化を期待するとともにこうした方法論の普遍化が望まれるところである。縄文時代の生業の実態解明にはこうした地道な分析の積み重ねが要求されており，問題意識をもった発掘調査および報告書の作成が急務である。

註1　西彼杵郡大島町寺島遺跡では，縄文時代後期前葉の坂の下式土器が水磨をうけ摩滅しているのに対し，その層の最上位から出土する後期後葉の三万田式土器は摩滅していないことから坂の下段階以降に小海進があったと考えられる（久原1981）。

註2　田中榮次氏が採集したこの土製品は色調が赤褐色を呈し，胎土に滑石を大量に混入している。採集地点などを加味して考えれば後期前葉の坂の下段階に位置づけられよう。なおこの土製品については鈴木重治の資料紹介がある（鈴木1969）ほか，木村幾多郎・中山清隆によって写真が公表されている（木村・中山1992）。

註3　出津遺跡は報告書はあるものの獣骨等の分析は明らかになっていない。また脇岬遺跡は長崎県を代表する遺跡となりうるものであり，一刻も早い報告書の刊行を望みたい。

註4　大浜遺跡・中島遺跡は距離的に近接しており本来は一つの遺跡であろう。大浜遺跡は戦前から著名で津田の地名表などにも記載されているが，中島遺跡は1985年の調査で登場する。すでに両者の遺跡名で調査が行われた経緯もあり，ここでは大浜・中島遺跡と表記して一つの遺跡としてあつかうこととしたい。

註5　二つの貝塚の主な貝の採集場所である岩礁地帯は溶岩の噴出年代の違いがあり，古い富江側の岩礁が栄養が高く海藻類の生育にも適しているらしい。こうしたことは魚類・甲殻類にも当然影響するものと思われる。

註6　「対馬暖流型漁撈文化」の概念を提唱したのは橘昌信である。橘は田平町つぐめのはな遺跡の石銛を分析し，その形態分類，分布，対象物，使用方法などを考察したのち，海棲哺乳類や大型魚類を対象とした刺突漁業があったとし，それを「対馬暖流型漁撈文化」と呼称した（橘1979）。

註7　木村幾多郎は縄文時代の遺跡類型化をすすめ，長崎県など外洋に面するものをD類型の遺跡として次のように規定する。「漁具は，石銛（橘分類A・B類），石鋸，大形剝片石鏃，大形縦長剝片，サヌカイト剝片スクレイパー，鎌崎型スクレイパー，大形結合釣針，ヤス・開窩式回転銛（？）などが出土し，海棲動物もイルカ・クジラ類，アシカや，サメ類，カジキ類などの大型魚，カンダイ・マハタ・イシダイ等が出土し，対馬暖流にのる回遊魚が多い。これらは，漁具としての石銛・大型結合釣針に対応すると考えられており，西北九州漁撈文化の特徴をなすものである。外洋性遺跡群である」とする（木村1987，1996）。これがおおよそ「西北九州漁撈文化」という概念である。

註8　渡邊の石材論については吾妻町弘法原遺跡での「在地系石材」である磨石・石皿類に使用された安山岩へのアプローチは瞠目するのみである（渡邊1992）。こうした石材論は広平遺跡にも継承されている（渡邊1996）。

第2節　宮下貝塚出土の縄文中・後期土器について

1．第Ⅲ群土器（船元式併行土器）について

今回の宮下貝塚の調査では，船元式併行土器がまとまって出土した(註1)。本県で，船元式併行土器がまとまって出土したのは南高来郡国見町百花台遺跡以来のことであり，しかも九州西端の五島列島からの出土ということで，あらためて縄文中期前半における船元式系土器の流入が強力であったことを認識させられた。ここでは，九州での船元式併行土器の研究状況を概観し，さらに本県における出土状況をまとめることによって，本遺跡出土の当該土器を総括したい。

(1)　九州における船元式併行土器の研究史抄と研究の現状

船元式土器は岡山県里木貝塚の調査で，間壁忠彦・間壁葭子によって型式設定された土器群とその編年が一般に知られ，用いられている（間壁1971)。

また，九州出土の船元式併行土器については，これまで田中良之や東和幸によって研究され，編年されている。田中は間壁の編年案を検討し，船元式併行土器を5段階に再編した（田中1980)。

一方，東は春日式土器の編年を行う過程で，船元式併行土器を3段階に分類した（東1991)（註2)。このような先学の研究成果を大きくまとめると，中期前葉段階の船元式併行土器は，縄文地に爪形文や刺突文を施し，隆帯を付すことを特徴とし，後続する中期中葉段階の船元式併行土器は縄文地に隆帯，ならびに竹管による平行沈線文を多用することを特徴とするといえよう。

(2)　長崎県の船元式併行土器研究

過去に本県から出土した船元式併行土器は小片が多く，かつ量も少なく，中期阿高式土器に共伴する客体的存在という定説もあって，器形が推定できる資料の報告は極めて少なかった。

しかし，あらためて過去の調査報告を見直すと，県内のほとんどの縄文中期遺跡において船元式併行土器が出土していることが指摘できる(註3)。さらに1980年代後半からは，全体の器形が推定できる資料も報告されるようになってきた（註4)。

(3)　宮下貝塚の船元式併行土器

宮下貝塚から出土した船元式併行土器は，体部に隆帯を有する資料が多い。隆帯を有する資料はさらに，縄文を地紋とするものや，撚糸文を地紋とするもの，条痕文を地紋とするもの，刺突文を地紋とするもの，地紋をもたないものなどに細分可能で，様々なヴァリエーションをもつことがわかる。

また竹管による平行沈線文や，連弧文が施された資料がみられないことは，本遺跡出土の船元式併行土器のもうひとつの特徴であるといえよう。このように隆帯をもち，刺突文や押引文を施す資料が多く，竹管による平行沈線文や連弧文がみられないという特徴から考えると，これらの土器は船元式併行土器のなかでも古い資料と思われ，本遺跡において中期前半段階の主体を占める土器群と思われる。

(4)　若干の考察

今回，宮下貝塚では，並木式・阿高式土器など，従来の九州の縄文中期を代表する土器の出土が数点にとどまっているのに対し，船元式併行土器は41点と，より多くの出土をみた。このことより，先に述べたごとく，縄文中期前半段階の宮下貝塚では，船元式併行土器がその主体をなすといえるであろう。おりしも九州の縄文中期の土器編年は，中期の初頭に鷹島式土器があり，さらに在地化した船元式土器が続き，中期後半は春日式土器から並木式土器，さらには阿高式土器が続くという編年観におちつく状況であるという(註5)。宮下貝塚出土土器はそのような新しい九州縄文中期土器編年によく符合するといえよう。

県内の縄文中期遺跡は，宮下貝塚のごとく，中期前半に船元式併行土器が主体を占め，中期後半に

春日式土器・並木式土器・阿高式土器が出土するが，中期後半の土器の出土量はけっして多くはなく，次の後期初頭の坂の下式・南福寺式土器段階となって一気に出土量が増加するというのが実態ではないかという感想をもっている（註６）。

新しい九州の縄文中期土器の編年観をうけて，本県でも今後一層，縄文中期末の阿高式土器の認識と，分布の洗い出しは急務の課題となっている（註７）。

２．第XIV群土器（北久根山第二型式土器）について

はじめに

今回の宮下貝塚の調査では，比較的まとまった量の北久根山式土器を出土した。とくに第XIV群土器とした北久根山第二型式の土器群には見るべき資料が多い。本県は，北久根山式土器の出土が比較的多い地域と言えようが，整備された調査報告となると極めて少ないのが現状である。ここでは北久根山第二型式土器を中心に，研究史や研究の現状を概観し，宮下貝塚出土土器の評価をおこないたい。

(1) 北久根山第二型式土器の研究史抄と研究の現状

北久根山式土器の研究史は，富田紘一の論攷に詳しいので(富田1996)，ここでは宮下貝塚出土土器の主体を占める，北久根山第二型式土器を中心に研究史を概観したい。

広く知られるように，北久根山式土器を第一型式と第二型式に分けたのは前川威洋である（註８）。その後，北久根山第二型式土器は広い分布範囲をもつことがわかってきた。そして北久根山第一型式と第二型式が系統差であるとする杉村幸一（杉村1987）や，時期差であるとする岡美詠子（岡1987）の論攷を経て，北久根山第二型式の内容は，水ノ江和同によってかなり具体的になってきた（水ノ江1993)。

また東九州では高橋信武によって片粕式土器との関連で分析され，北久根山第二型式土器は片粕II式に併行するとされた（高橋1981)。北部九州では山口信義によって菊水町式が提唱された（山口1988)。

(2) 長崎県の北久根山式土器研究史抄

本県では1965年（昭和40）に別府大学と長崎大学が宮下貝塚の発掘調査をおこない，坂田邦洋は出土した深鉢の一部を，新出の土器ということで「富江式」として設定し，報告した(賀川編1971)。1980年（昭和55）には県教委によって福江・白浜貝塚の報告書が刊行された（安楽編1980)。多量の遺物が出土し，北久根山式土器も多く出土したようだが，報告が図録的なものとなったため，詳細は不明である。

一方，西彼杵郡外海町出津（しつ）遺跡では，1982年（昭和57）に発掘調査がおこなわれ，出土した土器は第１試掘坑出土土器（出水式系土器）→第２試掘坑下位砂層出土土器（北久根山式・市来式折衷土器）→Ａ５区貝層出土土器（北久根山式系土器盛行期）→第２試掘坑上位砂層出土土器（北久根山式新相）（註９）と編年された（平野編1983)。出津遺跡では報告書をみるかぎり北久根山第二型式土器の出土はなく，中心は北久根山第一型式の新旧段階の土器群のようである。

秀島貞康は有喜貝塚の報文のなかで，有喜VIII類（御手洗Ａ式）と鐘崎式との共伴を指摘し，さらに有喜VII類（鐘崎式）とIX類（市来式)，Ｘ類（北久根山式）との共伴や，出津遺跡，福江・白浜遺跡などにおける折衷土器の存在から「３者が時間的・空間的に近接したものであることを示している。」とした（秀島1984)。

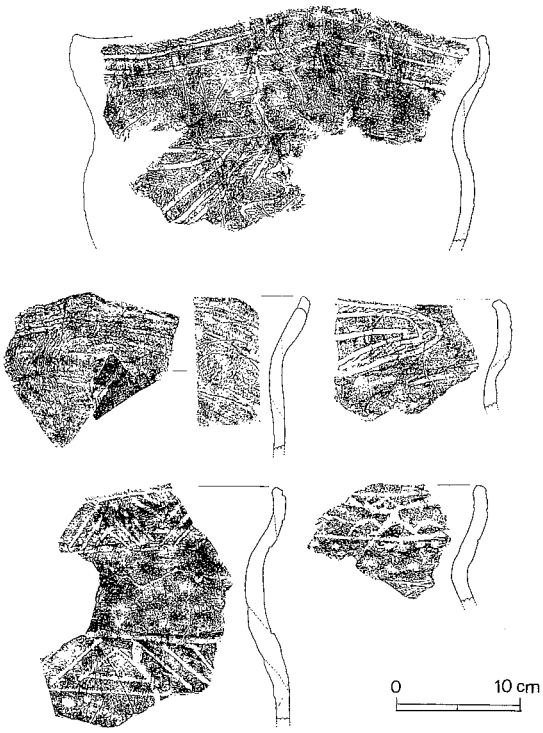
高野晋司は殿崎遺跡の報文中で県内における縄文中・後期土器の出土分布図を分析するなかで，遺跡の継続性という観点から「阿高式系土器から磨消縄文系土器への推移が比較的自然に行われた」と

説いた（高野1986）。

1989年（平成元）には対馬・峰町佐賀貝塚の報告書が刊行され，中期・後期土器群に新たな資料がくわえられた(正林1989)。そのなかで北久根山第二型式の土器が出土している(第44図)。報告書では，とりたてて北久根山第二型式土器と扱ってはいないが,「北久根山系」とされた一群がそれに該当する。

(報文の第22～24図35・39・40・48・50の資料)。

同年には，北松浦郡鷹島町の三代（みよ）遺跡でも北久根山第二型式土器の出土が報告されている。報文中の「II類 北久根山式土器」と報告された土器のうち報文第7図30を除いた資料は北久根山第二型式土器である(村川1989)。これまで本県では，北久根山第二型式土器が北久根山式系土器として報告されることが多く，型式学的な検討が加えられることはなかったといえよう。その意味で，今回，北久根山第二型式の標式遺跡のひとつである宮下貝塚出土土器の様相が明らかになったことは，本県の北久根山第二型式土器の様相を把握するうえで大いに意義があったといえよう。



第44図　佐賀貝塚出土北久根山第二型式土器（s＝1/6）

(3)　若干の考察

宮下貝塚は1965年（昭和40）に調査され，1968年（昭和43）に図録篇が，1971年（昭和46）に解説篇が刊行された（賀川1968･1971)。先述したごとく，調査者の坂田邦洋は，解説篇のなかで，出土した縄文後期土器の一部を「富江式」として型式設定し，新型式の土器として公表した。それより先，宮下貝塚の報告書が刊行される以前に，前川威洋は「正式な報告がまだないので，後期の土器の主なものを層位とは無関係に一部とり出して，その性格について検討」している（前川1979)。

前川が宮下第3類土器と4類土器を合わせて北久根山第二型式としたことは，前述したとおりである。一方，坂田が「富江式」と呼んだ土器は，賀川報文をみるかぎり，第6図および第7図の深鉢形土器で，いずれも前川の宮下第3類に含まれると考える。今回の報告では第XV群第1類と分類した一群に合致するものである。

また，坂田が「富江式」とした深鉢のなかで，前川分類にふくまれないものが，賀川報文の第5図の深鉢であり，今回の報告では第XV群第2類とした一群である。この種の土器は，胎土や色調，および器形などからみて北久根山第二型式土器に含まれることは確実である。第XIV群第1類とセットとなるものか，あるいは時間差をもつものかは現状では明らかにしえないが，今後の検討課題である。

3．第XIII群土器（北久根山第一型式土器）について

宮下貝塚出土の北久根山第一型式の深鉢と熊本県北久根山遺跡などから出土した深鉢を比較した場合，第13図97・100・104の深鉢のように北久根山遺跡出土土器とは若干異なる資料が見いだせる。これらの資料は橋状把手の環部が潰れて痕跡器官と化し，「W」字状の浮文が沈線文化している。型式学的にみた場合は第13図96・98・99・106に後出する可能性がある資料といえる。すなわち本遺跡出土の北久根山第一型式土器のうち第13図97・100・104の資料は，当該型式のなかでも新相を示すと考える。

追記　宮下貝塚出土土器の報告にあたっては渡邊康行氏の助力があった。記して感謝する。

［註］

註１　本稿では，船元式系土器の報告にあたって，在地化した船元式土器という意味で，「船元式併行土器」とした。将来的には具体的な型式名が冠されることが望ましいだろう。

註２　田中は瀬戸内における中期土器を第１段階（船元Ⅰ式Ａ・Ｂ類）［中期前葉］，第２段階（船元Ⅰ式Ｃ類とⅡ式Ａ・Ｂ類）［中期前葉］，第３段階（船元Ⅱ式Ｃ類とⅢ式Ａ類）［中期中葉］，第４段階（船元Ⅲ式Ｂ・Ｃ類・Ｄ類）［中期中葉］，第５段階（船元Ⅳ式・Ⅲ式Ｅ類＜従来福田Ｃ式と呼称されたもの＞）［中期後葉の古い段階］，里木Ⅱ・Ⅲ式［中期後葉の新しい段階］に再編した。

東和幸によると，古段階の船元式併行土器は，地紋に縄文が施され，隆帯によって文様を描き，口縁部内面にも縄文を施すことを特徴とするという。中段階の船元式併行土器は，地紋に縄文が施され，平行沈線で連弧文が描かれたり，隆帯と平行沈線によって三角形を基本モチーフとする文様を描き，口縁部内面の縄文施文はなくなるとした。新段階の船元式併行土器は，地紋が撚糸文に変わり，半截竹管により波状文・連弧文・渦巻文などを描くことが特徴であるという。

註３　郷ノ浦町名切遺跡・佐世保市下本山岩陰遺跡・同市宮の本遺跡・長崎市深堀遺跡・飯盛町大門貝塚・国見町百花台遺跡・有川町頭ケ島白浜遺跡・福江市堂崎遺跡・同市白浜遺跡・宇久町宮ノ首遺跡などで，船元式土器ないし竹崎式土器として報告されている。

註４　1984年（昭和59）および1985年に同志社大学によって西彼杵郡伊木力遺跡で調査が行われ，器形が推定できる資料が出土した。船元式併行土器は伊木力第６群土器として報告された(川崎1990)。本県で船元式併行土器がまとまって確認されたのは先述のように南高来郡国見町百花台遺跡の調査であった。百花台遺跡では船元式併行土器に先行する鷹島式系土器および船元式併行土器の古段階の土器が確認され，九州縄文土器研究者に少なからず波紋を投げかけた（安楽1994)。1995（平成7）年に南松浦郡有川町頭ケ島遺跡で発掘調査が行われ，船元式併行土器ならびに里木Ⅱ・Ⅲ式併行の土器の報告がなされた（古門・渡邊1996)。

註５　福岡県教育委員会水ノ江和同氏より御教示いただいた。

註６　問題となるのは，本県における中期阿高式土器である。結論から述べると，過去に本県で中期阿高式土器と報告された土器には，多分に後期初頭の坂の下式土器ないしは，南福寺式土器が含まれていた可能性を指摘しなければならない。また，坂の下式土器が佐賀県の森醇一朗によって阿高式土器と分離して認識され(森1975)，田中良之によって，型式設定された（田中1979）のちにも，本県では，胎土に滑石が含まれ，赤味をおび，口縁部第１文様帯に凹点文を施す坂の下式土器の一部が中期阿高式土器と報告されていた可能性がある。このことによって本県では，並木式土器以上に希薄な分布を示す中期阿高式土器が，あたかも県内に広く分布し，量的にもまとまって出土するかのような印象を与えてしまっているといえよう。なお本県の阿高式土器の問題は日頃より，渡邊康行との議論のなかで，明らかとなったことである。したがって，ここで指摘した内容にかかわる責は，最終的に両名に帰すものである。

註７　五島列島でも，福江市中島遺跡や小値賀町殿崎遺跡では，船元式併行土器の出土がなく，縄文中期前半が空白となっている。このような問題も今後の研究課題である。

註８　前川威洋は熊本県北久根山遺跡出土土器を第１類から第５類およびその他に分類した。そのうち第１類(ａ～ｄに細分）は「同一型式でまじりけのないものと見てよい」とし，鉢形ないし壺形の第２類と「セット関係にある」とし（前川1996)，第１類と第２類をあわせて北久根山式第１型式とした。

つぎに前川は熊本県浜ノ洲貝塚出土土器および本県宮下貝塚出土土器の検討から「宮下第３類と浜ノ洲第６類，宮下第４類と浜ノ洲第７類が互いに相当する土器群とみなし，浜ノ洲第５類を加えて，北久根山第二型式として型式設定した。さらに先の北久根山第一型式とこの北久根山第二型式を合わせて「北久根山式土器」とした。

なお北久根山遺跡出土土器に関する前川の分類について，富田紘一は次のような見解を示している。すなわち，前川分類の第３類は御領式系土器であること，第４類中の１点は北久根山式土器とするには疑問があること，前川分類の浜ノ洲第５類は鐘崎式から北久根山第一型式の段階に含まれることなどを指摘し(富田1996)，前川の型式設定に部分的な修正を加えている。

また富田は北久根山第二型式土器について，「基準になる資料がない型式名は呼称に混乱をもたらしかねない」とし，「研究者によって必ずしも同一の土器を指していない場合がある」と指摘した（富田1996)。

註９　報文では「全体として西平式系土器に共通する特徴を示し」としているが（平野1983)，実測図をみるかぎり北久根山式の範疇としてよいであろう。

［引用・参考文献］

安楽勉編1980『白浜貝塚』（福江市文化財調査報告書第2集）福江市教育委員会
安楽勉編1985「五島列島をめぐる漁撈活動」『季刊考古学』11号　雄山閣
安楽勉1994「土器」『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告』（長崎県文化財調査報告書第116集）長崎県教育委員会
梅津正倫1994『沖積低地の古環境学』古今書院
江坂輝彌1983『化石の知識　貝塚の貝』（考古学シリーズ９）東京美術
川道寛1997「中島遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅴ』（長崎県文化財調査報告書第133集）長崎県教育委員会
岡美詠子1987「九州における後期縄文土器について」『肥後考古第６号』肥後考古学会
賀川光夫編1968『宮下遺跡調査報告　図録篇』（長崎県文化財調査報告書第7集）長崎県教育委員会
賀川光夫編1971『宮下遺跡調査報告　解説篇』（長崎県文化財調査報告書第9集）長崎県教育委員会
川崎保1990「第６群土器」『伊木力遺跡－長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査』多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室
木村幾多郎1987「北部九州の漁撈活動」『文明のクロスロード　Museum Kyushu』24
木村幾多郎1994「北部九州の狩猟・漁撈活動」『九州の貝塚－貝塚が語る縄文人の生活－』北九州市立考古博物館
木村幾多郎1995「自然遺物にみる原始・古代肥前の食生活」『風土記の考古学５　肥前風土記の巻』同成社
吉良哲明1989『原色日本貝類図鑑　増補改訂版』保育社
澤下孝信・松永幸男1994「九州地方の縄文時代貝塚」『九州の貝塚－貝塚が語る縄文人の生活－』北九州市立考古博物館
島津義昭1976「西北九州の縄文後期社会　－石器よりみた素描－」『季刊どるめん』10　JICC 出版
正林護1982「鰐川貝塚」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅴ』（長崎県文化財調査報告書第57集）長崎県教育委員会
正林護編1989『佐賀貝塚』（峰町文化財調査報告書第9集）峰町教育委員会
杉村幸一1987「縄文時代後期北久根山式土器の一考察」『東アジアの考古と歴史』（岡崎敬先生退官記念論集 中）岡崎敬先生退官記念事業会
鈴木重治1969「五島列島福江島の動物形土製品」『考古学ジャーナル』35
高野晋司1986「総括」『殿崎遺跡』（長崎県文化財調査報告書第83集）長崎県教育委員会
高野晋司・福田一志1986『殿崎遺跡』（長崎県文化財調査報告書第83集）長崎県教育委員会
高橋信武1981「片粕系土器の細分に向けて」『赤れんが創刊号』赤レンガ出版会
橘昌信1978「縦長剝片－西北九州における縄文時代の石器研究１－」『史学論叢』９
橘昌信1979「石鋸－西北九州における縄文時代の石器研究２－」『史学論叢』10
橘昌信1998「縄文時代における剝片石器生産とその構造－腰岳産黒曜石の石器生産・流通と専業集団－」『網干善教先生古稀記念考古学論集』
立平進1995「西海漁業の歴史と民俗」『風土記の考古学５　肥前風土記の巻』同成社
田中良之1979「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』６　九州古文化研究会
田中良之1980「新延貝塚の所属年代と地域相」『新延貝塚　福岡県鞍手郡鞍手町新延所在縄文時代貝塚の調査』鞍手町埋蔵文化財調査会
田中良之・横山順1979「壱岐・鎌崎海岸遺跡について」『九州考古学』54　九州考古学会
津田繁二1940「我が長崎県の先史時代及び原始時代の遺跡遺物の概略に就て」『長崎談叢』第26輯
徳永貞紹1994「並木式土器の成立とその前夜」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会
富田紘一1996『北久根山』肥後上代文化研究会
東和幸1991「鹿児島県における縄文中期の様相」『南九州縄文通信』№５　南九州縄文研究会
長崎県土地対策室1979『土地分類基本調査 三井楽・福江・玉之浦・富江・男島及女島』
秀島貞康1984「まとめ」『有喜貝塚』（諫早市文化財調査報告書第5集）諫早市教育委員会
平野敏和編1983『出津遺跡』（外海町文化財調査報告書第２集）外海町教育委員会
福田一志1997『伊木力遺跡Ⅱ』（長崎県文化財調査報告書第134集）長崎県教育委員会
古門雅高・渡邊康行編1996『頭ケ島白浜遺跡』（有川町文化財調査報告書第１集）長崎県有川町教育委員会
前川威洋1979「九州後期縄文土器の諸問題－磨消縄文土器の展開－」『九州縄文文化の研究』前川威洋遺稿集刊行会
間壁忠彦・間壁葭子編1971『里木貝塚』（倉敷考古館研究集報第７号）倉敷考古館
水ノ江和同1993「九州の縁帯文土器－九州における縄文後期前・中葉土器研究の現状と課題－」『古文化談叢』第30集

上　九州古文化研究会
宮崎貴夫1991『宮ノ首遺跡』（宇久町文化財調査報告書第２集）宇久町教育委員会
宮崎貴夫1993「宮下貝塚」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書』（長崎県文化財調査報告書第109集）長崎県教育委員会
村川逸朗1989「三代遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報ＸＩＩ』（長崎県文化財調査報告書第94集）長崎県教育委員会
村川逸朗・正林護1987『中島遺跡』（福江市文化財調査報告書第３集）福江市教育委員会
森醇一朗編1975『坂の下遺跡の研究』（佐賀県立博物館調査研究書第２集）佐賀県立博物館
安田喜憲1997『縄文文明の環境』（歴史文化ライブラリー24）吉川弘文館
山口信義1988『菊水町遺跡（Ｉ区の調査）』（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
山口信義1989「周防灘・響灘沿岸地域における北久根山式併行期の土器」『研究紀要』（埋蔵文化財調査室開設10周年記念特集号）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
山崎純男1988「西北九州の漁撈文化の特性」『季刊考古学』25　雄山閣
波部忠重・小菅貞男1989『標準原色図鑑全集３　貝』保育社
渡辺誠1985「西北九州の縄文時代漁撈文化」『列島の文化史』２　日本エディタースクール
渡邊康行1992「石器群の石材利用について」『弘法原遺跡』（吾妻町の文化財13）
渡邊康行1996「頭ケ島白浜遺跡における活動の推定」『頭ケ島白浜遺跡』（有川町文化財調査報告書第１集）

図　　版

調査前の遺跡

コンクリート舗装除去作業

調査風景

調査風景

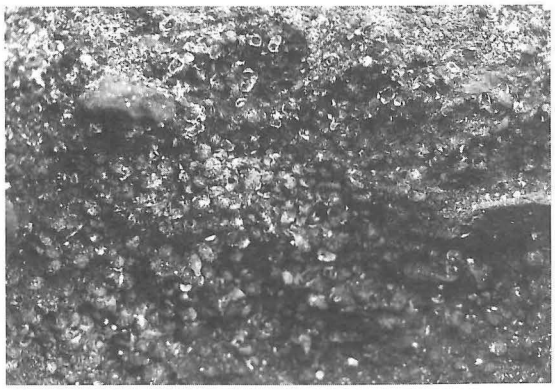
調査風景

富江小 3 年生　見学

調査終了（南から）

調査終了（北から）

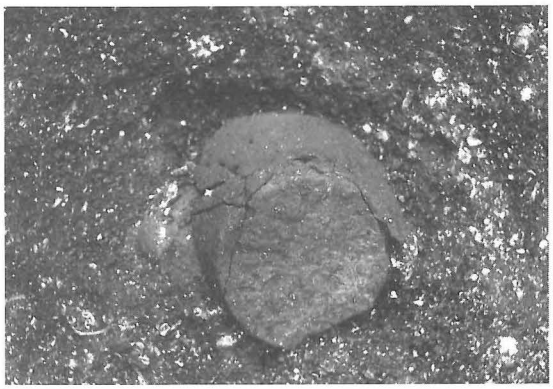
図版 2



A区 2 層（貝層）断面

B区北壁土層断面

阿高式土器出土状態



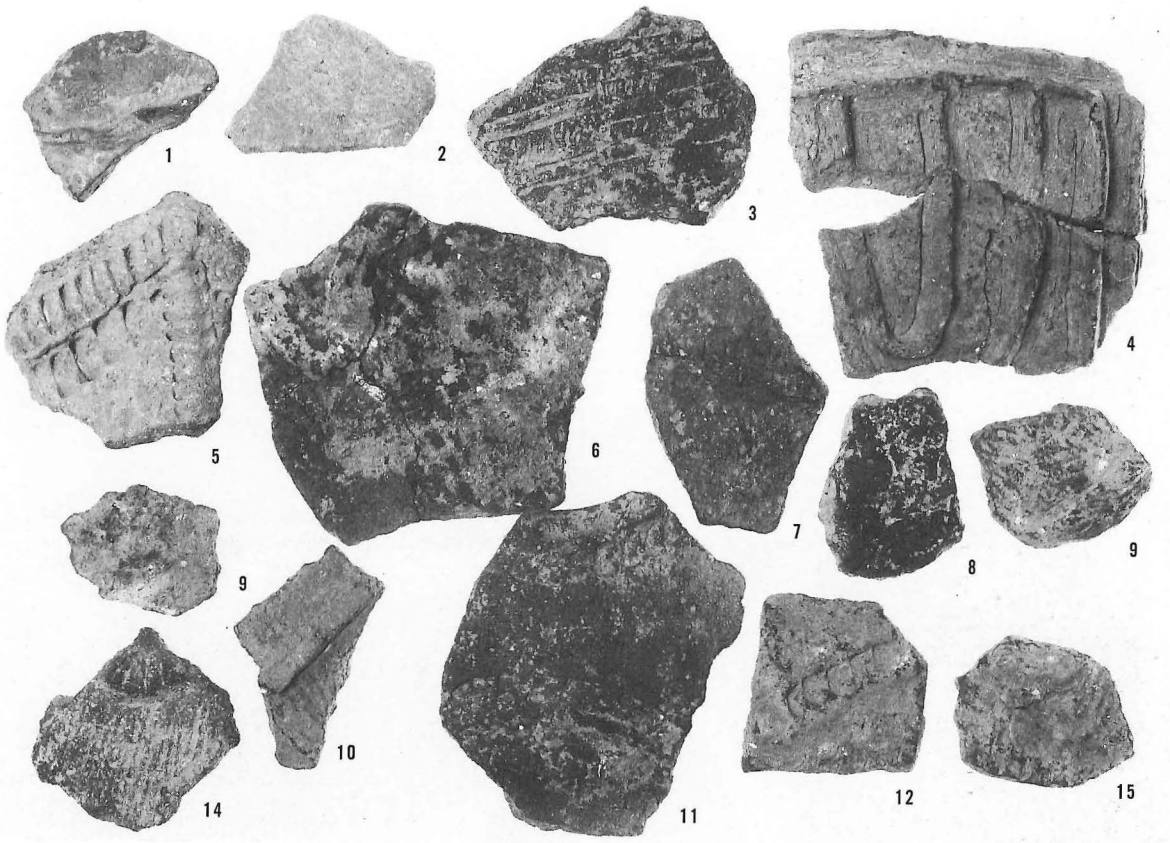
鯨底出土状態

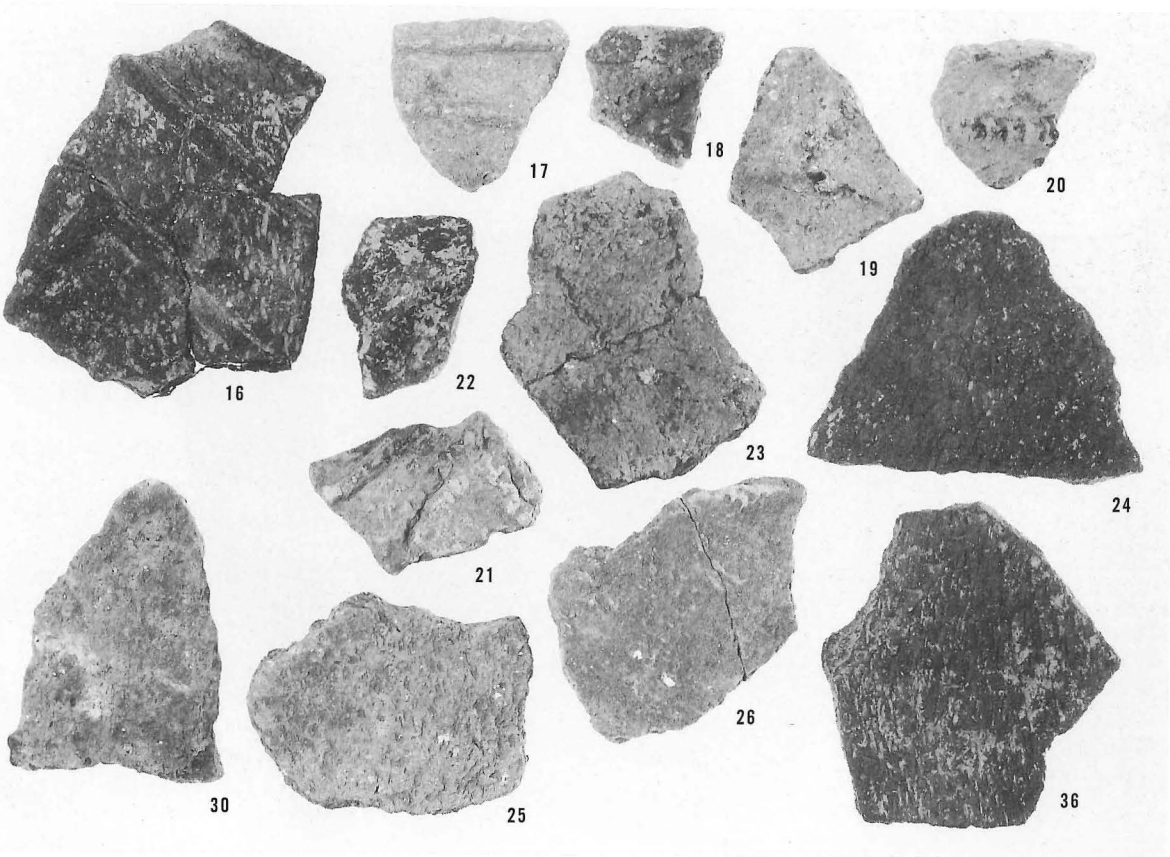
北久根山式土器出土状態

北久根山式土器出土状態

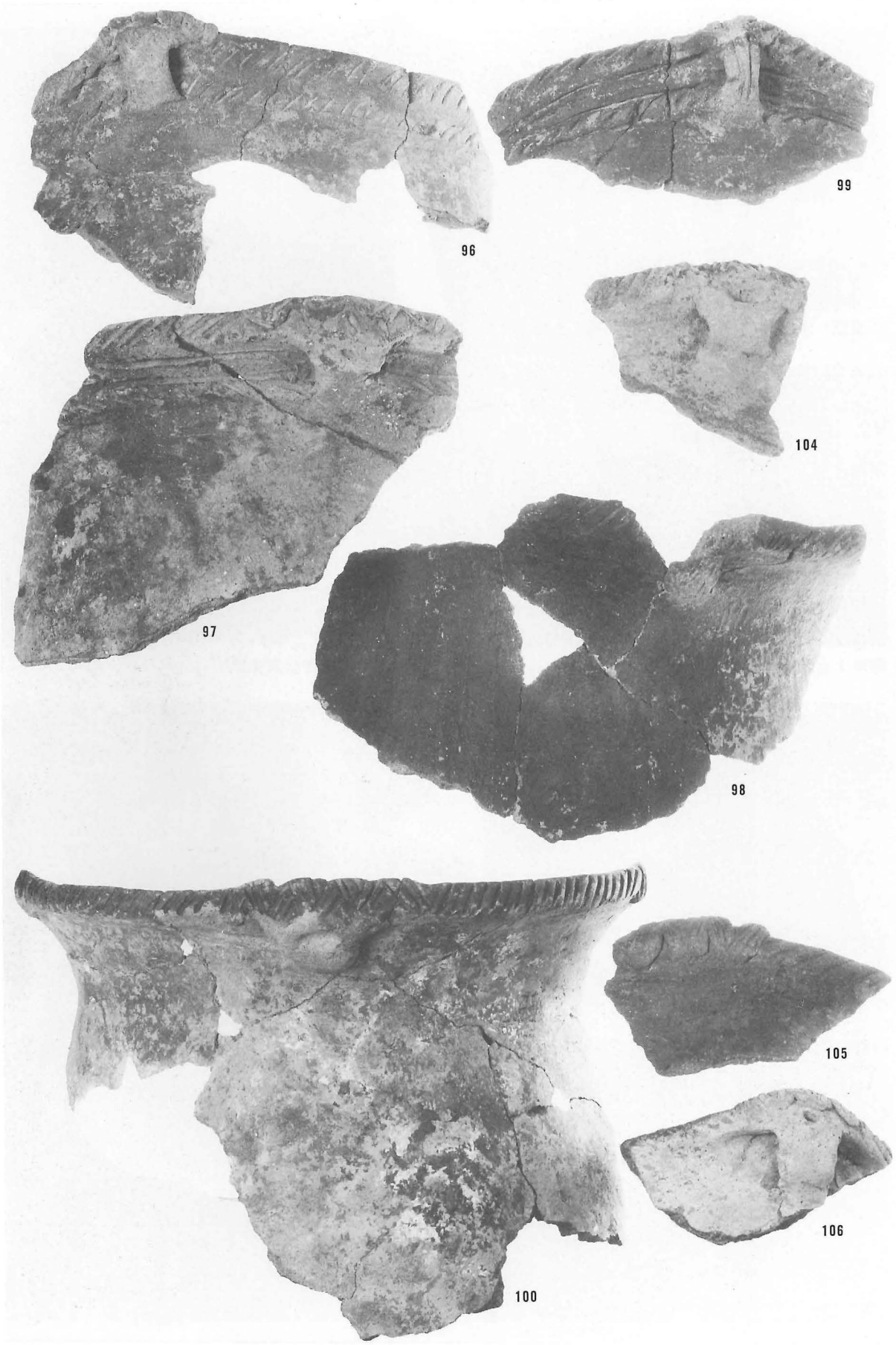
北久根山式土器出土状態

石斧出土状態

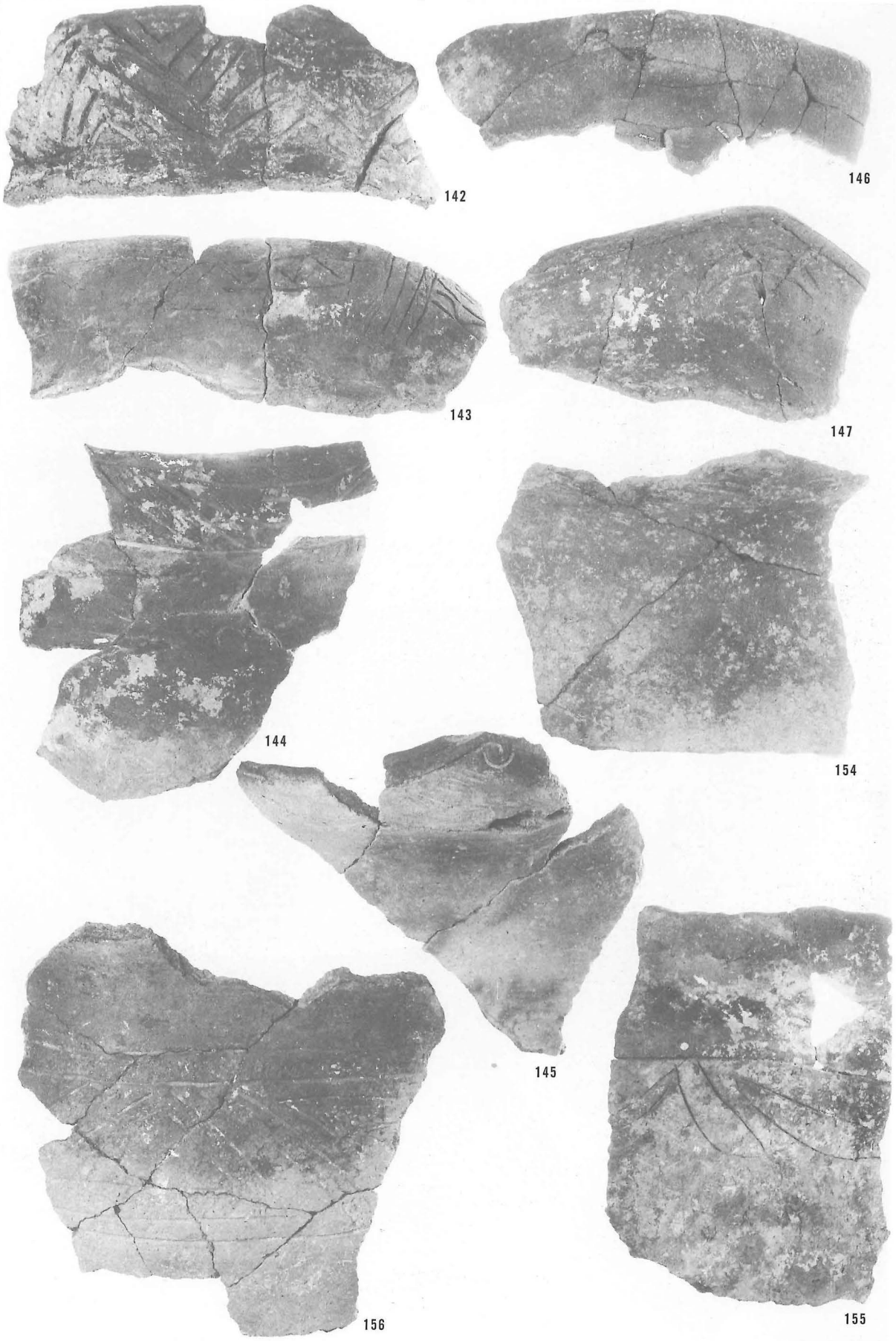




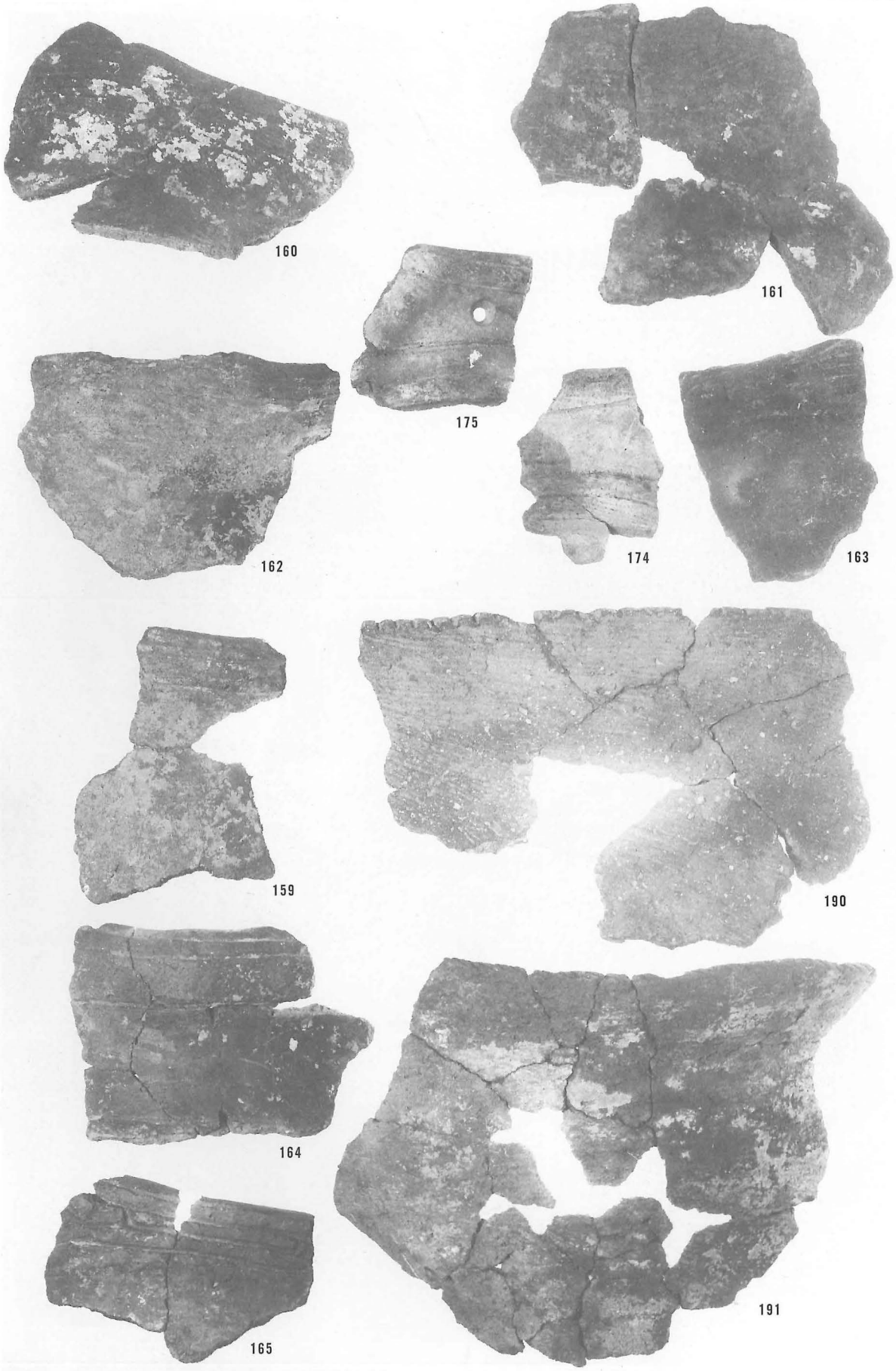
出土遺物①



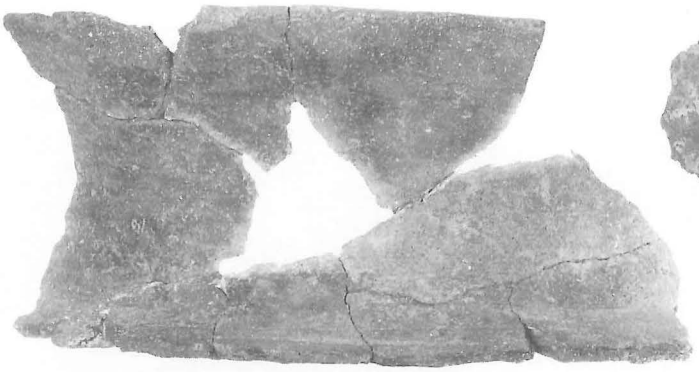
出土遺物②

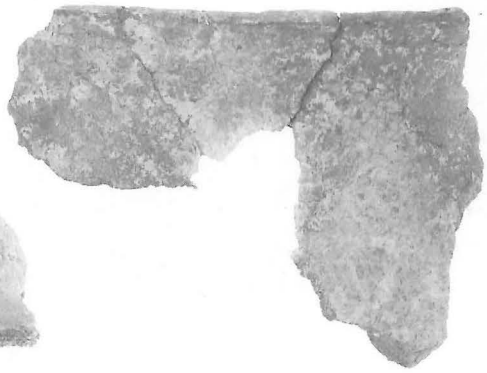


出土遺物③

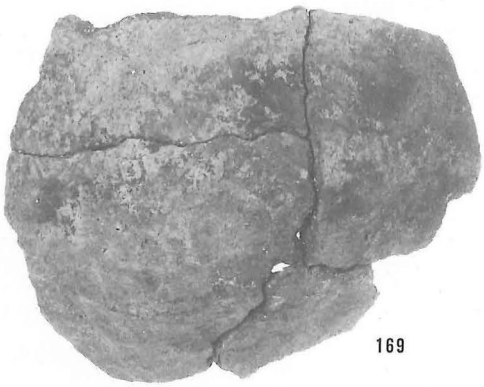


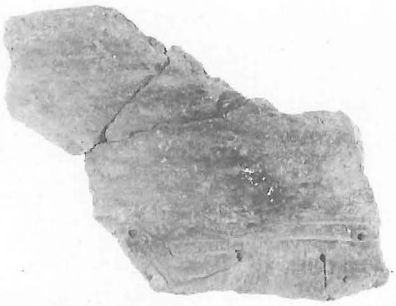
出土遺物④

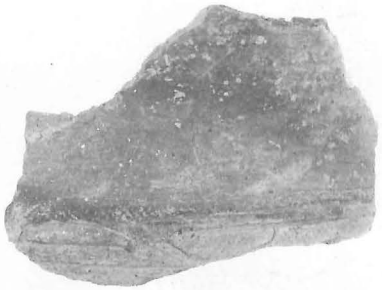

166

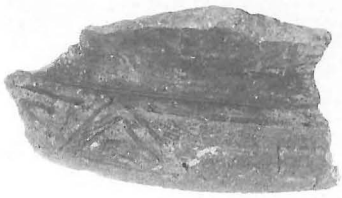

168

167


169


132


133


134

136

137

138

135

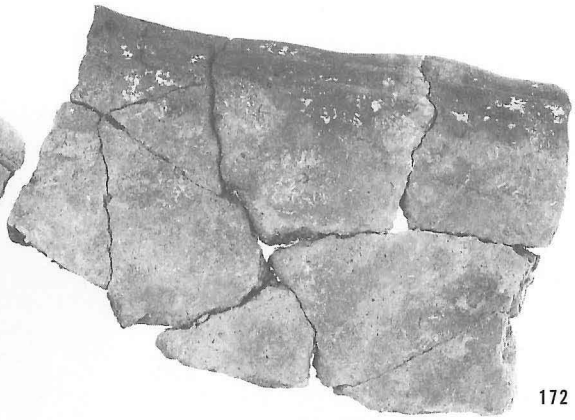
139

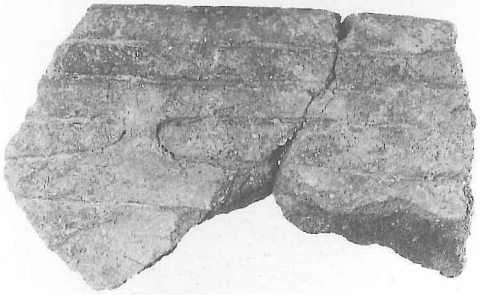
140

141

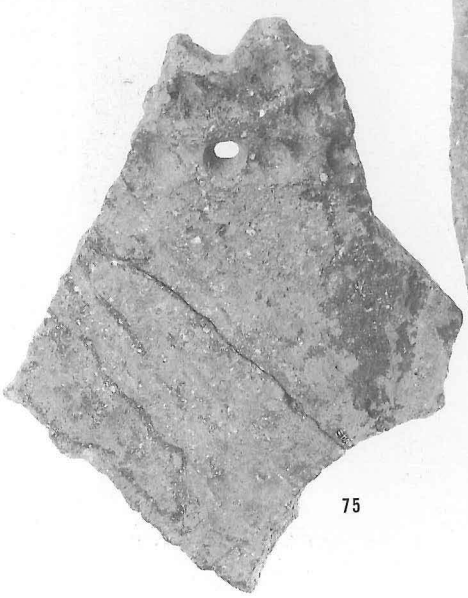
出土遺物⑤

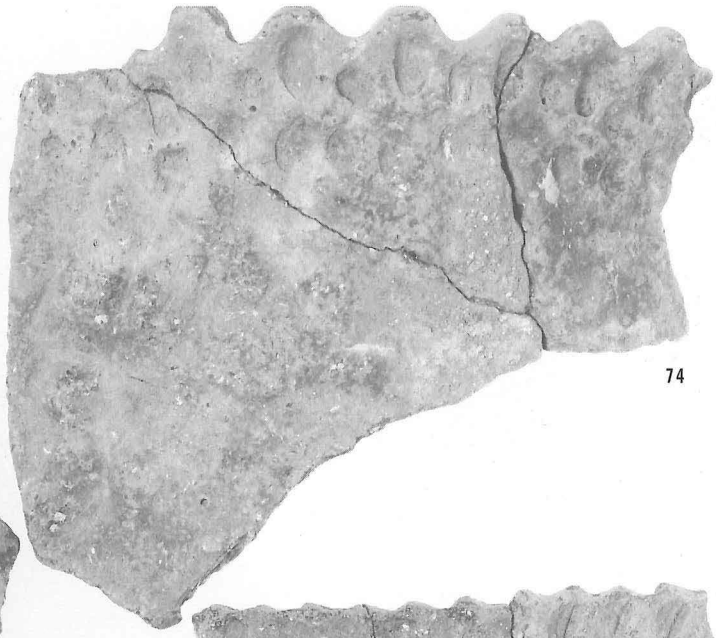
170


172


173

171


75


74

73

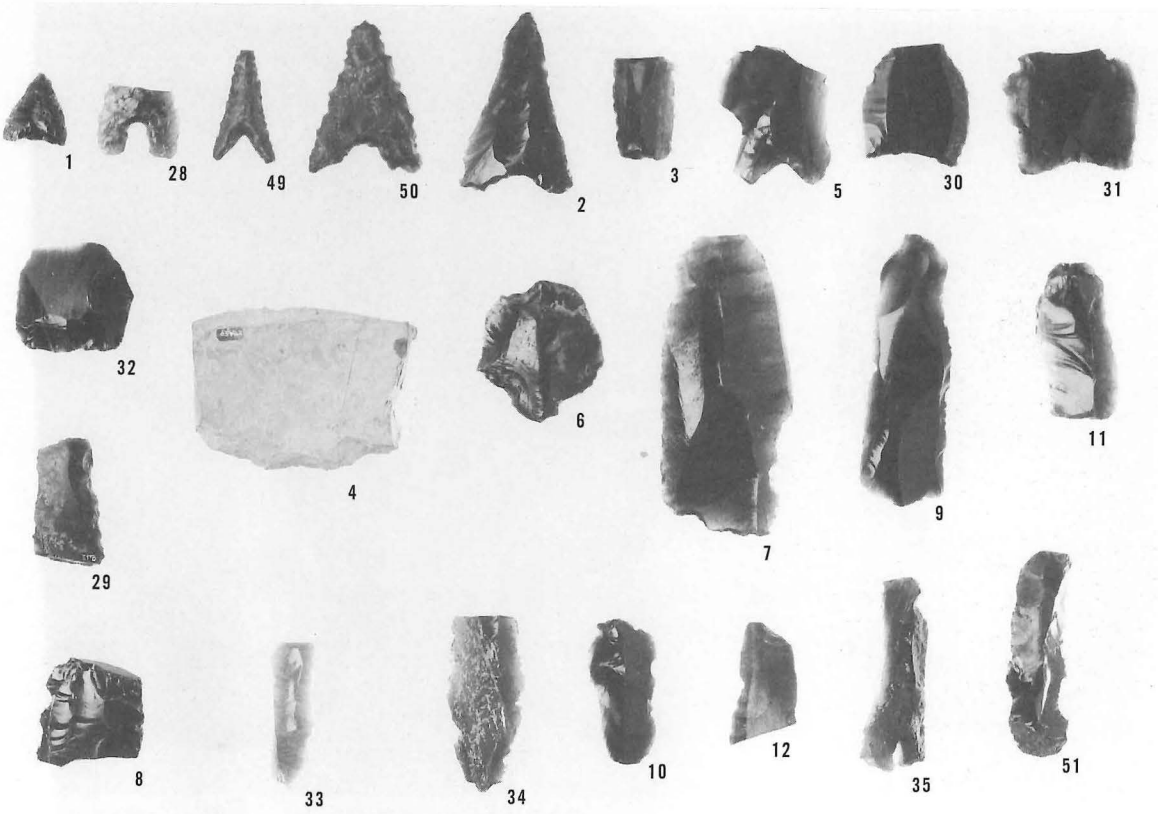
出土遺物⑥

83

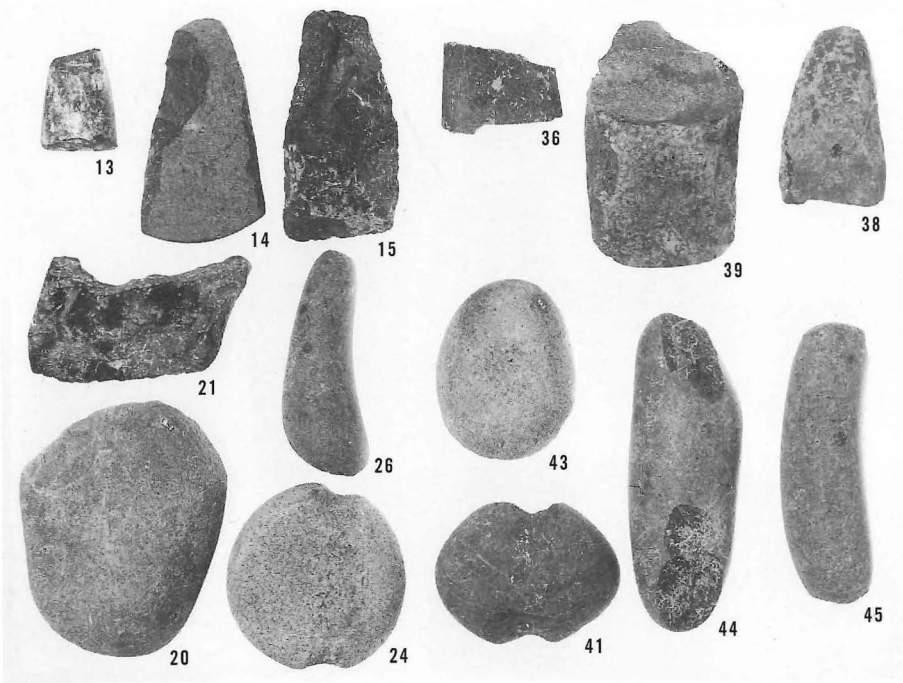
176

177

178

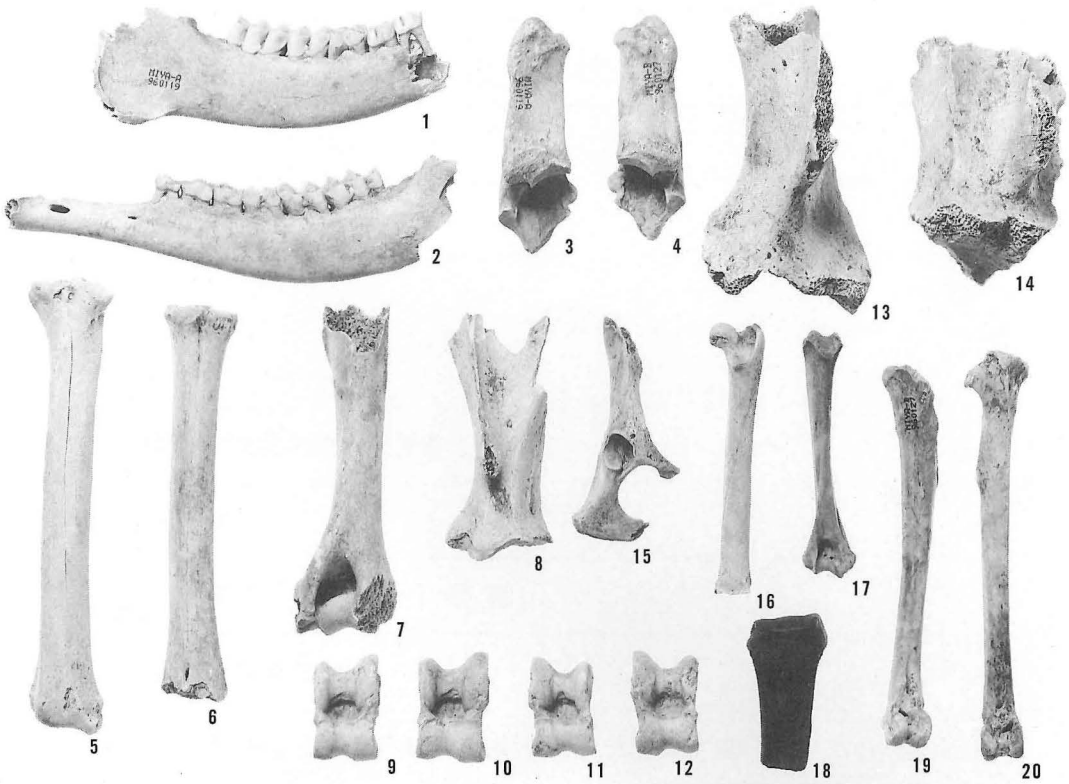


出土遺物⑦

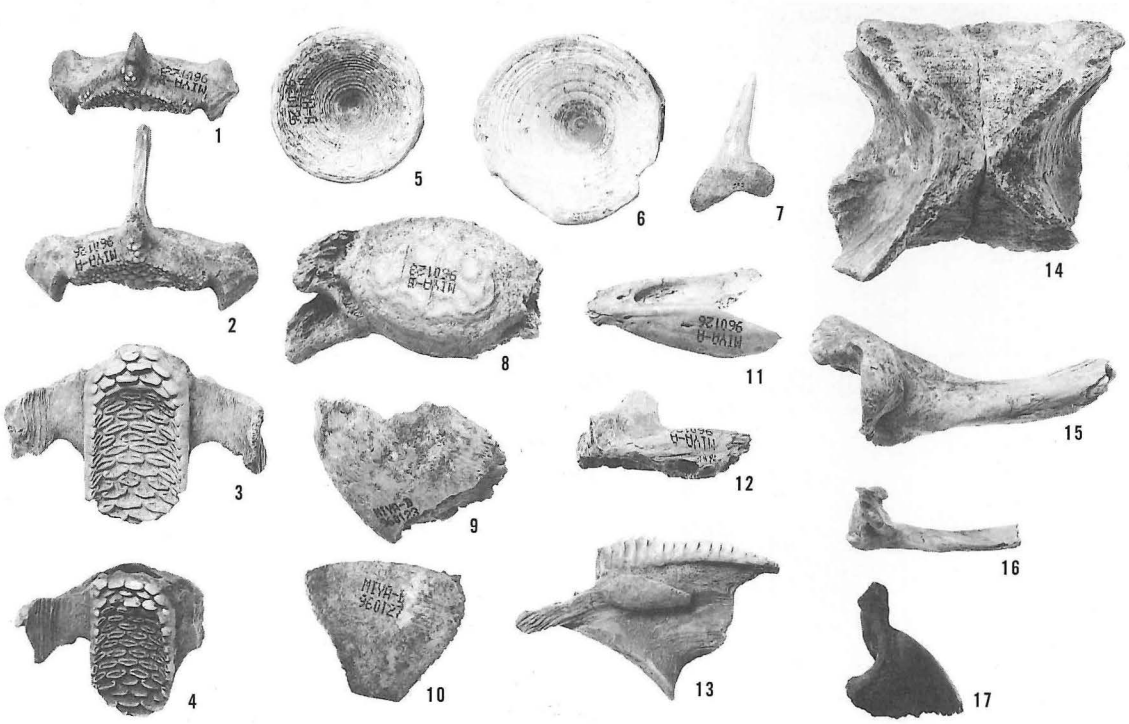


出土遺物⑧

出土遺物⑨



1 シカ・下顎骨(右)　2 シカ・下顎骨(左)　3 シカ・踵骨(右)　4 シカ・踵骨（右）　5 シカ・橈骨(右)
6 シカ・中手骨(左)　7 シカ・上腕骨　8 シカ・肩甲骨(左)　9・10シカ・距骨(左)　11・12シカ・距骨(右)
13アシカ・上腕骨(右)　14アシカ・肩甲骨(右)　15タヌキ・寛骨(右)　16タヌキ・大腿骨(右)
17タヌキ・上腕骨(左)　18ウミガメ類・大腿骨(右)　19・20鳥類・大腿骨



1・2ベラ科　3・4ブダイ科　5～7ネズミザメ科　8ハリセンボン　9・10ブダイ科　11・12ハタ科
13ブダイ科　14不明　15・16ハタ科　17イシダイ科

動物遺存体

図版12

報告書抄録

ふりがな	みやしたかいづか
書名	宮下貝塚
副書名	
巻次	
シリーズ名	富江町文化財調査報告書
シリーズ番号	第１集
編著者名	古門雅高・宮路淳子・川道 寛
編集機関	富江町教育委員会
所在地	〒853-0291 長崎県南松浦郡富江町富江郷170番地8　ＴＥＬ(0959)86-0074
発行年月日	西暦　１９９８年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやしたかいづか 宮下貝塚	ながさきけんみなみまつうらぐん 長崎県南松浦郡 とみえちょう 富江町	42401	6	32° 36′ 52″	128° 45′ 53″	19960116 ～ 19960131	75m²	道路拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮下貝塚	貝塚	縄文時代	貝塚 土器集積	縄文土器 石器 骨角器 貝輪 獣骨 貝	

富江町文化財調査報告書第１集

宮　下　貝　塚

1998年３月31日

発　行　富江町教育委員会
長崎県南松浦郡富江町富江郷170番地の8
TEL0959-86-0074

印　刷　㈱昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007-2
TEL0957-22-6000